になひこめ富士をのづから雪まろけ　闌幽
誰國もやよひの海の道千筋　露沾
夜錦 ながめやる月には狭し日本國　元隣
今朝や春唐まで隣る笑ひ聲　午竿
元日も旅人を見る大路かな　沾德

小

針草も己が芽をかきねかな　春耕
いつまでぞ網の目洩る鮎のたけ　綾部住 沾山
ひく汐のひけばちいさし磯ちどり　交夕
石蕗の葉にあられをほどく朝日かな　調柳

高

夜錦 むさし野の外も山なし富士詣　重賴
同 半分は雪に名高し富士の嶽　大坂 片雨
くちばしや雲井にかけてなくひばり　梅盛

ひえにて

高ねより礫うちみむ夏の海　言水
杜甫詩ノ意ニ當テ歳ニ絶頂一ニ見衆山小

もろとりのをとなひ低し桐の花　路通
見あけては笠に聲あるひばり哉　殘笛
さすが又麥の穂低し（原註）餌ひとつはし　沾德

低

川出る末や花ちる蕎麥畑　口靜
五月雨や隣へわかる水の徑　沾德

廣

むさし野に趣向はてなきかすみかな　風隣
川筋の遠くも曲る枯野かな　岩泉
馬道は茅落てある枯野かな　子堂
我畑のおもへば廣き枯野かな　孚先

長野豐受野をわたりて

角文字やいせの野飼の花すゝき　其角
川境あるまで走る鷹野かな　横几
信太 すぐ道の一筋見ゆる燒野かな　南薄夫
吹ぬきて早稲の香ぞそふ庵の風
麥の穂を鳥井にわかつ徑かな　孚先

狂ひても霞を出ぬ野馬かな　沾德

狹 細

夏やせに蔦の細道もなかりけり　一鐵
芦鴨のをよぎみじかき水田かな　湖風
鴛鴦枕草子 の汗はく垣の若葉哉　龜翁

左右にある垣の枝などのかゝりて車の屋かたにいるも、いそぎてとらへておらむと思ふに、ふとはづれて過るもくちおし。

長 久

玉くしけ明る夜長しふたねいり　佳則
世〻の名よ年魚におもふ岐阜吉野　遥水
ほたはらや濱松が枝の手向ぐさ　沾德

万葉 白波の濱松が枝の手向草いく世までにかとしの經ぬらん

讀て眠りさめて夜長し紙の數　探泉
五月雨に妻の貞さへ見飽けり　三井 笑種

短

夜錦 明安き夜を馬次の眠さかな　松江 宗岷

江戸より京にかへり侍りて、松江維舟宅にて

信太 夏の夜や吾妻はなしに月は西　梅翁
みじか夜は髪にくせつく枕かな　横几

遠

つくしつむに榎を野べの枝折かな　兼豐
低くなるあそこなくらむ遠の雁　孚先
杜甫詩ノ意 決レ眥入ニ歸鳥一ニ
海廣し風筋見ゆる夏の山　蹊口

樹下の庵をおもふ。

大木はわがものならぬ茂りかな　野梅
あの森もいつを目當の夕時雨　岩泉
川すそや雪に見通す水烟　探泉
道〻の橋經て爰ぞかきつばた　河雲
村の火の見えてあぐめる枯野かな　春耕
許渾詩 葉盡孤村見ニ夜灯一ニ
野の末は大空撫る尾花かな　虎銀
畔つたひゆくほどとをきさくら哉　虎銀

鄙穀史

一樹高花明ニ遠村ニ

（原註）嬾

かけるかた星にならぶやほと〻ぎす　且水

近

舟中吟

朝なぎに地はむかひ來る若葉かな　孚先

杉一木鐘見越すべきかすみかな　岫雲

市中の庭の花にあそびて

日こそあれ花に家路は五町程　沾德

遲

櫻川

一日の花をまつ間や三月ごし　風虎

夜錦

不如歸とは來鳴て後ぞほと〻ぎす　季成（かいはら住）

都には袷ぬふなり山ざくら　宗也

閏三月盡を

暦こそあれあすは五月ぞほと〻ぎす　紫塵

雅有

〻のつれの卯月になれて時鳥數そふ春に

またきなくらむ

速

六條はあさがほをそきところかな

東本願寺あたりの人の作となむ。

稲妻も目つけどころの田面かな　沾德

定家

秋の田をてらす稲妻よそへても見れば程

なしわすれがたみに

淺

せきとめて又ながしてやくむ清水　寸竹

草の葉の手にさはり來る清水かな　子堂

深

わけいれば藪ふたつなるかやりかな　子堂

分入て藪は暮たる覆盆子哉　口靜

一尺の蕨の外や松がしは　沾德

奥の院はれがましやな山ざくら　松齋

赤松のいよ〳〵あかし山ざくら　尺草

厚

足跡を犬躾わたる氷かな　尺草

薄

初雪や落葉に水のたまる程　駒角

一けぶりうすしや背戸のことし竹　忘水

寒

手拭ひの黎藘に氷る嵐かな　巴袖

荀子

氷出レ於レ水而寒レ於レ水也

我袖に冬は來にけりぬき入手　忠知

照ながら月力なき枯野かな　仲子

痩馬の毛なみさらなる枯野哉　白椿

野つゞきや雪來ぬ里の一くもり　孚先

定家

さえくらす都は雪もまじられぐ山のは白

き夕暮の雨

蘭ばかり人に並ぶや冬ごもり　春耕

松かけや日あしをしたふ池の鴨　溪魚

かけ栄して北もしぐれぬ家居かな　湖堂

松這て雪の外なる薺かな　其葉（夾根住）

乘かけて氷をしわる夜舟かな　飛泉

慈鎮

舟こむろ氷もしばしあづさ弓をしてやば

せのけさの渡は

霜どけに笹ふみわたす家居かな　忘水

越の淺生を出るとて

朝風や雪の玉江の蒲裏脚　乙州（大津住）

秋の夜にひとつ來る蚊の寒さ哉　子堂

冬は此麥まき殘す屋陰かな　沾德

水仙もをぐらし閨の瓶の水　午竿

（原註）渓

水仙の葉にきほひある氷かな　松翁

日の影にうつぶく冬の清水哉　小藤

日光にしばらく住ける比

袷着て蟬きくを年のまうけかな　尺草

寢かゝるを千鳥にひやす衾哉　子堂

暑

眞桑瓜腹に滿てやけふの照　蘭幽

水無月のけしきやためす氷餅　灌木

涼しきや夏田の畔の晝あかり　智月（大津住尼）

まだ殘るあつさを見込板戸かな　松塢

蠅にいかる目に力なき晝寢哉　子堂

をのが名やあつさにまけぬ力蟬　龜翁

さゆり葉にもし秋風や晝さがり　沾德

定家

夏ふかみ茂みがもとのさゆりばのしられ

ぬほどにかよふあきかぜ

詠林一字幽蘭集 中

夜錦 青柳のかげふむ溝の鰌かな　玖也
万葉 橋のかげふむ道。赤柳のかげふむみち

暖

山並やむさよくてらす日のはじめ　岩翁
草漸く眞土つやよき雪間哉　寸竹
夜錦 霜をかぬ南や紀伊の青蜜柑　殘花
定家 霜をかぬ南の海の濱ひさしひさしく殘る

秋の白菊

片際のはなしや炭の燃るまで　且水
炭やきがかへりや寒き京の酒　龜翁
かげろふに壁ひるかたのにほひかな　普船
夕烏水のむひまの氷かな　三芳野 忘水
うららさや野馬ふりむく朝日影　備前住 兀峯
春雨のつたひてほそるつらゝかな　隨好
雪しるの跡や柳のほしいまゝ　奈良住 友雅

ひかれ來て風又ぬくし山つゞし　小浦 分虫
女さへひとへ肩ぬぐ春野かな　岩翁
茶の花や蝶の來ぬ日のあたゝかさ　殘笛
片陰に冬の日ぬくしちやほの聲　野間 野遊

庵をもとめし人に

なま壁に梅そふ冬の日向かな　沾德
定家 早梅ノ綻ヒロヒテ一鶯稀マレナリ問一眠徙フ百三南一簷日一

蝶飛で口そろへけり池の鯉　午竿

三月三日

蠅も來てけふあたゝけし瓶の桃　沾德

冷

涼

御座すりてふく風輕し蚊屋の鬱　岩泉
暮るより二心なし涼み床　露沾

臨池

來る風やあをりかへさば蓮の科　虎銀
立よれば編笠ひろふ清水かな　材種
螢とる澤邊に麻の頭巾かな　望月

うつ水の乾きをも見む若楓　岩翁
市藤にはさまれ居て、たま〳〵淺

草川にあそぶさて

（原註）釜木 米まきと見つゝ舟出や夏の川　沾德
抱をろす子に肩輕し門涼み　横几
うすものゝ羽織網うつ螢かな　曉雲
螢來て腹に寢卷を掛にけり　沾木

途中吟

汗ほして見かへる井戸と柳かな　未陌
范至能 黄一塵行一路汗如レ漿　少駐一傭一家一
澈一井一香一借一興門一前綻一石一坐柳一
陰亭一午正風涼

道すがら風のうはさの涼みかな　連阿
舟よせて橋を日よけのすゞみ哉　喜水
生垣に身をせばめても涼み哉　松塢
座して見よ岸根暑くと沖の舟　島風
夕かげの柳にもやへすゞみぶね　沾山
家隆 淀川の入江の岸の柳かげつなげる舟に涼む里人

稲一穂門田に涼む目當かな　沾德
家隆 山里の門田の稲葉みわたせば一穂出たる夏の朝露

曉

夜錦 幾里の夢やのこして寒念佛　小鳴 粗工
蚊の聲のしらむにさむし軒の雨　沾德
門松のそよめく末や山かづら　遠水

曙

年の花もほの〳〵明やはつざくら　季吟
あくる夜や雪に埋めぬ舟の脚　寸竹
後土門院御製 波の上ばはや降消てこぐ舟のともなもまたぬけさの白雪

夜を殘す陰もかぎれり松のあや　午竿
（原註）文顧 阿 吳竹の江山のかげのくしき夜になく鶯の聲ぞ明ゆく

清遊院 竹しげき片山林明やらで殘れる月にうぐひすの聲

此雨首、予つねにとたふ。古今の句をみるに、形容おたじからず。句をたくみに並ふべくもあらざれば、句慶を殘して後の作者を待のみ。

朝

朝風に帷子輕し花あやめ　露沾
いざくまむ年の酒屋のうはだまり　其角
齒朶と梅見よ明る戸のうら表　且水
東西へゆく烏あり朝がすみ　遠水
玉藻一　おきいでゝ又何どをいとなまむこのよ明ぬとからす鳴也
狐火につきてひらくや今朝の菊　探泉
つばくらに起をくれたる朝戸かな　子堂
朝な〳〵萩を見にゆく馬屋かな　歡來
あくる戸に起て良うつ芭蕉哉　桂堂
青麥に目ざましにゆく田舍哉　暮楓
（原註）鶺鴒　かやぐきの燒火ににぐる朝戸かな　沾德
雅親　くれ竹の軒の下なる小枝まで驚なるゝ窓のあさあけ

晝

夜錦　さよの中山にて
これもいかにさよの中山はなのひる　梅翁
雅世　朝露のひるまにゆくもたのづから夢さや
いはむさよの中山
午鷄
青麥のおくぞ晝なる鳥の聲　沾德

夕

花を踏て洗足おしき夕かな　在色
風に消て風にをぐらき藪蚊かな　露沾
汐滿て陸の火に飛ぶをほこかな　春嗣
蚊柱に夢の浮橋かゝるなり　其角
初雪のくもりは藪の雀かな　探泉
堂涼しむれつゝ人の戻るあと　松齊
柴の戸や燕たて込む鐘の聲　溪魚
名月や門に子共のあそぶ暮　春魚
霜見よと草履や干る夕日影　仲子
木のかげ岩のはざま心〳〵にあそびて、はや日もいりぬ。
暮までは下戸ひとりなる花見哉　口靜
（玉半山）醒ー客忘レ言醉ー客喧

ぐさむらに馬引出すかやりかな　素楊
おなじ人の又たつ橋や夕涼　岨木
人聲は青葉にのこる夕かな　鸚水
生垣の夕暮ふかきしぐれかな　詞賤
影見むにはや木高かれ揚灯籠　中津住湖竿
比企谷にてひじりを見て
笈すへて見る夕顏や右左　松齊

平

上野護國院にて
青嵐筑波まで目のとゞきけり　尺草
たいらなる山や花見のあしだまり　沾德
水と羽と合せゆく鵜や夕すゞみ　沾德
陳簡齋　遙ー汀横ニ薄ー暮ニ獨ー鳥度ニ長ー津ヲ

夜

その序星の名をとふ今宵かな　春魚
明ば又裸身はぢむ夜振哉　溪魚
むかしおもふ夢にやつゞく鉢たゝき　風松
誰庵ぞさし入月に京はなし　細雨
闇の夜や門は團の音ばかり　文鱗
更やうを見定る夜やけふの月　沾德
定家　明ば又秋の半も過ぬべしかたぶく月のおしきのみかは
梅飛てふすまやあかき冬の月　磊珂
窓の月わが寢まとひか置火燵　殘笛

喜

風虎翁に申つかはす。
夜錦　春や先貴方にむかつて岩城山　梅翁
うれしさに寢かねて宵の年も明ぬ　沾德
春に明てめぐみをそふや恩の數　浮萍
我ものと子等こゝろよし門の松　龜翁
ひろはれてゐびすとならん扇かな　雅雀
妹は子の丈きそひみるあやめかな　芥口
我他の相に春あるあしたかな　淺山

哀

夜錦　（原註）象寫　ささがたの月や流人をたすけ舟　冥之
利長卿ノ得レ罪ー風霜苦全レ生天ー地仁

夜錦　野送りの色や尾花の袖の露　未得

追悼

同　さらでだに秋やうき世の八九月　松葉

秋風のぬけがらとなる扇かな　巳哉

巳哉子作ニ此句一不レ經レ日卒ス

山行

猿をきく世すて子に秋の風いかに　芭蕉

親もたぬ身は年〳〵のさむさかな　路通

それにさへ上手下手あり鉢たゝき　立唫

犀がねに聞すな冬のきり〳〵す　歡來

京の秋物こそたらね海士の家　兀峯

亡夫の七回忌をとぶらふに、我と同じ道なる人々の來りければ

かゝしにもあはれさまけじ尼中間　尼智月

妻にはなれ侍りし人をいたむ。

夕顏や幽黑しらけし閨の隅　釋淵水

（原註）仁蘇賦　幽黑退ニ悲於堂隅一兮進獨ニ拜於牀垂一

辭世

此句は澤庵和尚出羽國にながされ侍りし時の作となむ。

霜月やあるはなき身のかげぼうし　忠知

歌舞妓子の死せるをいたむ。

折釘にかづらや殘る秋の蟬　其角

辭世

とひ來かし茶扨の枝折雪の跡　茗風

子にはなれ侍りし比

菊枯て世話やむもうきまがきかな　夏雲

猶子、母にはなれ侍りし比

柄をなめてたづぬる母やぬり團　沾德

世のつねをとはず語りや鉢たゝき　艶子

追善

靈あらばそのさま氷れ我なみだ　好紀

追悼

我もやがてまいるぞかゝるぞ袖の露　梅翁

加賀少納言なき人を忍ぶるともいつまでぞけふの哀はあすの我身を

（原註）基明大澤侍從三十一首の哥勸進ありしに、烏丸亞相公の狩場風といへる題をたまはり侍て時過けるほど

に、元祿四のとしの春と冬とに兩君かくれ給ひければ、むなしく短册を見侍りて

世をふたり狩場の風と書すてけり　沾德

樂

何かこのうへず寒からず年の暮　道寸

辭世

夜錦　死ぬる迄生だは言を月夜哉　德元

身の樂や花見る時と一眠り　元隣

あかつきに漸さめて月見かな　露言

（原註）醒

我手さへたゞはあそばぬ火燵哉　立志

をのが賀は錢やたのしき薺賣　孚先

夕涼みよくぞ男に生れける　松濤

芹つみて腰のす時を廣野哉　且水

詩經ニ采ニ采芣苢一薄言采レ之

つゝがなく大晦日の寢酒かな　蚊足

李白全レ身以爲レ寶

七夕にねがひやは寢て莊子よむ　沾德

莊子父邪母邪天乎人乎

花もたで花見る事よ國の恩　春魚

國原よ我屋もひとつ花の春　忘水

萬國見をすればくにはらは

堤より醉てころべばすみれかな　帆平

宗祇さくらがいかへさば野べの菫かな

ちる時の心やすさよけしの花　尾陽越人

櫻川　岡部任幸

ながゝらむ命のほどや年わすれ

種おろす賤を拜める野路かな　松塢

百花なを折て芳し梅のかぜ　大坂定明

これは元祿五のとし、京江戸大坂の俳士の百人一句を勸進せしとて、嵐雪かたより其一軸見せ侍りければ、其志を稱して其發句をひろふ。

船中吟

船頭が茶碗よ誰か夕すゞみ　横几

杜子美ノ詩ニ茗飲蔗漿携レ所レ有斟ニ量無レ謝ニ玉爲レ紅

北殿の月見に問む渡世なし　沾德

夕顏としこそなりはひにもたのむ所すくなく、ねなかのかよひもおもひがけねばい

と心ぼそけれ。きたどのこそきゝ給やな
どいひかはすも聞ゆ。

六本木の庭の花にあそびし時、花を給はりけるに、夜花を

つゐこけて寝よとの鐘や花の陰　同

杜子得レ醉卽爲レ家

家路とやしづかに歩む蛩うり　花蝶

師兼

あしのやのなだの塩路の夕なぎに舟をし
かへしうたふあま人

蠅をうつ小僧眠れり膝の蠅　尺草

澹紫岩漁父ノ詩

翁自酔眠魚自樂

信太

家〳〵のおもひや瓶の新酒古酒　沾柳

よき程と紙子あかせぬ嵐かな　沾徳

邵康節

若求ニ駄ー驥一方乘ー馬　只ー恐終レ身無ニ馬ー騎一

田家木

世をとへばやすく茂れる榎かな　自準

年わすれたり跡へはとりにかへられず　紀子

來根川にあそびし時、農家なる夜合をもらひて幣居にうつし侍るとて

市に出てねるを我名ぞ合歡の花　沾徳

愚溪ノ對以ニ吾之愚一而獨好レ汝汝惡得レ避ニ是名一邪

〔愛〕

夜錦

秋の野を手にさげてきく虫籠かな　貞徳

さいたりやこよひの月に丸太舟　玄札

名のつかぬ所かはゆし山ざくら　湖春

春秋におもひみだるゝ花火かな　風虎

哥とゝ葉とを名とせりやほとゝぎす　巴袖

杜子美ノ詩

拔ー垣竹埤一梧十一尋　句讀ノ格ニ記ス

万葉

たちばなのみさへ花さへその葉さへ枝に
霜をけとましときはの木

あの燕花にあぶなしこのつばめ　任ゝ子

一沼のあやめはおもひ〳〵かな　我黑

舟引が先を折とる柳かな　遠水

夜錦

ちる花にゆくや心のこまざらへ　水野林元

同

井の底の月をもたぐるつるべかな　岡山永由

はご板を子にかこつけてもらひけり　乃龍妻

櫻川

吉野秀可かの山の花の句所望に

花はよし野けによしや世のなかんづく　季吟

いさ折て人中見せむ山ざくら　雪柴

名月や池をめぐりてよもすがら　芭蕉

家鹿

秋の月は池の小舟をさす棹の幾めぐりせ
ば有明の月

ちるは〳〵醉のさめたる夕ざくら　自悅

我子のみ先ほめて見る躍かな　淺幽

竹うへて此後花は目數奇かな　沾徳

東坡可レ使ニ食無レ肉不レ可ニ居無レ竹

半井

月は滿る人は見て居るこよひかな　慶友

夜錦

うづみ火にうづもれぬ名や池田炭　重安

同

鐘とめに衣さふるや寺のはな　梢蟬

釋

ぬすまれて垣に情あり菊の花　春耕

雨つよく花に折るゝこゝろかな　直曲

一鎌は苅殘してよあやめぐさ　亦魚

我飽し花瓶見よき牡丹かな　旭峯

葉のなきも草のひとつぞつく〳〵し　作者不知

茶の花や利休が目にはよしの山　素堂

（原註）香龍

こかしふるさゆに一重のさくらかな　普船

うらめしやあちらむきたる花椿　虛齊

かた〳〵のかざり殘さむ門の梅　不貫

百菊に酒の欲ある日數かな　雅雀

古きほど下座になをす雛哉　百川

我儘に咲ても折や野邊の梅　梅扇

風にかくせ小萩がつゆのをきどころ　湖隣女

元日

けさ見れば發句にてはなし春の興　沾徳

三月三日

汐干見ぬ田辛螺も貝のひとつ哉　調和

松ばらやたま〳〵あるが山ざくら　枳風

まつもとにて

初雪や四五里へだてゝひらの嶽　去來

手とゞかぬ琴や雛の馳走ぶり　且水

紅葉賀

ちいさき御程に、さしやりて申し給御て
つき

或人の妻のよ所より猫の子みつか

り見侍しに、ひとひ二ッの間にひとつ死に侍りければ、二日ぬしへ返し侍るとて、心よりうきめをみつの猫の子のかずさへたらでかへすかなしさ、とよみてつかはしけるとかたり侍りけるを聞て

猫の子も妻こはぬ間ぞ人の愛　沾徳

松葉籤でちる花もどせ里の子等　虎銀

ふところへ落るはすてぬ木葉かな　忘水

常にあひともなふ人〻、こよひの月はこゝにてや見む、かしこにてやといひさだめて、日のうちより出むかひ、待まうけたる月、さすがに名をえしひかりなりと口〻にいへり。さるにつけて昔今のをの葉のかず〳〵思ひ出られ、我愚なる心にわきまへがたき事の、ふと出くるか此人〻にとふ。こよひは名高き月といひ傳しその名は何といふ名ぞといへば、人〻笑へり。

又いふ、名にしおふ花の都、なだかきひえの山、なにながれたる月のかつら川、などこそいへ、今宵の名とさしていはむ事思ひよられず。月とばかりは四季ともにいふなり。秋といはむには、きのふもおとゝひもいふなりと、共に笑ひて

しらぬ名に見とるゝ月のこよひかな　立圃

おなじ名やこよひに似せて夜〻の月

貴

禁裡を拝見して

殿高しあがらで涼む縁の下　佳則

とり分て殿の威を見る鷹野哉　龜翁

賤

世や安き帷子時の蚤が家　遠水

おなじ宴に侍りて

いやしさの見えて身安き木平かな　沾徳

あさがほに雨もりたのむ屑屋かな　望月

蹲之たのづから軒の板間やかくすらん枝さし

おほふ松の落葉に

貞ぬぐふ田子のもすそや五月雨　其角

伊勢大輔いかばかり田子のもすそやそぼつらむ晴

間もみえぬ比の五月雨

此句は哥をとれるゆへ、哥しるすにをよばねど、五文字哥を力とせざるゆへ、哥一首不レ略しるす。

小角豆食妹が垣ねは荒にけり　心棘

堀河院百首むかしみし妹が垣ねは荒にけりつばなまじりの菫のみして

是か五文字力あるゆへ哥を略せず。

住居かな樗もとめて片ひさし　松齊

賤の子の籠に留主もる田植かな　杞柳

誰爲ぞやもめの田植日暮まで　東金有竹

早乙女や粮草はちぬ畫かれい　遠水

(原註)飼

(原註)空から家のさびしく並ぶ涼かな　子翠

老

信太年越の夢路にさへや老の坂　風虎

同　大かたは月をもめでし七十二　釋任口

老てけふ獨花見の留主居かな　岩翁

虫干や見ぬ書に耻る人は何　横几

鳳山樓氏白一首紛一如成ニ底一事一蠹魚徒自老ニ青一綱一

老が身よ日帳に耻るとしのくれ　喜水

數つめば大かたくるし除夜の大豆　乃龍

(原註)蔣ながいきの耻しらぬ身や土用干　松雨

垣をへだてゝ念佛の聲を聞て

初夜申すこゝろや木葉髪や霜　沾徳

定家年ふれば我黒髪も白糸のよるべ佛の名をとなへつゝ

若

幼

手ざはりも若木の梅の色香かな　且水

基綱うらわかみ立枝がちなる梅の花咲かさぬべき色香をぞまつ

若竹にまだたけのこのにほひかな　龜翁

童部は大晦日を宵寢かな　望月

(原註)遂打とげぬ子共は宵のきぬたかな　岩翁

過し夏元服しければ

とめ袖やかさねはじむるけふの菊　龜翁

童部は人のたのまぬ茶摘かな　尺草

【富】

見渡せる村を富すや夏木立　春耕

民の化を幟につゝむ大路かな　眞崎冬蟲

【貧】

貧寺月といふ題にて

軒はあれて寢火見る月の横川哉　吟松

退院の會に

首陽には蕨もあるを此隱居　釋任口

寢がへりの音も淋しき紙子かな　岩泉

貧しさやとみの物ぬひ衣がへ　材種

枕草紙（原註）頃人のもとへさみのものぬひにやりて侍ほど

【勉】

母かれは娘やおふのさくら麻　淺幽

丁元珍ヘ婦汲溪ヘ頭水人ヘ耕タガヤス卿ノ際ノ田

通り町に住ける比、試筆

去年やきのふつとめて休む車牛　沾德

漁父の子の罪ならはする蜆かな　孚先

櫻川溫公の枕まろめむ窓のゆき　川路繁常

玉や糸屋師走のはても仕業かな　春魚

渡し場や人行たまる年の市　溪魚

後柏原院御歌かはらめや都の市の住居にも春のとなりのとしげき世は

枯野さへ麥に追るゝしわざかな　沾德

【忘】

憎からぬ朝寢や雪の庭おとこ　幽山

墓所にまうでゝ

夏草の塵はく迄を手向かな　忘水

定家小山田に茂る五月のうき草は我こゝろより種やまきけむ

【先】

冬にけさ霞や春のさきぞなへ　小宗甫

夜錦波や時雨山にさきだつ紅葉鮒　風虎

爲相山にさきだつ庭の紅葉ゝ

並びても先だつ舟や初鰹　岩泉

藪陰や根芹見てをく大晦日　春耕

何事も梅の跡なる枯木かな　沾德

【後】

いつまでか蚊をやどせしぞ冬の菊　忘水

夜錦郭公有明の月や置みやげ　長州住友知

明る戸はきしる音なりほとゝぎす　龜翁

柴苅の蹴折し跡や路の獨活　彦根湖虹

はみ殘す鹿の跡追ふ蕨かな　沾德

【進】

夜錦月もよしいざあたら夜をいせ躍　富長

あたらよをいせの濱荻

行事かとおもへばとりぬ辻相撲　遠水

櫻川大力や我身にたのむ關相撲　如白

遠乘や鞭は柳のあり次第　沾德

【退】

謙

夜錦書初や一紙にゆづる寺屋敷　釋白話

隱居ありて翌年の試筆となむ

いかめしの我影法師や丸頭巾　白椿

【清】

草堂をとはれて

夜錦淺くともよしや又くめ夏茶碗　勝毛山釋義山

櫻川輕き水に重らぬあしや月の舟　風虎

楊梅の落て際つく清水かな　未陌

うちこみて置どもすめる種井哉　岩翁

水仙に人の濁りの隈もなし　露沾

初雪の疊ざはりや樓櫚箒　尼智月

夜錦秋の色の白きは是かけさの露　中島正俊

水をふく風あびせけり松の月　探泉

王朔公山ノ月入レ松金ニ破ヘ碎サイ江ニ風吹テ水ヲ雪扇ホウトウ

若竹につれて立のぼる朝日かな　崎山良隆

飛越て又立かへる清水かな　作者不知

帷子を祝し初けり淺みどり　露沾

煤はきの疊もたすな梅の花　沾德

すむ水に味をうらむる糊かな　孚先

さく梅の水影すくふ朝日かな　且水

濟海寺八景のうち驛亭洋色といふ

もと

むまや路や泥も嫌はで落る花　沾德

霞肇 馬路ニ春泥ニ半是花

はき庭や青梅落し跡ばかり　尺草

濁

うへし田やみどりの底のうはにごり　遠水

輕

茂る葉も人には輕き袷かな　望月

まはされて渦にとゞまる一葉かな　溪魚

汲あげて落葉をこぼすいは井かな　川越住 岨木（原註）石

庭の塵一日はらふやなぎかな　春耕

俊成 春くれば玉の砌をはらひけり柳の糸やと

ものみやつこ

地につかぬうちを落花のすがたかな　忘水

霞つゝ花ちる山の朝ぼらけ後にや風のう

さばしられむ

重

今ひとつ山見越させよ夕がすみ　忘水

動　躁

歳暮

松賣やさらば都の常も見ず　寸竹

洗ふより圍爐裏にぎはふ冬菜かな　浮萍

蟹も人もぞよめく沖の塩干かな　仙化

僧の身の寢心とはむ年の暮　龜翁

（原註）鳴 なりやめば又市になるあられ哉　岨木

靜　閑

夜錦 門並の禮者や春の立すがた　空存

緩歩

かぞへ來ぬ屋敷〳〵の梅やなぎ　芭蕉

杜甫ヒ問レ柳尋レ花到ニ野亭ニ

雪の戸や若菜ばかりの道ひとつ　言水

軒に來て鶯音なし雪のくれ　仄船

夜〳〵やをしねに吠る犬のこゑ　遠水

沾德と兩吟せし比

物音は椎の實（原註）映ゑめる庵かな　午竿

今朝や春と舟なき海の一ゆるみ　岩泉

ちかき海にその名ありと、房總波

をへだてゝのぞむ。

活舟や東風（原註）搖ゆりそむる津乎の浦　子堂

人は寢て心ぞ夜を秋のくれ　槃墩

鶯よ誰呼たがる柴の門　沾德

遺逸院 鶯よ我やはあるじかくれ家の心もしらず

人さそふらむ

我門の松見あげ出て四方ぞ春　春魚

足跡を野中の梅のあるじかな　沾德

炭木伐る音あらはなり嶺の松　不貫

五月雨に氣を轉じたる柳かな　哂有

烏さへ形のやさしき枯野かな　上田 孤松

元日の野は人なしや眠る鴈　露森

宮からすいつ野心ぞ神無月　春耕

定家 霜白し神の社の朝烏なく音淋しき冬の山

もと

池亭納涼な

夢は池に沉む晝寢や魚と蓮　芳津

人影をのむ魚もあり池のはす　沾德

蕪陶 行傍ニ白蓮ニ魚未レ知

（原註）擬 鐘なりてつく人見るや秋の野ら　春峒

蕊鐘 有明の月の行衛をたづねてぞ野寺のかれ

はきくべかりける

松かぜに蔦の引あふ（原註）歸ふとびらかな　子堂

日のいりは氣にさはりなし冬木立　桂葉

春の江や礫ひろがる水のあや（原註）文　良隆

鷺のなく柳や魚の下がくれ　横几

陳后山チ 路ノ暗鳥ノ遺レ音江ノ清魚ノ弄レ姿ヲ

隱者をとふに、あはず。

我來たと手折めにしれ庵の花　未陌

降雨を蔦（原註）編したみたる軒端かな　岩翁

花に來て晝寢所や小松原　百里

春雨やなを袖ぬらす山家集　史邦

田上川をこゆるとて

谷こしや空ふく風のかんこ鳥　乙州

春雨や枕崩るゝうたひ本　盤子
夜錦　淋しさにたへたる秋の寢酒かな（原註）塙
生垣の夕暮ふかきしぐれかな　宗鼎（松江）
この庵の薪ふみ來し落葉かな　詞賤
朝戸出や柳の日さしのび〳〵と　孤雲
老僧と晝間をかたるつばめ哉　岩翁
水札（ケリ）なきてあづま屋淋し角田川　沾荷
尺草

山家に住ける比

霜解や都へ出し足の跡　沾德
五月雨や桶の輪切る夜の聲　芭蕉
山住や寢ながら歩むさくらがり　駒角
うの花にかくれ家いさむひかりかな　露沾
菜をくひに來むといひつゝ初櫻　沾德

章魚物

九日驅（クチノ）馳一日閑（ナリ）

蓼（タデ）ばかりわざと植しや柴の門　寸竹

對客

米ばかり去年の物なり芹薺（ナヅナ）　屹平

杜子（ヘンヘキ）

盤餐二白鷺谷一口栗二飯煮二青泥坊一匠芹（ノヲヘニニル　セイデイホウテイノヲ）

親

いつとなく我座さだまる火燵かな　孚先
片脇の咄や炭のもゆるまで　沾德
子の愛に雛の酒のむ夫婦かな　横几
人にあかぬ人のところの火燵かな　彫棠
母のとぶかたに目やふる巣の燕　湖虹
片親のあるをちからや玉まつり　彫棠
炭つがば咄たるまむこたつかな　文桂

後柏原院御歌

おもふといひもてゆけば埋み火のあらはれぬしも下にのこらず

疎

時もこそ梅さく宿のちりほこり　虎銀

強

夕立にすがたを殘す蘇鉄かな　風松
たけのこや芭蕉生ぬく今朝の雨　淺幽
猪の吹かへさるゝ野分かな　勝所（ショウ）正秀

弱

雪に水かくるやうなり花にかぜ　昌雲
根のきれて堇ところぶ童部哉　溪魚
初蝶の羽もあやうきあそびかな　永水（根）
落る葉にうたれて落る木葉かな　摘山

骨柏

山ふかみ有明がたの霜のうへに風も音せずちろ木葉かな

明

あかし丸といふ舟にのりて、浦あそびにまかりて

夜錦　月の舟これほの〳〵やあかし丸　松葉（明石住）
同　天もあかし爰も明石の浦の月　露山（同）
同　はれきりておもひ隈なし秋の月　豐方（岡田）
うなづくは空と水との月見かな　愚侍（小野）
日は入ど暮ぬは梅の木ぶりかな　栢舟

雨後

壁落て枸杞（クコ）の葉青し雨あがり　寸好
人かけを地に黑く見むけふの月　栢舟

後赤壁賦

人影在レ地仰見二明月一ヲ

この月に足のうらみる平砂かな　未陌
冬あかし家にそふ木と土手の草　沾德

闇

火をふりて片手ぞ下る鵜飼舟　巴袖
螢見てもと來し畔は闇路かな　岩泉
入船や月夜に黑む浦すゞみ　杞柳
月の夜も川波くらしかいつぶり　姑川

顯

拾石を雪のそだつる春日かな　好柳

密

幽

夜錦　鶉こそありとは見えて粟ばたけ　休甫
同　うづら鷹立はなれにくし草のもと　風虎

桐邊

立はなれにくき草のもとなり

麥ふかき徑（コミチ）横ぎるうづらかな　沾德
草刈の笠のみ動く夏野かな　松水
松むしの音にほぐしたるかゝしかな　花里

日光へまかりける比

みし山やどこへもてゆく今朝の霧　岩龜

寒菊を躾て見込むや濱庇　松柏
千代といふ名に見出されり藪椿　永水
霜どけに麥一畦の徑かな　岨木

稀

花とへば口のそろはぬ樵かな　溪魚

遍

貧なるも雪にはしれぬ屑屋かな　望月

舊

木母寺にまかりて

そのかみをおもへば細き柳かな　花葬

（原註）宗祇墓
桃園定輪寺にいたり、新式の事な
どおもひ出て

夜錦

殘りけり名の虫ひとつ草の陰　幽山

同

（原註）二乘寺
丈山の葬宅にて

信太

竹の子や虎すみあらす人の跡　楚良

（原註）鎌倉建寺
宗長法師の墓にて

同

月花やその玉うづむ苔の下　鸚水

おなじ比碑をよみて

分て此三月しれり石の銘　沾德

長崎住
卯花に乳母なつかしき垣ねかな　道實

寺にあそびて

目もふりぬもとの住持の影は月　芒風

杜子ハ昔ヒカツテ此寺ニ憶ヒ曾遊處ヲ橋邊ニ再渡ル時ヲ

柚の花よ仇名あだ醉むかし誰　沾德

杜牧子
十年一覺揚州夢贏ヲ得青樓薄倖名

新

改

物うかりけるとしを越て

夜錦

借錢もきのふの淵ぞけふの春　宗鑑

同

若水の音もことなり車井戸　暫醉

龍瑞院

信太

老の花見心新らし藁草履　維舟

本庄安樂寺にまうで〻

同

新地にもかくなるものか梅のさね　梅翁

鎌倉をいきて出けむはつ鰹　芭蕉

花鳥は煤けぬ春や谷の庵　岩翁

有智子内親王
栖ル林孤ニ鳥識リ春澤ヲ隱ル淵ニ寒ニ花見ル日光ヲ

朝夕の物もめづらし日のはじめ　探泉
煤はきて寢心かはる疊かな　且水
朝戸明て去年と見合す日ざし哉　松塢
川越ど洗はでかへる若菜かな　雅雀
垣朽てみどりにはぬる柳かな　沾德

樂天
黄ノ梢ノ新ノ柳出ニ城ノ墻ノ

夜錦

松かぜやと新らしき春の門　稻邊

同

雨きのふあつぱれかうこそ日の始め　立波

釋

空存

誹林一字幽蘭集　下

色

黑き馬に馬場の卯花暮にけり　蘭幽

阿佛
白濱に墨の色なる嶋津鳥ふでのをよばゞ
繪にかきてまし

なを春の梅の幹なる青葉かな　源棟

夜錦

白炭や燒ぬむかしの雪の枝　忠知

見えすきて綠につほむ柘榴かな　寸竹

信太

松に蔦片手うちなる時雨かな　在色

夕立やなを黑かりし駒の色　普船

櫻川

夏の色も竹先しるや青すだれ　風虎

雨の日や門さけてゆくかきつばた　信德

石川の石より青しなつ木立　尺草

しばらくは茶色になりぬ若楓　曲水

夜錦

青き事水より出て水菜かな　伊勢村重安

白罌粟の虻そよぎ出す野風かな　溪魚

並木青葉といふ題にて

たかびくも青葉そろへて並木かな　沾徳

長屋王
松ー烟双（ヒテ）吐（ハキ）レ翠櫻ー柳分（ワテ）含（フクム）レ新

朝露にぬれ色見する茄子かな　晒著

一かぶの山吹のみぞ庭の雨　岩松

山のはやほそうたなびく初さぐら　宇八

三百六十番歌合
いつまでか雲な雲とも詠むらん櫻たなび
くみよし野の山

信太
切口や虹を見せたる山西瓜　加雲

降雪を波間にくふか江の鷗（原註）食　飛泉

白鄰蹋くまや夜明る鳥の聲　口静

闕の戸は雲より明てなく鳥の聲に中〳〵
夜ぞ殘りける

夏草の色にはほめよ園の紫蘇　竹塢

宮谷（サク）の檀林にあそびて

山〳〵や日輪つぼむいはつゝじ　虎銀

松かぜの露やきはづく垣の蔦　龜翁

誰か紅と蓮（原註）だけ低き野路の池　沾徳

行かたや夕日にむかふつゝじ賣　岩翁

にくまれて若葉や見する花の雨　午竿

張南軒レ莫（ナ）レ嫌紅ー紫都吹（スベテキ）盡（オツノ）新ー綠滿園選（カナリ）可（ヒ）レ人（ニ）
遺逸院
花のあとはうす紅に薄もえざさてしもあ
かぬ風の花哉

音

聲

川音の時雨の亭や屋形舟　未琢

あの男筏に寢るか小夜ちどり　山夕

八九月風やいづこのほらの貝　嵐雪

虫の音や家にいかなる古ばしら　東潮

何げなき間をきく時のほとゝぎす　孚先

曉の螻（ケラ）の音くたくきぬたかな　花葎

江の島よりかへりて

宿涼し耳に殘れる波の音　松齊

星寒て重たき鴨の羽音かな　肅山

風のよはりて笛の筒音かな　東籬

櫻川
夜半にうつ砧は夢の敵かな　大坂歌舞妓

蟬一聲羽にしほりけむ夜の露　溪石

鳳雅集
空はれて稍色こき月の夜の風に驚く蟬の
一聲

鶯の聲なかりせばめじろかな　玖也

なくかたの寺をとはする雉子かな　雅雀

木葉來て小垂（ヲタレ）にたまる嵐かな　志蹊

盃に落よ芝野の夕ひばり　杏林

谷越は二聲きかむほとゝぎす　東兼（企）世

木から木へとぶ間を蟬のやすみ哉　道枝

五月雨に鉦鼓のにぶき野寺かな　釋慈白

足になるはすごき山路の落葉かな　源棟

章蘇州ノ葉ー落聞ニ犬行ー
温庭筠
紅ー葉聲ー乾（カヘリテ）鹿在レ林ニ

ほとゝぎすなきて障子の紙厚し　午竿

夜も明ば肩臂（ケンビヤ）うたむからころも　正友

鳴立る蟬にはしるか下り坂　沾徳

千鳥なく方や留主なる海士の家　横几

響

つきがねのひゞきに動く柳かな　才麿

暮の蟬ひゞきうけつぐ寛かな　不貫

光

くだけてもそつこそなけれ波の月　三峯

天の戸のすかし物かよみかの月　光貞妻

花ならで草に火ともすほたる哉　昌雲

櫻川
川水にちりて跡なき花火かな　萬年子

光るかたおもへば狹し水の月　孚先

目にちりてつかむに高し飛ほたる　春嗣

挽臼の哥やほそめの窓の月　調水

夕月やをくる樵のかげぼうし　林巣

香

木〻の香をのが物なる炭火かな　且水

菊の香や瓶（カメ）にもあまる水に迄　其角

柚の花のその中の其にほひかな　普船

菊の香に酒はまぎらず庵かな　春水

我門やあやめ一間香一間　沾徳

直

若竹のすぐにあそばぬ人は何　磊珂

遺遺院
すぐなる心と見るも吳竹のうきふしあれや世にあはすして

枉

小鮎見てすぐに覺ゆる堤かな　遠水

朱氏ノテ歩隨ニ流水一玩ニ晴一漪ヲ

背

鷹人に牛よけさする堤かな　岩翁

一口を我物に見ぬくず屋かな　寸好

後鳥羽院御歌
我宿の物なりながら大井川せきもとゞめず行木葉哉

古今
櫻花ちるをば久こそとゞめざりけれ

從

木兎や主もち貞のつくの上　龜翁

（原註）架

段〻に降たはみけり檜の雪　杉風

（原註）業

心よりわざはもつれぬ鵜繩哉　寸竹

たぐられて舟ひきよする柳かな　溪魚

美

飛消る菊の夜露やよばひ星　立圃

松しまのうちはなれ島といふを

櫻川
あるが中に雪に一景はなれ嶋　風虎

同じく小町島を

同
月になを女にて見たし小町島　紫塵

箒木
女にて見たてまつらまほし

雉子の尾のやさしくさはる堇かな　女秋色

岩城の岩間といへる所の梅を

櫻川
星落てこれぞ岩間の梅の花　玖也

左傳
隕ニ石于宋ニ五ツ聞ルハナリ星也

花負ふて都を笑ふ樵かな　松樂

駕籠かきが花ふるひ出す布子かな　横几

（原註）諸

夢さめて蚊屋に槿ぬいものせり　作者不知

東坡
石ー榴開ー遍透レ簾ヲ明カナリ

（原註）瀟湘

その實とる爲もわすれぬけしの花　春魚

月花の物いふものよほとゝぎす　野梅

見て居れば花のちり込口甘し　岩翁

ゆひたるを無下にやほどく笹粽　摘山

白桃や誰にも耻ぬ今日の咲　近隣氏幽意

誰家と女ゆびさすむら柳　紀氏德流

青柳や瓦ぶきなる軒の妻　虛谷

海棠の花は滿たり夜の月　普船

友の別墅に一夜かたりて

海棠の雨見よとてやとまりがけ　沾德

陳簡齋海棠詩
欲レ識ニ此花奇ー絶處ー明朝有レ雨試ミ賞ー來

盛

花ざかりとはゞ都の酒屋かな　守武

夜錦
これは〳〵とばかり花の吉野山　貞室

櫻川
乘物やしばし里ある花の山　維舟

しばし里ある秋のみさ山

山やみなうつりて京の松かざり　朝雲

佛骨表をよむ
しばらくは蠅をうちけり韓退之　其角

衰

痩ながらわりなき菊のつぼみ哉　芭蕉

病後對月
月ゆへに痩わらはるゝ明日もがな　沾德

常

やつれても浮世をしらぬかゝしかな　子堂

宗祇
うつしをくも我影ながら世のうさを知らぬ翁ぞうらやまれぬる

七十余になり侍りければ

信太
追つをはれつ項羽高祖や年の暮　任口

釋

案山
可レ歎浮ー世人悠ー々何日了朝ー々無ニ閑ー
時ー年ー々不レ覺レ老拋爲レ求ニ衣ー食ー
令ニ心生ニ煩ー惱ー擾ー々百ー千ー年去ー來三
惡道ー

くる〳〵と堀江の鴨のうき世哉　山夕

追ふ人の戻るを追ふや稻すゞめ　遠水

基綱
刈てほす田面のにはの稻孃もとめある身はさばがしの世や

はかゆかぬ心も越ることしかな　虎銀

正月や何世にあそぶ僧の禮　芒風

稱名院
うき身をばまかせはてゝし雲水にかへる

やいづこ野べの古寺
雉子も世に追たてらるゝ廣野哉　沾德

慎言

一言の毒には輕しふぐと汁　溪魚

東坡ノ巫峽之水能覆ル舟若比ニ君心ニ是安ク流

よの中をわたりくらべて今ぞしるあはの
なるとは波風もなし

【變】

夜錦

世の中はいつかくいつくかへり花　友圓

旅寓

京に居て京なつかしや時鳥　芭蕉

南

芋虫はきのふの夢や飛胡蝶　元順

山茶花や竹子どきの垣隣　探泉

長刀さはりし草も枯野かな　岫雲

鎌倉にて

和田秩布麥畠とぞなりにける　一鐵

康節洛中ノ詩年年二月凭ル高望不レ見ニ人家ノ只見レ花

舊友の塚にて

つれだちて道はぐれしや野べの花　沾德

繫耕錄再拜ニ荒墳ニ感ニ昔遊ニ

京に年を經て仁和寺の花見にまか
りけるに、先年江戸にて、芝の雲
上野の櫻咲にけり　とたはぶれし
なおもひ出侍りて

わすれては上野のさくら咲にけり　一鐵

張說去歲荊南梅似レ雪今年薊北雪如レ梅

すがたもかへで田舍に住ける比、
舊友あまたたづれ來りけるに

食たけど目には色あり窓の梅　閑枝

司空圖詩料平生臂レ鷹手挑レ燈自送ニ佛前錢ニ

岩城に住侍りし比、江戸に來りて

夏山を出てあかるしもとの江戸　沾德

廬輔いつのまに身を山がつになしはてゝ都を
旅とおもふなるらん

【厭】

市中にはなれて

身は里に麥まくを花の日數かな　自準

無住處

いねゝと人にいはれつとしの暮　路通

あるじの僧所望に

一重ざくら世を見切たる庵かな　尺草

藥性いざ櫻我もちりなむ一さかりありなば人
にうきめ見えなむ

すて人は裸になるかころもがへ　永水

たなばたにかす衣なき沙門かな　笑松

【願】

とし暮ぬ春を相手に又ねがひ　沾德

基俊ちぎりをきしさせもが露を命にてあはれ
ことしの秋もいぬめり

【逢】

駿河かへりの人に

待かひに笠ほせ江戸の初しぐれ　花葎

京の人にあひて

白からじ京のお目から江戸の雪　秋色女

行脚の僧兩吟の所望に

寒いかよ雲に起ふす夕あらし　任口幕

杜甫雲臥衣裳冷

岩城に住侍りし比、友にとはれて

君火をたけ我菜をつむも藪の中　沾德

嚴維湖上新正逢故人情深應不レ厭

家貧明朝別後門還掩脩竹千竿一老身

友ひさし年かくされぬ夕すゞみ　閑枝

司空曙乍見翻疑夢相悲各問年

【別】

櫻川

出替りやつれなく見えし若いもの　萬年子

路通にわかるとて

見やるさへ旅人さむし石邊山　尼智月

尾州住

麥くひし雁とおもへどわかれかな　野水

田舍へゆく人を芝までをくりて、
しばらく寺にあそぶ。

梅はあり爰でのまずば茶屋の酒　文桂

王維勸レ君更盡一盃酒西出陽關無故人

春の疵をおもへ旅だつ友の數　沾德

國にかへる人を中秋にとゞめて

旅人のかへり支度やけふの月　龜翁

蘇東坡 秋ニ來見レ月多ニ歸思ヲ

別芭蕉

松島や名にとめられぬ春の旅　沾德

張笠のそりゆくかたや秋の暮　珍碩

徂來子京へゆく時、歸る日をちぎりて

死るよりましと待日や玉やなぎ　沾德

蘇武 生當ニ復歸來ニ死當ニ長ク相思フ

〔羈〕

常陸國日高寺にて

景によりとまるや秋の日高寺　梅翁

山茶花に糞する鳥も旅寢哉　沾德

唐詩鼓吹 鳥在ニ寒ニ枝ニ動ク樓影ニ

雲雀なく日や蓑笠のすて所　桃隣

關までは笠にありしが京の雪　姑川

妻子ども風やひくらむ古郷の月　一鐵

杜子 今夜鄜州月閨中只獨看

顯琴月前旅情 紛がれに衣かたしきよもすがら詠むる月を妹見るらんか

月も旅の物いひかはせかゆほうし　岩城住守常

書ほどの扇物いへ旅のうさ　綾部住沾山

名所見て母の衾をおもふかな　分虫

稲妻や何にこたへて心ほそき　乙州

源爲憲 古ニ郷有レ母秋ニ風涙旅ニ館無ニ人暮ニ雨魂

夏野ゆく沙をしるべの濱路かな　沾岵

相州片瀬川にて

霧の海風わたるかたやかたせ川　玖也

綿入もあはせとなりぬ旅の宿　忘水

太平廣記 春來テ僅カニ七日家出ヒテ已ニ三年

能因 夏草のかりそめにとてこしかども難波の浦に秋ぞ暮ぬる

〔泊〕

須磨の浦や師走のはてにながめゆく　一鐵

周穆 中ニ坐歎曰風景不レ殊舉レ目有ニ江河之異ニ

船頭が夜明やのぞく簾の雪　沾化

色黑く湊はづかし夕すゞみ　快易

夕顔 ふなみちのしわざにや、すこしくろみやつれたる旅すがた

〔戀〕

初戀

花に出たつ其一歩より悔なげき　春嗣

忍戀

うつ衣忍ぶ夜比の氣が減ぞ　沾德

契戀

是等さへ暮のちぎりや花火船　横几

待戀

待よひやつれなきほどは蚊も食ず　春魚

逢戀

初雪やこよひ祝言ある所　岩翁

後朝の心か

身を(原註)躾かぎてまた有明の月見かな　隨好

源道綱 身にさまるおもひやむかし立花のにほひにぬるゝさよの手枕

待またぬ夫婦や笑ふほとゝぎす　遠水

ひとり寢の床も賴もし竹夫人　由平

我無ニ紅袖堪レ娛レ夜政要青ー奴一味涼

遊女の持し扇とて見せける人に

扇の繪誰月草はしほりけむ　春耕

梅をるは夫トおもひの市女かな　備中住梅員

秋ひとり琴柱はづれて寢ぬ夜哉　荷兮

藤は暮ぬ女首筋くろくとも　西鶴

くゝり目を見つゝ夜長き枕かな　沾德

西行 待かれてひとりはふせざしきたへの枕ならぶあらましぞする

小夜半を鵜飼が妻の丸寢かな　釋專吟

舊臘娶りて

妹我に節上下の腰當けり　伊勢住閑友

人の妻となりて田舍へゆき侍りければ、日ごろもちなれしでうと、

今は似あはぬものとなりて、むかしの人になくり侍るとて、すがたかはりたる事などかきてつかはす。おくに

衛士籠は蚊火にすゝけじ櫃の底　おとこ返し

なけくぞよ身にもかまはぬ田植時　岩松

足跡を下女笑ひあふ塩干かな　百里

一夜酒とはむ女の二日醉

風虎翁の句合に寄月妾といふ題にて

信太　のさばるや手枕なるゝ閨の月　一鐵

同じ道にといひかはせし人に

追つきてぬけがけ恨む花見かな　沾徳

見レ待ニ李節推一詩東坡

路一人皆一言君未レ遠騎レ馬少一年清一且婉

うはき氣なる人には見せじ閨の雪　河雲

音にきくたかしの濱のあだ波はかけじや

竊のぬれもこそすれ

くらき戸に見る貞しろき躍かな　友雅

匂宮いひしらずなまめかし。はつかにのぞく

女房なども、やみはあやなく、心もとなきほどなれど

蚊屋にひとり烏を籠の夕かな　露傾

色紙や色このみの家に筆始め　遊女利生

古今序　いろこのみの家にむもれ木の

野遊ふたゝびして

みし女すみれとかたるきのふかな　未陌

岩五人一而不レ知何處去桃一花依レ舊笑ニ春風一

（原註）詩

あかれたる閨も雪見る夜明かな　魚水

樂天紅一顏未レ老恩先斷斜倚ニ熏一籠一坐到レ明

夜錦　たなばたや戀せよとての生れあひ　季吟

〔神〕

日吉社奉納の百歌仙、遠水勸進せし時

幾世見む花に寢起の神樂人　仄船

おなじ比

卯花よはへある愛を神の鈴　露沾

歌訪祭

御柱神慮すゞしや夏木立　閑幽

瓊ゝ杵尊を

散錢やひろふも惠み山の霧　溪魚

火酢芹命を

豹犬も花もぬししるいがきかな　沾徳

神〳〵は八隅にふかし内はさり　龜翁

諏方の湖を

湖の御わたり久しあか氷　可言

たく人の齡見明す庭火かな　詞賤

陸奥鳥井坂にて

信太　神の旅ありとや名づく鳥井坂　岩城住知信

卯花や田中の宮のありどころ　姑川

龜うきて今年もいはへ水やしろ　松水

押はなつ氣を船頭ぞ御秡川　沾徳

由臣記　大海原仁押放津事乃如久

釋

十方佛土中唯有一乘法といふ心を

夜錦　雪にとへ名所〳〵と法の道　西武

信太　身や雲の行衛もしらで富士詣　釋從古

序品　加是我聞の心を

稲妻や二度目に渡る丸木橋　釋白銑

譬喩品　悉是吾子の心を

似我蜂にならぬ子もなき御法哉　沾徳

信解品　以佛道聲の心を

をぢられてたすくる道やひたの音　遠水

授記品　無有黨事

（原註）引板

稲妻や足どりおなじ舟のへり　岩翁

（原註）端

又

くもりしかふらで彼岸の夕日影　其角

法師品　法華最第一

色づきて葉にはまぎれぬ杏子かな　釋白銑

提婆品　龍女成佛

帆八分月や見をくる南かぜ　横几

神力品　現大神力

法の花ちるや高座をたゝく音　其角

如渡得船

御忌やよふ靈岸様と渡し守　沾徳

聖護院宮峯入ありしを拜見して

夜錦 峯入は宮もわらぢの旅路かな　梅翁

七回忌追善

同 花やけふ過去七佛に手向ぐさ　風虎

同 ぬかづくや人大寺のせがき米（万葉）　玖也

同 もとの道にかへるや魚も放生會　若狭 藤昌

風虎翁七回忌に、寄月釋教

水の月汲てひろはむ梨蒲萄　沾德

櫻川 ふしておもひ起てかぞふや佛名會　山田住 念助

寒念佛世をすて習ふおとこ哉　百川

たのむより外なし御忌の珠數のつや　浮萍

政 たのむてふ心やをしへさくのりを身には

聞うる道しなくとも

去此不遠

蓮の實や飛でもおなじ池の中　尺草

うちむかふ心世話なし香と花　松柏

菅家 香自ニ禪一心一無レ用レ火花（ヒテガシヒカニ）開ニ合掌一不レ因レ春ニ

いとふとは是見る事か寺の月　沾德

祝

同じきをおなじくなすや門かざり　仄船

松出せど盡ぬを山のかざりかな　孚先

今朝や春唐迄隣る笑ひ聲　午竿

人丸の柿食つまむやまと人　中子

鳳凰かけさ鳥がなく吾妻の春　風虎

富る棟なを照しけり日の始め　閑幽

窓白し梅に對して筆はじめ　秋航

蓬萊を見よだい〳〵の其葉まで　尺草

たちばな（万）の實さへ花さへその葉さへ

品〳〵に德かはりけりひらき大豆　芒風

千歳の一葉出らめ黄莢　楊水

廊（ホンドノ）に蓬萊重き歩みかな　友靜

あひおもふ酢貝（原註）相思子や祝ふ雛あそび　幸女

元日やはかぬ嘉例も松の塵　晒有

元日や帶仕直せば松の塵　松葉妻

小うたひやふしさま〳〵の夷講　松齋

御代ぞ烋西より北より南より　杏翁

詩經 自レ西自レ東自レ南自レ北無ニ思不レ服（シテ、カ、セ）

名月やこのたのしみを子孫迄　濃春

月花や詩歌にほこる筆始め　露芝

菊賣や障子の外も千代の聲　松吟

新宅を祝して

杉の香も月に潤ふ家清し　且水

家にある蓬萊作り覺けり　沾德

節小袖いくとせ同じ紋くばり　龜翁

冬草のいさをし良やけさの春　春峒

うつゝにも富士みる年のまと哉　材種

節小袖ゆきの長きや老のさち（原註）幸　岩翁

月花の威は元朝の賀にはへり　露沾

七人五百七十歳白家に會せるとを

おもふに、予三十になり侍ればい

まだ高年のたのしみ、うらやみて

もはるかなり。若年より藝にあそ

ぶ人をうらやむに、七人百十五歳、

なを五百七十歳の春秋をしるべき

友と志をよろこびて元祿三年十一

月上旬に合歡堂によびあつめ侍る。

霜の後の梅しる人よ白髮迄　沾德

いろりに冬の家居かしこき（原註）屋　望月

一日のにごりも月に井の澄て　且水

馬のわらはむ音も秋かぜ　栢舟

枯竹に幾重かまとふからすうり（原註）烏瓜　沾化

ひろへとや推當るすげ笠　沾岵

けふも又かよへる寺のうつし物（ウ）　龜翁

呑する爲に酒强ぬ顏執筆　望月

笑ふさへ事いぶかしき妻ひとり　春水

戀もおもはぬ旅の寢がへり　栢舟

啼たつる地鳥もちやほも同じ村

さむさに馴る舟つきの犬　且水
冬草の一蕪づゝの深みどり　沾岵
霧のまがきにまきをわるをと　沾化
はる〳〵と庵にはこぶ施餓鬼米　春水
月見の場とて編る竹縁　龜翁
ウ
咲てしるとり木の花の出來不出來　望月
（原註）業なりはひせはし野にいそぐ春　栢舟
名
一村は彼岸まうでも聞合せ　且水
老ては人にをそき物食　沾岵
任國のはてぬ間の氣遣はれ　龜翁
たしなむほどのしるゝ釣竿　沾化
橋に來て舟の噂の夕涼み　栢舟
開帳ありて續く茶屋數　且水
こゝろよくそだちし迄の楠の年　春水
稲扙ふ馬のかへるいりあひ　望月
笠かりて悔るほどなる露時雨　沾化
新酒あるかと市をとふ人　龜翁
てる月ににほひてひでの燃殘り　沾岵

峯入どにいつもよる家　春水
ウ
ほころびをぬふは耻ざる女の子　且水
誰うたがはむ此文のかさ　沾化
煤はきに見出す昔の鞠の沓　望月
京をそしらぬ咄めでたき　龜翁
花の樂先あつからず寒からず　栢舟
舞臺の霞直垂の紋　春水
望月十九　春水十九　栢舟十七
且水十六　龜翁十五　沾化十五
沾岵十四

（原註）憂世にさとせ一筋つきし花の道　露沾
春をしる友五歳から百　沾德
霞つたふ水も都の味をえて
家作るとも見えぬ家込
椴松のみどりながらの今朝の月
稲の名多くはなす駕籠かき　春嗣
（原註）昇
帷子の縫目に殘るあつさ也

古風をたくむ茶湯わきざし　材種
ウ
靜けさは隣もひ（原註）他との下屋敷　遠水
藪する音は柴つけし馬　未陌
袖ごしに弓かたげても貞寒き　孚先
君のいせい（原註）威勢を妻に夜がたり　橫几
こひいまだ後生心と四分六分
櫻にとをくまはる片町
（原註）芹　せりなづな（豆腐）とうふの名にはたがひけり
（原註）圓鶏　つけにわらへばげに繪にもかく
神主は歌よまぬしもよむと見え　寸竹
邊二段の池水はよき　探泉
（原註）明　むぐろもち行あとあかす秋の月　松齊
わらふ聲にて小すまひとしる　芒風
母毎にうつ役なるか唐衣　忘水
釜かすり跡の火影ある暮　子堂
二
茯苓を見付てをくる村の醫
硫黄の香する山の堂守　屹平
へだゝれど耳にはなれぬ海の音　虎笭

三田伊丹の冬の荷の高　松塢
すかし見る（原註）紬つむぎまばゆき朝日影　飛泉
猫うしなひて夜の寢にくさ　岩松
おもひつゝよりそふ障子うちたはみ　河雲
切紙ときて名やまぎらはす　虛谷
めさしよくぬきおほえたる（原註）逆さかまつゆ
老尼のうへはいとふくず水
月の外雨はこはぬに茄子畑　午竿
住とて土地にまじる貝がら　同
夏冬をたれ教ぬふ衣ふたつ
乳母がまともその子にやしる　芳津
ニウ
中〳〵に（原註）聽つち音高き内普請
夷おろしのふたりづれにて
髪をゆふ比に出舟をしらせけり
染粉染木も任す國風
麥の根に悅びそむる雪一度
田土の壁の干て夕日もる（原註）渾　孚先
町屋さへどこやらさびし寺境　探泉

其村ばかりくすみたる長　寸竹
酒(原註)強しみる事も上手の菊作り
十三夜なりと此會の月
あきらけき御代のためしの躍うた　友雅
模様(もやう)には目のこへてし(原註)縑らきぬ
山守の花を乗るは廿日ほど　子堂
片羽ぬらすうきくさの蝶　百川
三
乗掛も聲の下なる夕雲雀　春耕
ゆかばよき景あらむ脇道
くねとに若(原註)掘かへるでのさし出る　鸚水
おなじ丈にてならぶはりの木　魚水
風呂目とやあたま湯氣たつ僧あまた　松柏
かさねたる書の陰くらくして　喜水
いひとけず戻る首尾なき夜の床
やをら出あふ兒とほうず(原註)頬揖り
掛香の糊(のり)はなれなばあらはれむ
珠數くるとてもなけきをふ山　寸好
旅は只不慮に見さする軒の月

三九六

手燭に虫の飛ちがふ秋　溪魚
いりたちてあらたに涼しうす羽織
どこともなしに友さそふ暮
三ウ
かくしなば戀とおもはむ姉の文　隨好
餅きる糸の絶しちぎりや
裏白のうらかはきても賀の一つ
(原註)賜しをたまふより花をまつ杖　遠水
雪けとふ奥のすれ(原註)受傾うの靜か也　沾荷
垢ながさする奇麗なる僕　春魚
たつ衣の筋にさしたる針印
あけ屋のいび(原註)鼾き笑ふ宵の間
見かへりてにらむも物の下心
いさめられたる酌の追つぎ　横几
居すはれる風に火鉢の灰たちて
我子のうちし小鼓の乙　屹平
夕月にかへりては先袖だゝみ
端山は十日をそくもみづる　虎笭
名
拜みても秋飽たらぬ水無瀬殿

太平のとき亂はうたはず
身のかせぎ暮てはい(原註)息こふ道ありて　材種
御座も敷ざる舟並ぶ岸　雅雀
命とは敵討えし今の事
我ももと武にほこりたる禰宜
朝起の德は早苗の露を見る　芒風
(原註)釜木まき直切るとて引とむる牛
こゝかしこ(原註)鳥立ことたちうかがふ人のせい(原註)勢　春魚
(原註)粥かゆもる茶碗もろ手して(原註)抱だく
名月の九つ過はものゝすゑ
(原註)塩たへてやは寢る蚊屋おさむ秋　沾荷
谷組をしまへば國の鱸(ろ)を思ふ
甥もちながらいとけなき叔父　虚谷
ウ
はしちかにごたち(原註)後遠ふりむく呉服物
風にふきちるさかづきの薄(はく)　未陌
(原註)瓦かはらふく(葺)山にも鳥の落す魚
汲こぼす井の水よぐる蟻　春峒
おき能の役やあんだのたて初め

貞の赤きを友に聞あふ　忘水
たのしみはみな一樣の花の春
ちいさき場には摘ぬ七種
發句たまふ君あり、附句たすけし友あり。こゝろざしおなじきをもて獨吟となりぬ。

元祿壬申年九月下浣

通油町　佐藤四郎右衛門

蓮實（はすのみ）

賀子撰

（蓮實）

花は散もの、月は入ものにして、是を世のさまとす。貴賤僧俗われに着する故に、吾とくるしむ獅ゝ身中の虫なり。かしこき人はまずしきをたのしみ、富て禮をなせとこそ教けれど、それまではいふにたらず、ねがふもむづかし。右指左指造次顚沛、東西に走り、南北に起臥し、心のおもむくにまかする事、蓮の實のごとし。

元祿四ゝ次星稔
仲穐日

紅葉庵
賀子 （宮佐）

蓮の實におもへばおなじ我身哉　賀子

世にある藏も露の入物　西鶴
名月の朝日に影の替り來て　同
まだ夢ながら碁石撰分　子
船寄て延しにあがる礒の濱　同
白鷺人をおぢぬ粧ひ　鶴
山櫻限リの身とて二百戒　鶴
昔にかはる寄生の梅　子
豐國の奥は小蝶の羽の弱シ　同
當座の嵐手扇つれのく　鶴
酒ゆへに常の魂ィ闇と成　同
借ス人もなき大年の宿　子
京の伯父田舍の甥も興かきて　同
官女の具足すゝむ萩原　鶴
房枕秋の寐覺の物狂ひ　同
血を忌給ふ御社の月　子
猪に折られながらに花咲て　同
海棠睡る唐人の留守　鶴

二

紅のチンタ流るゝ春の水　同
小鼓出來て時服下され　子
今日までは見て登りたる雪の富士　同
扇一面逆心さいご近づく　鶴
狀箱を燒捨がたし行螢　鶴
今の身請は袖のむら雨　子
物毎に堪忍始末戀止メて　同
弘誓の舟に乘からはみな　鶴
白銀の金の鯛も醜し　同
礎にさむる夢の本意なし　子
忍び道夜るの芭蕉におどされて　同
月を妬める後の母親　鶴
追訴訟身の程しらぬ秋の蟬　同
堂こぼたれて山のさびしき　子
谷川や岩にとゞまる笠の骨　同
手枕をして鰭魚寐る　同
神農の代ゝにおしへの花の露　鶴
桜葉にかく春の初文字　同

蓮の實を袖に疑ふ霰哉　西鶴
旅寐の宵を荻に起され　賀子
月の前子等が鴛引つれて　万海
都に甘き酒斗りけり　轍士
橋掛し木工の寮の恭シ　子
語り傳へて人肌の岩　鶴
書事の文字分ち有物狂ひ　士
名をうき雲と呼し傾城　海
雨の日の富士迚外の戀僧し　鶴
牛休まする笹の離れ家　子
一抓ミ行脚の僧に物くれて　海
重ね着てさへ身の氷る朝　士
更に今水尖なる筏川　子
小宮を二度に見たる稲妻　鶴
忍びつゝ月の闇きに顏撫て　士
年耻かしき心根の露　海

身の欲を花笑ふべき藥喰　鶴
五加木にまじる椙の生垣　子

二

かしこさに蛆とる雉子の卷つかれ　海
修行のむかし胸先の疵　士
人多き時には遲き渡し舟　子
下女が泣出す波の塗笠　鶴
逢まではたゝまずに置夜の物　士
朝飯も喰て面やつれぬる　海
遷宮の七日内陣鳴止ず　鶴
さす形り惡き穢多が大小　子
折ル人もなき片野べの山慈菇　海
鼓をたくむ稻の虫追　士
今朝の月寐ぬ道場の腹立ず　子
夢になる身を異見甲斐有　鶴
讓リ來て鎧めさする守の殿　士
よろほひ出る百歳の民　海
時津海火を嚙ム鳥の名のしれず　鶴
ためすにたらぬ今日の雪掉　子
咲初る花の骨隨いつか見む　海
三十日つとめてむすぶ櫻戸　士

蓮の實や星の影うつ池の音　杏醉
月見んために伐らす松の木　賀子
行雁に國の軍のさま聞て　同
生レつきから不敵なる兒　醉
入相も嵐も通す破レ垣　同
まだ如月に咲ぬ水仙　子
身の科を今日も重ねん雲雀網　子
春もあはれは同じ古塚　醉
見る色の物うき衣のうしろ紐　同
岩間〳〵をくゞる獺　子
事觸にしばし時雨を止させん　同
負を赤めて寐入山人　醉
名月やさぞ大名の朝朗　同
手づから作る百菊の菴　子

秋の末聲ふるはせて蛩　醉童
宿直する夜の小袖あらため　同賣
花の雨明日一日に散過ん　子和
初雷の落る田の中　同童

編集にいとまなく一折にて過ぬ。

蓮の實の飛間度絶て夕哉　芦賣
廣さに月を隱す桐の葉　倡和
碪打相手の眠ッ移されて　知童
團子を炭に燒過しけり　賣
來る毎に猿舞さする向ひ殿　和
晝盗人よせかぬ頬つき　童
三日とは迎もたもたじ深見草　賣
水呑ミ盡す宮かたの城　和
似せにくひものは男の聲ばかり　童
待ッ間に晝ク雪を見給へ　賣
錦木の朽ぬ昔は何の木ぞ　和

中にひとりが踊目にたつ　童
乳もらひし昔を姫に恩にきせ　賣
けふも車のきしる久留須野　和
狩衣にためても花の重さなる　童
額讀うちに霞む樓ノ　賣
糸きれば我拾はんぞ紙鳶　和
帶のとけたにそばへぬる蝶　童

水中にあつて荷葉、水をはなれて蓮ッ、はじめて華發ては芙蓉のごし。草紙になりてはすのみ也。

藕子やひろはれぬのははすに成　才麿

春

としもまた梅見て櫻藤紅葉　大坂西鶴
有がたや富士を見て來て江戸の春　江戸湖春

正月四日チ題ス

大津繪の筆のはじめや何佛　同芭蕉
夕まぐれたゞ咄す有山ざくら　京信德
大佛を包む霞のふくろかな　同團水
若菜摘婦ノおがむ地藏哉　櫻塚西吟
櫻野や蝶跡へなり前へなり　京定之
黄鳥の飛出る谷のいばらかな　大坂才麿
うたひ垂供のぞめきや若菜狩　同定明
此身にも若菜つみけり比丘尼寺　同呼牛
春日野は大佛若きとしかな　越後蘭月
綱引や穴一のあな踏にじり　大坂倡和
としゝのよきもの隱す霞哉　伊勢未白
梅が香に生魚遠く成にけり　和泉重賢
朝〳〵や梅の露とる化粧皿　大坂知童
釣鐘を撞ヵば動かん土筆　京如稲

御魂やの道付替んつく〳〵し　大坂　蚊市
牛の喰ふ舌より余る夏哉　同　柳枝
宵闇に白魚見知る浦半かな　同　昨非
白魚や官女の出る臺所　同　賀子
白魚も煎られぬ先はずゝ黒し　同　藍橋
白魚や法師の喰ても目の立し　同　花瓢
醉のあるうちは濡行春の雨　同　直成
春雨や所〻にひゞきて鐘の音　同　宗準
春雨や黒子算ふる姉妹　同　万櫻
板橋の繼目〳〵やはるの草　同　芦錐
酒買し事なし我は桃の花　大坂　由平
柴船にさはり初る柳かな　同　川柳
川向ひ柳におもき入日かな　同　帆睡
船かりて渡れば遠き柳哉　同　宰賀
餅花にきり殘されて柳哉　同　賀子
刈株にまだ鳴出さぬ蛙哉　同　油鬢
蛙鳴〻となりの井戸の淺さ哉　同　呼牛
飛〳〵て石に顔うつ蛙哉　島村　生水

妹が手の爪の跡ある五加木哉　大坂　幸方
糸つけて飛す胡蝶のよはひかな　同　見里
古池に鷺のよごれぬ田螺哉　同　李溪
のぼりては九輪を落す雲雀哉　大坂　竹亭
蝶〳〵に行あたりたる雲雀哉　同　倡和
人馴てさはらぬ程のつばめかな　同　知童
そろ〳〵と寐あしくなる彌生哉　同　芦賣
夕東風や下官のうらむ水鏡　同　柳枝
もどかしや鐘撞堂の朧月　同　矩久
春の日にきら〳〵みゆる都哉　同　葛民
青からぬ雲井みにくし春の空　同　巨岩
虎杖に酒のむ尼の菴かな　伏見　奴睡
虎杖に蛇をおそれぬむすめかな　大坂　圓水
齒黑していたどりかりの娘哉　同　李溪
いたどりは母にかくせし土産哉　同　梅子
雛あそび色の白きも殿御哉　同　椿子
屹は櫻時分のわらひかな　同　重成
黄昏や藤女首筋黑くとも　大坂　西鶴

白藤に宮あたらしく成にけり　同　元知
津の國は藤よむさしは角田川　江戸　和汀
行ほどに麓のやうな山ざくら　大坂　來山

吉野にて

花を出て花に入ぬる日足哉　同　芦賣
駕籠はあれど散らぬ花踏月夜哉　同　夕幽
白壁に目を休めけり山ざくら　同　綠水
干幕はきのふの花の雫かな　河内　亭笑
糸遊に杖のとゞかぬ童部哉　大坂　芦賣
花散て水律義なり岩の鼻　同　久永
先ッ人の咲貝を見する櫻哉　同　且水
うつむひて三十日に戻るさくら守　同　歌麿
星の林明日見るまでの櫻哉　大坂　西鶴
算程に散ころ花のながめかな　同　重榮
花過てまだほとほりの機嫌哉　同　油鬢
夕毎に人の空見るさくらかな　同　杏醉
人どにまづ寺をとふさくらかな　同　朝秋
其後の無音はゆるせ山櫻　同　扇士

三日月の二つ見られぬ汐干哉　大坂　遠舟
早梅は二年に成ぬ遲ざくら　同　豐流
櫻見に小もんの羽織着るはなし　同　素龍
小男の手に曲たりし藤の花　同　轍士
糸あそぶころや女のまみおもし　同　萬海
舞〳〵が暮春になりぬ花むしろ　同　才麿

夏

子規〳〵とて寐入けり　江戸　調和
馬の蠅富士見んとてぞ下ッける　京　如泉
鶉なくや此あかつきをほと〻ぎす　江戸　其角
夏の夜も酒氣の果を寐覺哉　大坂　來山

遊君に替りて

身をおもへばいなする蚊屋の螢哉　京　言水
とまらせて草の名を知る螢哉　京　我黑
花あやめ俳言あらん藪菖蒲　江戸　一晶
人とはゞ葺ぬを宿のあやめかな　大坂　轍士

螢追ふ果は夜明るところかな　同竹亭
不思義さに火をよせて見る螢哉　同重榮
雨舍ヶ公家としらするほたる哉　同西流
晝見ては何事もなき螢哉　江戸朝軒
草にとり又草におくほたる哉　大坂可幸
芍藥にけふも來て見る小猫哉　同及甫
陳子鳥みつにふたつは木玉哉　同倡和
勸農の鳥に夜を寐ぬ野銀治哉　同才麿
夜のにしきうき世は晝の螢哉　同西鶴
杜鵑向ひの家は戸を明ず　同花瓢
里は雨町家によどめ郭公　同且水
時鳥聞そこなはぬ鰯哉　同客遊
けふもまた晝寐させけり時鳥　同李溪
隱ヶ江やあやめに垢離を取ル女　藝州里洞
引ぬいてみれば泥なり杜若　大坂炬久
入相に笠わすれけりかきつばた　同李溪
跡見ればきるまひものよ杜若　同万櫻
里人や菰につゝみしかきつばた　同龍山

明ほのや塔のぐるりは杜若　南江村夏炉
皮膚のよき人よ杜丹の花の晝　大坂春林
蟬聞て夫婦いさかひはつる哉　同西鶴
山松に蟬の居なをる朝日哉　櫻塚西吟
蟬聞て馬のかけ出す山路哉　大坂圓水
待かねて引さく百合のつぼみ哉　同葛民
聟君の聟のふりよき職哉　同幸方
見る人もしたゝるからぬ競馬哉　同見里
藥玉やみがゝずとても華光彩　同才麿
粽結ふ片手にはさむ額髮　江戸芭蕉
卷ながら粽くふべきおとこかな　大坂自問
不形なる粽を妹が喰はせけり　大坂由平
編笠の中に似合ぬ早苗哉　同竹亭
行過てねぢむく壻の早苗哉　同呼牛
角ふりて烏わすれな蝸牛　同
ながゝしかも柳の五月雨　同杏醉
五月雨や何國の池の菱の蔓　同元知
五月雨に微ぬは碁盤計也　河州亭笑

夏の檜や獨〳〵の心ざし　摂津冬風
三ヶ月や瓜むいて居る渡し守　京淵瀨
葉柳に一息つぎし隔夜哉　大坂帆睡
まほろしに夏帶くけし妾哉　同武仙
扇折ル女のつかふ團かな　同賀子
燒付て已レも逃る蚊遣哉　同芦賣
村雨に蚊のかたまりし窓の先　同鈴風
俳諧は蚊がうれしがる夜るの席　同良重
入相を七つ撞たる藪蚊かな　同可幸
蚊遣火にわざと煙らす二階哉　大坂自問
明ほのは蚊の血を耻る娘哉　同香葉
夏の日やたび〳〵休む古手買　同哥麿
夏の川獨ヶ女の渡りけり　同知童
浮鴨のうき巢や水の深みどり　同椿子
やさしきに猶うつくしき鹿子やな　同宗準
露落て念佛おもたき蓮哉　大坂遠舟
蓮さく水にすゝがん師の衣　同竹亭
風の日は葉に隱さるゝ蓮哉　同圓水

どれとるぞ杜丹にならぶ蓮の花　同見里
世の濁り蓮に愧ル旦かな　同久永
笙ふく人留主とはかほる蓮かな　大坂西鶴
晝貝の花しらぬ日の寐覺哉　同宰賀
夕立に乳のあらわるゝ女かな　出羽浮水
夕立に住吉おどり坊主かな　大坂柳枝
出初たよあれあの雲を雲の峰　同宗準
川狩や色の白きは役者らし　大坂万海
酒入レずうたはぬ舟をすゞみかな　阿州鉤寂
踏初し誰が足かたぞ富士詣　江戸西乃
泄瀉や首を出しぬる破れ蚊屋　最上清風
晝網や六月淺し芦肴　大坂昨非
孕マせし罪を法師の御秘哉　京言水

穐

見てよけん堤牛引天の河　江戸湖春
朝貝に心まるめる夕部哉　大坂遠舟

秋ぞ猶外の濱なる夜鳴貝　江戸　白擧
稲妻に寐すがたはづる板間哉　伊勢　又玄
石原や誰が馬咨守る女郎花　大坂　由平
來る秋や風たち水の澄所　阿波　律友
余古の海七夕の子や水あそび　大坂　幸方
來る魂の道に聲ある薄哉　櫻塚　西吟
音ひくし魂祭る夜のまさなと　大坂　万海
送り火や橋に中るを世の限り　同　竹亭
川鰕の送り火に寄る夕哉　同　葛民
棚經に鯖うる聲の交りけり　半町村　休計
擂待の道かたづけよ黒木賣　大坂　蚊市
此後は露置添んわかれ星　同　春林
初秋はまだあはれにもなかりけり　同　倡和
あかねさす日にかたれたるやんま哉　同　扇士
稲妻や丸ながら見る橋の上　同　油鬢
稲妻を呑込にけり鬼がはら　同　知童
いなづまに一聲鳴し烏かな　同　可幸
野の井戸や見し稲妻の落所　同　竹亭

置て往で取におこさぬ扇哉　同　呼牛
哀秋赤子の鳴しとなりかな　大坂　鄙省
女郎花女房の留主に植る哉　同　山木
芭蕉葉や誰ぞ手をひろけたるやうに　同　瓠界
蘭の香に夕食喰ぬおとこかな　同　香葉
芭蕉より松葉にたまる小雨哉　同　杏醉
朝貞の花ひらきけりしぼみけり　同　芦賣
槿の花は遊女のこゝろかな　同　見里
槿に引おこさるゝ垣根哉　同　自問
朝貞の取つくものも薄哉　大坂　竹亭
荻薄最屓のならぬ夕哉　同　三喜
霧晴てもとの長サの薄哉　同　衞門
足よはき虫はとまらぬすゝきかな　同　圓水
六地藏二つは隱すすゝきかな　同　柳枝
草〳〵のそよぎや露のこぼれやう　同　万櫻
蜘の巣に行つく荻のそよぎ哉　同　鄙省
二つめの嘘悔しや荻の露　同　見里
春過て女子のしらぬ野ぎくかな　同　緣水

折ながら苦はひらく野菊哉　同　呼牛
蝶〳〵の貞よごれたる野菊哉　同　李溪
いたづらに名をかへて咲野菊哉　同　哥鷹
玉かざる露の似合ぬ野菊哉　同　竹亭
長る程若ふ呼るゝ野菊哉　同　元知
淋しさにならして通る鳴子哉　同　燈外
笠とれば鳥のとまる案山子哉　河名　亭笑
辻相撲みな前髪を最屓にけり　大坂　來山

大内のほとりにて

名月や下部は何を書白洲　京　言水
名月や御門の外は仕丁ども　同　淵瀨
父は花酒の母なり今日の月　大坂　西鴟
名月や雨乞ヶ村の人ごゝろ　同　賀子
名月や哥の中山清閑寺　同　藍橋
名月に蚊屋つり草も枯ぬめり　同　盤水
名月やいつより榎黑みたる　同　蚊市
男ともしらでこがるゝ礁哉　京　萬玉
待宵の力に成し礁哉　大坂　川柳
よごれたる心はうたぬ礁哉　同　久永
蠟燭の眞ゝきらせけり今年蕎麥　同　藍橋
稲刈て片荷は西の帆かけ船　同　梅子
稲葉刈ころは尼さへ髪ながし　同　李溪
執の火の飛ひかりなし今日の月　同　蛙市
初鮭は富士見て來たる心哉　同　昨非
鴈は飛鶉は居るがすがたかな　大坂　重榮
初鴈は指折とても片手哉　同　圓水
翡翠のとまるかたはむ岸柳　同　露友
鳴虫の髭の長きもあはれ也　同　椿子
心ほどとられぬものか枝の栗　同　宰賀
秋らしや柳にうすき夜るの霜　同　帆睡

重陽

我宿の野菊を今日の詠哉　同　一蠡
夜寒さぞ裏壁つけぬきり〳〵す　同　才麿
里人は突白かやす花野哉　大坂　西鶴
押分て誰寐し跡ぞ花薄　京　芝蘭
身振ひや鹿に時雨るゝ花薄　同　定之
八九月風はいづこの螺の貝　江戸　嵐雪

露霜の沙汰なかりけり富士の山　京　常牧
今更に笑か花野の髑髏　同　園水

冬

冬籠リ又寄添はん此はしら　江戸　芭蕉
寒き日を聲に芹賣朝哉　京　定之
祝子が烏帽子はしやぐ庭火哉　大坂　海万
菴近し少ぬれても初しぐれ　同　賀子
玉笹や不斷時雨るゝ元箱根　同　西鶴
十月や烏帽子に入る庭の塵　同　幸方
屹に何を葉守の神無月　同　杏醉
呼立て日もちり〳〵や友千鳥　同　定明
此川が涼みし川か鳴衛　同　竹亭
鴻の足見しより長き枯野哉　大坂　遠舟
さま〳〵に池の形見る枯野哉　同　盤水
守捨し枯野の小屋の一つ哉　同　知童
野狐のよめり初る枯野哉　同　万櫻
あちらむきこちら向たる枯野哉　同　呼牛

殊勝さに念佛中ゝ神樂哉　同　重榮
凧のちらすものなき柳哉　同　帆睡
宮守が烏帽子着直す落葉哉　同　李溪
落葉して鳥の數よむ木末哉　同　宰賀
朝やけも夕日に似たり歸花　同　椿子
提て行人に品なし歸花　藝州　宗準
弟さへ世を遯レけり　網代守　大坂　里洞
十月は幾日降ても初時雨　大坂　夕幽
片〳〵は時雨ぬ爾宜が烏帽子哉　同　呼牛
走出て時雨をとふや松の色　同　良重
常よらぬ徒弟尋ヌる時雨哉　同　風舟
塩賣の一聲うづむしぐれかな　同　哥麿
からかさも後は荷に成時雨哉　河内　亭笑
水仙やせまくて廣き花に勢　大坂　補天
明ほのや荷炭をおろす門の前　櫻深　西吟
拜殿にしばし雜子寐の時雨哉　大坂　西烏
山茶花を旅人に見する伏見哉　同　西鶴
態〻と上戸になりぬ冬牡丹　同　倡和

おもしろや波の間より飛衛　同　杏醉
御座舟やどちらの千鳥見て行ん　同　鈴風
妻の留主目覺てすごき火桶哉　同　蚊市
留主つかふ時は汗かく火燵哉　同　短久
火燵空し文王卽位ありとても　同　久永
煎蜩や海士が家くらし濱松葉　大坂　昨非
葬禮の其中を賣ル饅哉　同　賀子
冬枯や風の落込谷の底　同　杏醉
それきたぞ齒ぬけ聲なる鉢扣　同　芦賣
其町の犬は出ぬる鉢たゝき　南都　歳人
梟の寒き夢うつ霰かな　藝州　柳江
山川や霰乘リ行木葉舟　大坂　圓水
朝霜に疵を付たる霰哉　同　油鬢
鐘絶て藁うつ家の霜夜哉　同　緣水
蠶かな伽藍に見度軒の雪　同　重成
別路や女みにくき雪の朝　同　李溪
長寢せし上天の事は今朝の雪　同　季山
明ほのや箒隙ある庭の雪　同　性水

我宿の形替りけり今朝の雪　同　元知
羽に積る雪に雲落なや水の鴨　江戸　石玉
日の照リて雪の燒たる巖哉　大坂　朝秋
見事にて跡のきたなき雪野哉　大坂　万櫻
礒ぎりに沖は降らぬか宵の雪　同　倡和
雪よりもあるか出せみん白き物　同　豐流
薄氷蘇鉄の形リに殘リけり　同　柳枝
行月の影は得とぢぬ氷哉　同　元知
水車朝は音なき氷かな　同　葛民
沖に目のとゞく程飛ブ鷗かな　同　一風
おもほへず徽をうたん池の鶯　藝州　野羊
己が身の寒さをふせぐ紙子賣　大坂　花瓢
よい夢を覺されにけり紙子着　同　矩久
夜を寒みむか腹立ル山居哉　江戸　西乃
絹着たる女あやしや喰藥　若州　去留
年籠リ鈴聞こゝろ一つ哉　大坂　芦賣
煤掃や又あらためし紙袋　同　且水
餅花は妹背の中のよし野哉　同　自問

寒聲や螢過ての丸木橋　京女　花鈴
瓢簞に酒は入ぬか鉢たゝき　大坂　轍士
日の本の人の多さよ年の暮　同　才麿
世に住マば聞と師走の礎哉　同　西鶴

草津にて

のがれけり師走の海の鵜（カイツブリ）　江戸　芭蕉
節分もまぎらかしけり親の前　大坂　來山
月花に馴れし矢立も大三十日　大坂　由平

稲妻に展す實の飛ブ蓮哉　來山
三ヶ月薄き市の果ロ賀　子貫
穐の風干鰯に鼻を逆らひて　仝
檜笠着た人のキョロツキ　山
裏門は水とるまでの通ひ道　仝
家鴨に折ル河骨の花　子
今朝の夢夏書の筆を妨ゲて　子

つくゞおもへば見殺タ客　山
忍ぶれど銀盃は醉ものぞ　仝
袖によごるゝ血（ノリ）のはぢらひ　子
其中に供奉の獨の氣の強シ　仝
頬さへあげず立くらす尼　山
秋の草皆尋常にうら枯て　仝
振直したる蟷螂（カ）の鎌　子
露霜に脚ー氣のおこる連を持　仝
月の出るか盗人の運　山
花鳥の中いひさかす物狂ひ　仝
廣野は蝶の追ふつおはれつ　子
きさらぎや棧敷の柱打こかし　同
妹つれずばいきて歸らじ　山
假枕雪と泪を湯にわかし　同
鷹に蹴られて驚落る方　子
若衆の高股だちは見事也　子
戀はむかしと杖握リ破ル　山
窓明て日の入山を持佛堂　仝

雌（メ）にはなれたか孤來て鳴　子
牛馬のつなぎながらにながれ行　仝
ちいさい時をはなす傾城　山
亂レ髪うしや醫師に打向ひ　仝
まだ蚊の殘る八月の月　子
舟（ウ）ひいてのほれば冷る芦の中　仝
田の番どものどやきあひぬる　子
神主が家は心のすむ所　仝
伊勢も近江も源氏なりけり　仝
花ともに笛吹破る山おろし　仝
寐餘る春に何の役なし　仝

京寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

誹枕（はいまくら）

上・中・下

幽山

目次

能因が枕をかつてたはぶれの號とす。つたへ聞、其代の司馬迁は史記といふものゝあらましに、みたび五岳にわけいりしとなり。杜氏・李白のたぐひも、とをく廬山に遊び洞庭にさまよふ。その外こゝにも圓位法師のいにしへ、宗祇・肖柏の中ごろ、あさがほの庵・牡丹の園にとゞまらずして野山に暮し、鳴をあはれび、尺八をかなしむ。是皆此道の情なるをや。そも〳〵此撰、幽山のこしかたを聞ば、西は棒の津にひら包をかけ、東はつがるのはて迄足をおもしとせず。寺といふてら、社といふやしろ、何間ばりにどちらむき、飛彈のたくみが心をも正に見たりし翁也。あるは實方がつかの薄をまけ、十荷のすがごもを尋ね、緒たえの橋の木の切をふくろにをさめ、金澤のへなたり・いろの濱の小貝迄、都のつとにもたれたり。されば一見の所〳〵にてうけしるしたること葉のたね、さらぬをもとりかさねて、寛文のころ櫻木にあらはすべきを、さはりおほきあしまの蟹のよこ道にまつはれ、延る寶の八ッの年、漸こと成ぬ。さるによつて今やうの耳には、とませの杉のふるき共おほかり。しかれども名取河の埋木花さかぬも、すつべきにあらず。是が爲に素堂序ス。

誹枕集　上

山城

山城のとはにあひ生や松飾　風虎
蓬萊の山城蜜柑や小かうじ　松江維舟
嶋臺の龜のお山や髭野老　曲言
はづかしの森やかさ鉾水祝　丁我
筆始間なく時なし紙や川
音こそ春水汲男耳敏川　丁夢
櫃川や袖の出替り浪越る　云笑
うすら氷の際やすき破紙や川　山崎清親

かけて祈る子安の塔や雀の巣　青木春澄
御社領の吉田の種や神おろし　安居久巨
尻いたし龜の尾山の花の陰　日野好元
宇治山や東南に納む花の雲　安田柳話
丸山やつるに客衆の花散ぬ　望月千之
男山のむかしや思ふうば櫻　天野弘風
行てみんお室にいみじき兒櫻　村松水虎
盛かたや山吹の瀬の栗せうが　櫻井鷺之
桃薗の親王にこそ内裏雛　次木壽舟
花の都下へさかるや藤の森　見

東國をめぐり、大坂にかへるとて

夏山やあるひは野にふし伏見舟　梅翁
加茂川や双六のさいきほひ馬　日野好元
五月雨や一まいになる狐がは　岩田有哉
里人やつけ木に螢まきのしま　小野澤幽風
宇治川や車かゝりの螢の勢　伴一可
切蓼や鱠のひま行梅津川　西岡泰清
妹夢に蚤心せよふし見舟　三輪一鐵

ところてんや祇薗林にむらからし　梅翁
山は行を松はしらずや祇薗の會　青木春澄

北野にて

當分の是御自愛や薫風　三輪一鐵

東國よりのぼりて

みたらしやきのふは東の十團子　西山梅翁
月弓のいるさや弦の音羽山　田中久光
歌人の枕をわるやをの〻月　霞衛子
炉也けり山城米に宇治たはら　幽山
松茸に相生の名あり嵯峨よし野　梅翁
思ひ入身はふか草や蛇の穴　田中良景

くらまにて

九折や霧の海邊のばいの尻　青木春澄
伏見とや紅葉を床に晝休　田代松意
狐火や紅葉も青きいなり山　幽山
壁にはふや小倉色紙の蔦かづら　中村魚木
十月やいなりの神のお留主〳〵　安田柳話
口切の茶入や宇治の橋姫手　風虎

月次會に出て

山崎や時雨にまじる水油　吉田委心
山白し峯もたいらの京の雪　梅原卜入

大和

里富り奈良の初年壽祿神　池西言水
たばこふく息や霞て吉野山　田代松意
奈良役者我えし事や薪能　青木春澄
印祕して結びし水や二月堂　天野弘之
吉野初瀬花や歌人の大煩　露沾
雲と見しやみよしの〻花なら油煙　維舟
みよしの〻花や是きた都人　神野忠知
杉原に水くゞる花や吉野川　上田宜水
花一重障子の外や吉野山　高橋東風
中椀や花のふゞきのよしの川　幸順
虎の尾の花や唐土の吉野山　風虎

春日にて

御鎭座の浮雲遠し花の山　林宗甫
奈良ざうり今日もきらしつ八重櫻　中井宗隆
吉野法師けさや見ゆらん更衣　山田一友
小盃や若葉の不足龍田山　川鳴丁夢
歌塚やめいどの傳受郭公　西岡泰清
鮨桶やおしみ馴たる吉野鮎　成田交扇
五月雨水分山や在郷公事　露童
湯あがりや毛の穴そよぐならざらし　大林水容
掛香やけふ九重にならざらし　幽山

南都衆興行に

思ひよる友やあはおのならちゞみ　林宗甫
突臼や松に音するならさらし　池田宗旦
せり賣やならはぬ旅にならざらし　芹沢可利
みよしのや屋根の炉風太和ぶき　松村正阿
唯今也田舍の吉野草の花　云奴
春捨し酒やけふ咲吉野菊　西岡泰清
春日野や人追ふ鹿の獵師あり　井狩友靜
鹿のしがらみ奈良の町役かけてけり　幽山
み吉野や葛のかたまり炉の月

目薬あり益田の池の烋の月　望月千春　幸順
笙の岩屋ほさつも爰や冬籠　山口素堂
茶の花や利休が目には吉野山　甲良初入
雪や雨霰の名よせ三笠山　如船
炭頭飛火や守寺自身番

元興寺にて

鬼の手形鐘に取けり暮のとし　幽山

河内

鶯の關の戸ざしや籠の口　濃州住正勝
干飯を道明寺とは名付たり　長崎一見
秋の梢飯もり山やすはう箸　杉山杉風
びんほう神旅の宿なし天の川　望月千春

和泉

太箸や和泉の杣木ゑいさらさ　樣唯笑
けふの塩干たる群集あり境浦　望月千春
吹飯の浦などか雲ゐにいかのぼり　幽山
白炭の名こそ流て光の瀧　肥前沙門惠俊

攝津

何いぞ津の國飼のうしの年　西山梅翁
箕面寺わらはも富を突べきなり　青木春澄
難波寺鐘にぞ花はよろ法師　福田露言
花は散寺はこんりうじぶん哉　梅翁
須磨の海士のかしらもあかしちゞみ哉　江口塵言
干飯やそこで腹はる龜井の水　三輪一鐵
津の國のこやかたすゞし迎舟　梅翁
烋風もひよどり越や一落し　櫻井鷺舟
無魂やしたふ見ぬめのうら盆會　松村正阿
盆といへば今簇同じ難波寺　松木青雲
難波女やおどる袖笠あし拍子　幽山
晴曇り笑止るらうや須磨の月　筒井宣安

すまにて

此浦に饅汁とはんにごり酒　松木青雲
小男鹿や夢野にかへる皮枕　沙門才丸

夜番もやこやの住居の冬籠　清木春澄
跡もなししかしながらの橋の霜　枝吉任他
髪置は三つの濱松をかざしかな　日野好元
座頭鯨よるや見ぬめの浦の波　山田茗風
茶の湯者は小野とはいはじ池田炭　山本西春
のし付や太刀造江のあつ氷　大輪田照龍
白土やすさの入江の雪の宿　杉野了春

伊賀

伊賀衆に忍び音とはん郭公　幽山
說經や哀その森蟬の聲　吉田幸順
寶舟纜のみなとを泊り也　万里

伊勢

神風やせいしう万歳君が春　赤塚資仲
伊勢海老や便色ある大かうじ　幽山
指さしておしへよ霞むあれの崎　北川秀將
昔男種や植けん伊勢櫻　幽山
伊勢が歌の流は山田植女哉　日野好元
蟹のはさみ鮎ぞ剃刀櫛田川　土岐祐木
鈴鹿山乘かけの蠅うたれにけり　云奴
七夕や明星が茶屋かり枕　幸順
星合の濱の酢貝も今宵也　幽山
山田守そうづやもどくお長官　米村不尤子

久居にて千句追加に

此上は何かあこぎが浦の月　梅翁

發句合、月前洗米

月よみや清き渚のあらひ米　幽山

久居に始て召れし時

千世や此久居花さへそのゝ菊

山田の心友、奥州下向の時兩吟所望に

伊勢暦みちの奥迄見られけり

志摩

伊勢櫻散や錦の嶋がくれ　中田心友

鳥羽衆興行に

袖に馴てとはにあひみん嶋さらし　幽山
鶴翼か魚鱗かゝりか鳥羽のたて　水野林元
伊勢鯉や難波のなよし鳥羽のたて　笠木友里

尾張

宮にて

春暮て花も源太も神さびたり　三輪一鐵
こま笛もふくいきつしま祭哉　日野好元
烋をとへ呼つぎの濱碁友達　津田心色
大根や尾張八郡引うごかす　吉田沾柳

三河

余所にのみ岑の遷師や目の霞　作者不知

長者屋敷舊跡

忍び音や枕もんだう郭公　幽山

八橋にて

五文字やけふは水行ところてん　梅翁

杜若床や澤邊のちがひ店　吉田幸順
二村や後のしぐれの閏月　恕流

遠江

濱松にかざる柑子やうら白輪　鶯一樂
雪汁や肝にながるゝ大井川　峰幽石
命毛や霞に筆のさやの山　田中良景
鉄橋や濱名に渡す櫻鯛　三輪一鐵
山ぶきの瀬戸の染飯咲にけり　幽山
あし毛馬や卯のしがらむ大井川　維舟

中山にて

爰ぞ命顏淵が命夏の月　山口素堂
引はだに入月涼しさやの山　云奴
命也さゆの中山香じゆ散　梅翁
汗は海袖に瀉なし塩見坂　云奴
旅ねする蚊屋の中山妹戀し　一鐵
たつやいかに鳥居繩手になるこ坂　神野忠知
枝葉さへ霜に白輪の柑子哉　安間景成

今の浦や池の氷のとを〳〵み　龜井盛次

駿河

万歳やあ富士の山彦明の春　青雲
五尺の富士鏡晴けり老の春　改田可心
今朝庚明行富士や年代記　成田交扇
打越のはなれや富士の朝霞　幽山
富士の根や雪汁ひたす貝扨子　三輪一鐵
富士川の水かさや雪の逆詞　玉置無端
引垢や霞の富士の白小袖　四友
さらし干夏來にけらし富士の雪　梅翁
富士の煙耳に消けり郭公　岡如萍

うつの谷にて

蔦楓腹にしげるや十團子　梅翁

同

夏痩に蔦の細道もなかりけり　一鐵
夏痩も目をこそこやせ富士の雪　中田心友
時しれり山はかすりの嶋さらし　松木青雲

うつの山や夢にも駕の蠅拂　中村素朴
爰に一夜江尻さだむる螢哉　梅翁
もちに消る氷砂糖か富士の雪　
五月の富士是も都へぞとられける　幽山
駕は夢蠅心せよけふは富士　云奴
富士を夏かたるも所まだらかな　維舟

禪定しける時

たいまつの影をぞしおり富士まうで　幽山
たいまつや蜈蚣の名殘富士詣　
うつり行雲にわらぢや富士詣　青木春澄
富士は扇汗は清見が關なれや　山口素堂
六月やおはり初物ふじの雪　
白雲やまつ毛にかゝる富士詣　酒井醉滴
釣經五戒はいかに禪德寺　沾葉
九万里の翅やわたる富士の嶽　大林水容
もんどりやうつの山がら四十から　鱗原殘詞

宗長の閑居、丸子のおくに柴屋（サイワク）と
いふ所に、吐月峰と名付られし所

あり。

句を吐(ハク)や世々の形見の岑の月　幽山
雪や富士爐開きいそぐ軒の松　露沾
大口やあきたらで見る雪のふじ　岸本調和
うそつきも此上はいかでふじの雪　枝吉任他
雪の富士親仁の恩は高かりけり　望月千春
雪の富士や天晴尾上は日本一　作者不知
富士おろし摺鉢めぐれり山の芋　西岡泰徳
富士の煙雪やふせこの白小袖　青地正盛
日本の目さらしなれや富士の雪　野村友也

初雪に

今朝ぞ富士首筋さする里の雪　幽山
痩法師のすの字の國や山の雪
山斗等類もなし雪の富士

去御方に始て召れし時

雪は富士申上べき事もなし
富士ぞ烟庭の松原爐の霞　吉田幸順
旦那樣ろくに召ませ富士の雪　服部安茂

西行は根付にしたり富士の雪　素禎
田子の浦ひく根也けり影の雪　沙門才丸
蟹也けり往來の人ふじの雪　水戸庄莫想
足本や金はあり共ふじの雪　若月俺賀
馬かたの增の種也富士の雪　大輪田照龍
雪や礫空にしられぬ富士太郎　田中良景
丸合羽拂はぬ雪や富士の山　沙門吟市
蛤の耳白厚しふじの雪　鹿嶋貞喜
富士淺間烟くらべや雪女　高湖益翁
岩波やなるゝ磯菜のくきが崎　幽山
富士の烟あらしの雪や煤拂　杉山風

駿東郡桃園定輪寺といふ所に宗祇法師の古墳あり。其由緒、かの終焉記に委く見えたり。過し炑尋入侍りて、連式の德名の高き事を思ひて

筆の虫名の虫又あり草の陰　幽山

又かの自畫自讃に

うつしなくは我かげながら世のうさも
しらぬ翁ぞうらやまれぬる

連歌

世にふるはさらに時雨の宿り哉

此像、去御方にありしを寫し侍りて、右の一句の讃を梶井御門主御筆申請奉りて、此寺に送り侍るとて人〳〵に發句をすゝめ侍る。とみの事なれば、遠境の數寄人は猶追ッてよせ侍らんか。

わかれと云鴈の文字もやこい霞　風虎
花に下戸宗祇の蚊屋のたとへあり　露沾
朝顏や宗祇を起す思ひもの　維舟
白露の玉の旅泊や自然齋　西岸寺任口
寫繪や世は折釘の下涼み　土屋四友

祇公、九州にての發句を思寄て

酒の香も菊にしたしき花柚哉　紫塵
面かけの隱逸傳やかた見草　池西言水
日發句やしらぬ翁の年忘　沙門才丸
髭の雪連歌と打死なされけり　山口素堂
宗祇の髭霜もとけけり繪の具皿　藤井松陰
桃園や連歌の仙人世々の花　松木青雲
連歌師か盗人か道人かさよ時雨　三輪一鐵
催したり更に時雨を硯水　西岡泰德
其比の筒音や苔に筧の露　板花恕流
苔ぞ髭さすが名匠の古跡の雪　望月千春
花橘むかしの人や宗祇の髭　津田心色
月次や衣にかけし絡落(クヘラ)の影　水哉
朝哉かざり海老哉宗祇哉　吉田沾柳
宗祇の傳(デン)古郷の月や玉つ嶋　吉田幸順
連歌師の髭や形見の筆つ虫　西岡泰清
朝貞や手水にもろき髭の露　海老名隨曲
風俗や和(ナヘ)ぐ手には唐團　成田交扇
尺八や雪かと見れば宗祇のひけ　坂如船
五句去も形見よ一つ松の月　信水
梅が香は枯木の髭に殘る也　辻呟回
法師斗是はうらやむや名殘の花　服部安茂

像なりて、去方の表具寄進せられしを見て、祇公の作と云袖の下を思ひ出て

袖の下花の錦や表具ぎれ　幽山

甲斐

餞別に

わするなよ白根かすまば江戸の花　小野澤幽風

かみあらひといふ、所の名物と聞て

名也けり芹の白根のかみあらひ　幽山

蝸牛角やさしでの磯榮螺　神野忠知

庭訓にのりけり甲斐の駒迎　宣休

湊や炽江戸の築地と指出の磯　藤井松陰

白根こそ甲斐の源氏のはたれ雪　松村正阿

伊豆

三男や蛭が小嶋の若夷　西岡泰清

色川や水上は樽桃流し　露沾

石橋山戦場を思ひて

うつぼ木や頼朝朽て飛螢　同

箱根哉わらぢにかゝる雲の岑　云奴

峠涼し沖の小嶋の見ゆとまり　山口素堂

江山やぬまづの屏風たか莚　梅翁

石橋山戰場扇の漢筋にて

露おちけり君子も小道の地藏堂　千之

出湯の賑ひを

東の澤鳴たつ暮もなかりけり　幽山

宮城野ややゆかたと申せ山路の露

絹黄ばみ雁みんなみや八丈嶋

上人や名の月あぐる箱根山　延澤破扇

紅葉〻のうすき色にやいづ蜜柑　風虎

まな鶴や頼朝の札千〻の炽　幽山

泊り也あしがら箱根置火燵　荒山不恐

下り行右にみしまの暦かな　齋藤徳元

相撲

蓬來やうら白は御所の鶴が岡　吉田幸順

金澤の猫や忍び路けはひ坂　幽山

北條屋敷の跡

古屋敷蛇やぬぎ置うろこがた　吟市

興禪の氣をやしなふや寺の花　忘十

ちる花は刑部梨地か山の内

何代か玉まく葛葉つるが岡　梅翁

螢火は百が物ありなめり川

山の内や兩上杉の下すゞみ

大磯にて

虎ごぜの石も沖也五月雨　幽山

鶴が岡に、いにしへのいてうの木殘りて侍るを

虫干や東かゞみのいてうの木

白雨やから尻馬のかたせ川　西岡泰清

子の爲やさかさま川の水せがき　西村良庵

海老の色や鎌倉山にいりしかば　高橋東風

あしがら越・關にて

炽の山や足輕箱根猩〻皮　幽山

初雪やあしがら隱る馬の沓　津田心色

鎌倉にて

隱家や雪待江戸の吉野山　似春

誹枕集 中

武藏

武藏鐙七日の御調荷中ぞ春　露沾
板橋やたのしみをこめて芝の春　曲言
富士ぞ民の竈につゞく江戸の春　幽山
芝海老やあり數にせん江戸の春　吟松
塊飯は武州のさたよ江戸の春　資塚赤仲
蓬萊の蜜柑々子や紅葉山　正原嶋名
若水や纓(エイ)をあらはん江戸の春　可瀧芹利
其如し千代田寶田おゝん春　青木松雲
明るけしき筆捨松や四方の門　安井藤昌
初空や上野の霞氣がつきけり　怨花板流
玉川やさらしの鼠え方より　可田阪心
江戸橋の世や張良もはだしの春　露章
明て今朝霞が關や番かへり　信水
江戸ならで千世のためしに何の春

江戸小判天の羽衣幾代の春　正英
鷄のとうてんかうぞ江戸の春　有之林松
大繪圖や鏈ほど〳〵に江戸の春　青木松雲
人丸いかに年のほの〳〵明る江戸　泰岡西德
ほら貝や春しり初る江戸の海　宗丹伊旦
水道や苔に聞えて江戸の春　友木笠里
淺草紙塵ぞ金山江戸の春　素口山堂
花の千世の何かの春も江戸也けり　正村松阿
武藏野や霞の衣の張物場　幽山
婆婆慈眼我等が爲や上の〻花

幽山、京上り餞別に給ふ

江戸かよふ風情の留主や花曇り　資塚赤仲
花を呑樽は吐(ハキ)けり黑門口　素口山堂
小僧きたり上野谷中の初櫻
參勤せよ吉野も爰に江戸櫻

幽山方へ申侍る

かけて思ふ鐙か京と江戸櫻　宗氏林甫
江戸櫻吉野法師もなるまいぞ　松井藤陰

花は上野時にたゝぬや芝肴　維舟
上の〻花人の咄しの腰折けり　素禎

上野にて

法の花見三佛堂の因ぞかし　信水
花の比みよしの〻雁や入間やう　雖州因云
色をかへ品川のりや春の海　乘豐
代也けり春宵一刻江戸の地子　專門沙吟
苗代や此土をかへしてすみ田川　資塚赤仲
武藏野や富士に付紙いかのぼり　塵口江言
武藏野も山の字はあり郭公　風松虎
撫子のつゞきの原や一ッたね　正村阿
入あいひのかね澤しばらく釣鰹　梅翁
清水門や民のとゞまるところてん
江戸店や戸ざゝぬ御代の下凉
箸と足と黑鴨の子やすみだ川　維舟
武藏野や大白　も百分一
金澤や猫の目を出て飛螢　似西小春

旅行に

名殘凉し芝よりかへる波よやい　云奴
蟬一首筆捨松にとゞめたり　幽山
地にあらば富士武藏野よ二日生　玖山松也
攝待や堀兼の井もある物を　調本岸和
聖靈や向ひの岡の草なれば　黃月望吻
ふか川や花火によする歌枕　露沾
いり物や露も折たく芝肴　青木松雲
武藏のゝゆかりの文字や荻と萩　泰岡西清
武藏野や尾花あし毛も江戸公儀　維舟南
淋しさや江戸のきれ物烋の暮　玄順
武藏野や月も所も無二無三　忘十
武藏野に蟻もはいけりけふの月　生里
武藏野の月に罪障の山もなし　正藤岩臨
御威光や山の端にけて江戸の月　幽石大井
武藏野やそれ釋尊の胸の月　素堂山口
武藏野や月宮殿の大廣間　蝶〻子神田
武藏野の月を背屐や草の露　資塚赤仲
燈臺下武藏野の月今日の雨

わたる雁や常盤橋から日本ばし　作者不知
武藏野や鑓持もどく初尾花　池西言水
武藏野や織留しらぬ唐錦　青木春澄
武藏野や炁の寢覺も半分道　山口素堂
武藏野や富士のね鹿のね虫も又　田中久光
神明市和國において生姜多し
ふき墨や波もしぐるゝ筆捨松　四友
江戸橋や公儀なれたる霜袴　藤井松陰
しば鳴や品川ちかき浦千鳥　椋梨一雪
初雪や江戸の人あし跡の沙汰　幽山
富士の根やぎぼうしの雪日本橋　枝吉任他
雪の富士巾着かへせ日本橋　作者不知
武藏の丶月に挑灯やふじの雪　南部正焉子
江戸橋や鯨つもるふじの雪　美濃如雅

金澤にて

能見堂うしろに目哉ふじの雪　四友
品川饅うき世は波もなかりけり　曲言
書置以後筆捨松や金澤饅　赤塚資仲
武藏鐙かゝる折にや饅汁　板花怨流
すさまじやおし熊谷の冬の月　三輪一鐵
福は外鬼うちまめや入間やう　杉野是心

安房

中昔蓮の若葉や誕生寺　板比怨流
爐開や梢おしまぬ鋸山　露沾

上總

上總みほ千世の目當や松の春　芹澤可利
防風とる黑戸の濱や砂事　小澤右下
百首村幾世の公家の詠の月　露章
冬枯や千くさの濱の貝のうら　美濃正勝
聲やさし長南の市に寒の紅　幽山

下總

京迄や江戸葛西苔千葉小山　天野野夫
けふや手兒名まゝの繼はし雛事　幽山

郭公封じこめけん龍が崎　沾木
本庄天神にて
新地にもかくなる物か梅の實　梅翁

同じ所

筑前の三笠と申せ梅の雨　幽山
今日一葉嘸あすからは千葉小山　維舟

塩濱を行とて

行德やけふは賴の日あげ灯籠　幽山
きぬ川の末下おさやうす氷　神野忠知

常陸

蓬萊や霞うながすしだの葉も　桑原維舟
代の春や筑波めど木のあらん程　沖石
富士築筑波寶引しけり朝霞　幽山
齒固や鹿嶋の神のあらんほど　荒井直良
常陸には田作りや猶祝月　安田柳話
鹿嶋祭それこそ帶の望なれ　外村長尙
大柄扨霞やとづる櫻川　河原政玄
花にこそ眼よすらめ櫻川　中田心友
櫻川水增水とちりにけり　赤塚資仲
築波根や大悲茂り夜盜に影　成田交扇
辨當の中の湊や沖なます　風虎
立よらん汗や雫の森の陰
炁風も事ぶれ也けりかしま松　南都閑
浦は霞霧や證據に立增り　幽山
三ヶ月や板敷山の釘がしら　鶯月正焉子
色になる滴の森や下戸の果　千春
八の耳ふるや鹿嶋の神〻樂　田中貞良
あしほ山雪やまゝ子に夕嵐　池西言水

近江

白髭の神ぞしるらん年の春　大林未調
大津のさま松立わたし賑也　水容
梅ヶ香の彌高山や靑地の雲　露章
けしかけな犬上山の春の雪　吹田舍勝
我は花の雲を乞にや鳥籠の山　日野好元

鐘よりも秀郷つらし三井の花　森一勝
羽箒の雁こそかへれ床の山　小野澁風
今日は嘸草津の姥も蓬餅　神野忠知
水口業籠(コリ)を花見や藤の店　大輪田照龍
茂り行草津の姥や餅の情　梅翁
南天や手馴のしけり鏡山　茶瓢子
是をきれば彌高山や梢の夏　望月千春

ひえにて

夏の夜や立の三點(テン)よこに雲　三輪一鐵
見せばやな志賀のからろも舟まつり　日野好元
筑摩祭毎にときめくやお鍋女郎　田中良景
筑摩祭鍋とり公家のたはむれ屋　幽山
筑摩祭鍋の内床し抄子負　日野好元
筑摩祭さあ破(ハ)鍋にも地黄煎　桑原沖石
石山や湖水の重し一夜鮨　三輪一鐵
戰ひけり螢勢田より參あひ　山口素堂
摺火打朽木の杣やとぶ飛　坂如船
伊吹おろし皮切ぞ飛夕螢　辻呟同

烝の月打出の濱や碁笥のふた　北川秀將
鏡山月出が崎や友ひかり　さゝきつし
腰辨當月出が崎や舟よばひ　露章
いざよひの月やかけ物床の山　田中良景
床の山や紅葉亂て赤子の聲　小熊不門
坂本やしの宇を烝のさよ枕　西周泰清
神農や木の葉をかづく床の山　池西言水
横川よりおち葉衣や座主ながし　安田柳話
床の山木の葉ぞみだす湊紙　近藤如幻
犬上のとこの山引夜興かな　日野好元

三井寺にて

寺ふりて霜や狂女の鐘の聲　北川秀將
水かねか雪に白見のかゞ見山　友鷗妻
三上山や江戸見た人の富士の雪　辻呟同
打出の濱碁だちや雪に村がらす　坂如船
冬の名や風の三郎新羅の森　捻少
光陰や矢ばせの浦の寶船　吟松

逢坂にて

手ぞ清水背中ふく風尻に岩　三輪一鐵
關の清水古郷戀し生鰹　松木青雲
帷子のあさ妻や名にあふみ布　日野好元
經よめり蟬の三井〳〵寺はやし　太田幽閑
湖水涼し此物語を馬子にまかす　田中良景云奴
あつき日は森の名にたて風ゆるぎ

勢田にて

夕だちや虹のから橋月は山　山口素堂

粟津にて

かけ涼し松原さしておち日より　梅翁
今朝の烝ゆるぎの森やはや合點　信水
梶の葉や武佐墨ながすやすの川　幽山
朝にはせんだんごをや三井の寺　池田宗旦
拍子こそあはづに果れ木曾踊　次木壽見
白髭の塵とる禰宜やお開帳　青木春澄

當國の住岡氏頼母興行に

水莖の岡の田面や烝名寄　幽山

美濃

養老の瀧つほやたんぽ春の水　濃州正勝

大垣木因にて

今宵は爰いびき下風や春の夢　桑原一鐵
今日ぞ菖蒲不破の關屋の板かへし　桑原沖石
谷汲やいつ納むべき蠅ばらひ　三輪一鐵
槌衣笠縫の里に響けり　津田心色

不破にて

烝風やたゞに千金後京極　幽山
酒食やむしろ田の菊四方のけふ　風聲
風聲や關のふぢ河寒つかひ　曲言

飛彈

蓬萊や飛彈の工の鳥の千代　西岡泰德
鳶いかや飛彈の工の智惠の糸　同泰清
位山肌には何をか錦ちる　板花恕流

信濃

初午に引や望月いなり山　延澤破扇
梯(カケハシ)やちらぬ花ふむ東山道　眼部安茂
諏訪の池狐がてんか夏の月　三輪一鐵
梯や身を觀ずれば瓜の皮
寢覺の淵きのふは蚤にくはれけり
參あひて三百余人や木曾踊　青木春澄
新そばや打詠行ば信濃なる　幽山
山姥や麻きぬをうつ寢覺の床
月細し鼠大根のおば捨山　赤塚資仲
此月になぐさめ兼つ下戸捨山　杉山仙風
姨捨やはちいろ〳〵の花火に月　幽山
きり原の駒や雲井にそびき物　今井昌倫
栗賣も久米路の橋の心せよ　幽山
神の旅淺間が嵩や大たい松　露沾
世也けり木曾の梯(カケハシ)ふぐと汁
雪の夜やあかり障子の一重山　中澤光重
五十年寢覺の床や俊拂ひ　荒山如雲

上野

吾妻(アガツマ)やおのこの里の化粧文　板花恕流
茶屋料理佐の〻くゝだち鳥はなし　西岡泰清
佐野綿も取はづしてぞ袷ぬひ　中西喜澄
今日ふくや軒の板はなあやめ草　眼部安茂
坂東太郎名こそながれて五月雨　神野沾木
戸障子や佐野の舟橋夏座敷　幽山
炎風やふきあけに館(タテ)の若たばこ
蛇の衣霧やふき干いかほ風　板花恕流
佐野綿や袖打拂ふ雪の宿　吉田時庸
雪の内の馬上や佐野の夕渡り　青木春澄

下野

おながれや日光折敷神の春　藤井松陰
那須紙や玉藻の前の化粧文　田中久光
黑髪山耳にかゝりけり郭公　大坊政忠
出あひ星那須のゆり金七夜かな　吉田時庸
三かの月黑髪山のかうがい也　北川秀將

藥師寺にて
道鏡いかに室の八嶋も都の月　幽山
薄雪やかしらの白き鴉やま　田中良景
雪ゆかし黑髮山の額つけ　如醉

陸奥

蓬萊やかざる松しま龜が崎　風虎
蓬萊を子共あらすな松嶋や　六名心棘
蓬萊や松前こぶをおくの嶋　藤井松陰
御代ぞ春奥のおく迄仙臺百　勾當立吟
けふ引や琵琶のしがらみ小松楯(タテ)　幽山
黑瀧や霞の絹の洗ひ汁　神野忠知
米澤や白水ながす春の雪　松木青雲
ともしけり會津の花に五十目掛　辻吱回
神木や花もおくある鳥井坂　幽山
おく床し壺の石ぶみ爐路の花　松村正阿
御前句や西行戻り花に風　池西言水
行雁や花にそむきの嶋隱　水哉
面かけの春や燒筆屏風嶋　見玉久友
あまざかるひいな遊びやけふの里　小館長意
金の精螢飛けり陸奥山　山室政久
汲影や清水ながるゝ鬼柳　田中良景
黑雲やゆふだちが原にあらね共　辻吱回
おもはくの橋や鵲(カサヽギ)星の緣　露沾

岩城名所發句合に
鳴立や炎は夕の風呂の澤　幽山
上戸もや雄嶋の海士の袖の月　三輪一鐵
山の井やよしともいはじ月の事　神野信水
友にしておらばやおらが濱千鳥　忠野知
燒炭や黑森の名にたつ烟　風虎
岩城炭八千世をしるや國境　吟松
算用やけふの細布年の暮　青木春澄

出羽

若和布かれ迚もぬれたる袖のうら　北川秀將
目口には蚊ぞうやむやのせきばらひ　風虎

袂草しけるやもしほ袖のうら　万里
羽黒山はふしをそろへてわたるや雁　荒山不恐
羽黒山霜や梯わたしがね　辻吉回
六ッの花や扨又出羽は十二郡　俊則
山形や雲の袖うら片時雨　露沾

若狭

喰つみや八百比丘の青羽山　池西言水
遅櫻とばぬ家鴨や青葉山　沙門才丸
里の子や麥わら笛の青葉山　藤井松陰
後瀬山しぶ柿も又頼みあり　藤井松陰

越前

君が代は命買にぞつるが市　小澤栄下
出仕日や朝水の橋ひさくの露　福田露言
武士の矢田野の露や鼻あぶら　藤井松陰
霜となるや露の玉子のかへる山　北川秀將
あさむつは夜明の鐘か橋の霜　赤塚資仲

あかゞりやあさぢ色づくあらち山　吉田幸順
末いかにあかゞり足の道の口　幽山

加賀

母衣きか籠の渡りの薄霞　村田一友
加賀に小松引や越中に治郎兵衛　磯幽山
夕がほの馬うつ波や蓮のうら　大輪田似水
帶はさみこしの白根や鹿の角　大輪田照龍
北州の前栽や加賀の菊の酒　小杉一笑
雪の日や見ぬ白山の物がたり　南部聞松
加賀に梅田雪中に咲花もがな　井狩友靜
虎饅も嘸な住べき竹の浦　南部幽閑
饅賣や籠の渡りのうき世のつな　福田露言

能登

春風にさはぐやすゞの海雀　山室政久
能登鯖に鈴のみさけや生みたま　荒山如雲
門脇の能登の指鯖や市の店　渡邊不存

文沈の鳥や雪に机嵩　幽山

越中

のうれんか戸がくし山の朝霞　岩本邦重
巣を立し鳥や子知ず親しらず　一雪
松の雪消てや聲をあげろ山　青木春澄
店經に上るやふせのうら盆會　井狩友靜
もれ行やすがのあらの〻鶉網　慎的子
澁谷の水の行衛やさはし柿　青地正盛
女波男波月こそかよへ親しらず　服部安茂
むくや今宵栗から落しこしの月　云笑

越後

眞切の跡や越後の雪なだれ　沙門才丸
布涼しおくび違の佐渡越後　幽山
越後鱈風のかけけりもしほ草　水哉
光ふかし越後蠟燭暮の雪　赤塚資仲

佐渡

鳥ぞ金衣袈裟掛松に法のこゑ　吉田沾柳
松ひくし雪の高濱雲に下駄　板花恕流

丹波

蓬莱の野老に仕けり大江山　西宇八
花ふるや幸が遠近皷山　幽山
鶯のこ式部名のれ大江山　木元長英
鼻くたや穴憂の里薫風　大輪田照龍
丹波山おろしき物や栗のいが　西岡泰德
煮紙子や生の〻道の大江山　曲言
つれ〴〵をすさむ丹波のこ雪哉　大坂休甫

丹後

高嶋やうら嶋が跡を老の春　高嶋玄札
今日長し七世や春の夕日の浦　幽山
包丁やきれとにかゝる丹後より　日野好元
寒聲や夢も結ぬよざのなみ　露沾

筆の海懸の湊や大節季　西岡泰清

但馬

散敷や櫻包みの琴引山　板花恕流
浪よせて雪の白濱やしらす干　露章

因幡

漉紙や花のしがらみ袋川　幽山
そひ山や二子をひらふ木の間の炉　板花恕流

伯耆

長年の始や里のかざりなは　幽山
大山や雪道分る等坊　梁渠一雪

出雲

若和布もや汁の妻こめ出雲のり　救濟
苗代や八重垣つくる出雲鍬　沙門木也
涼風や留主に成けん日のみ崎　幽山

浪のおさ文字や錦の浦の雁　大輪田照龍
にくい鼠月もる穴やてまの關　飯田末計
ちりめんや八尋の濱にうつきぬた　西岡泰清

石見

一月やわたりの山の春の雪　同
たゝみ枕春の泊りや日ぐらし山　望月黄吻
樽底や日ぐらし山のかんこ鳥　坂如船

人丸寺にて

見果しや高津碁石に月日の空　幽山

隱岐

後鳥羽院御舊跡を見し時、苅田の池の御製を思ひ出て

讀や蛙御夢の定家さむれば又　幽山
萱が軒月見の供御や隱岐鮑　維舟

俳枕集　下

播磨

人丸や明石のうら辻筆はじめ　加納嘉辰

あかしにて

木綿帆の風をしぞ思ふ花の雲　幽山
月も今宵きらを琢やはりま米　大坂休甫
民の炉命也けりさよ郡　丁我
新酒の舟おしぞ思ふ明石米　梅翁

あかしにて

人丸の手水たらいや霧の海　三輪一鐵

同じく

朝霧の人丸消うせにたれ共　林宗甫
すま明石今宵ぞ月の芋畠　長坂守常
月の夜や新發意踊明石潟　日野好元
月や明石たゞ淨るりの泊り舟　林宗甫
權右衛門聲響也尾上の霜　望月千春
高砂の尾上のかねや役拂　幽山

美作

花車引やえいさら山ざくら　後藤求笑
しゆんかんや久米のさら山初わらび　吉田幸順
木の子數寄露なし山を數けり　板花恕流
錦手やさら〳〵山の村紅葉　津田招晦
雪女いつか姿の橋の霜　幽山

備前

浦の男近づけてとれ藤戸のり　橋本富長
犬嶋や櫻の波の名也けり　河原政玄
裳かけ也虫明のうら土用干　磯村其与
牛窓や波に花火の車船　吉田幸順
月の輪も十の牛窓開けり　信水

國に學者のはやりければ

牛窓や雪により〳〵是を　幽山

備中

同類やさゝやきの橋わかれ霜　西岡泰德
野馬臺や吉備の中からつゞく雁　露月千春
つんぼに鐘さゝやきの橋やよはの霜　池西言水
蠣を取瀬尾も近し太郎月　維舟

備後

出替や口無の泊り遊女の果　幽山
烽は木葉月は冬こそ三原酒　維舟
息の勢ふく山合戰也雪うち合　赤塚資仲

安藝

蓬萊や先いつくしまあきの方　三輪一鐵
猫瀬戸や妻に心をつくし舟　松山玖也
宮の市や上ゝおろしありの浦　幽山

宮嶋にて

廻廊や紅葉の燭鹿の番　山口素堂
香さゆる瀧やしゃみせんのいとき嶋　廣嶋爲時

渡天かと爰宮嶋や雪の山　維舟

四四二

周防

室すみをかざる竈や祝嶋　松村正阿
さゞれ石や岩國半紙飾わら　美濃木牛
花の名にたつや白浪普賢灘　福田露言
三田尻の螢や漁父をたすけ舟　西岡泰德
三か月は櫛を見せけり舟木山　五十君安次
大内桐今は錦の烽也けり　幽山
饅の醉祝嶋にぞさめにける　板花恕流
寒月や山口に入こほり餅　三浦海士

長門

けふぞ猶長門の飾あふの松　幽山
食櫃や蠅をゆるさぬもじの關　大輪田照龍

あみだ寺にて

手向るや一門みな〳〵舟灯籠　三輪一鐵

追善に

取かへす玉にもがもな萩茶わん
文司の雁誰がかよひぢのいなり町　海老名隨曲
かたぶく月詠もたるしあごの海　幽山

紀伊

和歌の浦や長点かけし夕霞　小向如眞
青ざしや錢かけ松の若みどり　井狩友靜
箱戸樋や猫の落合いもせ川　坂如船
御影供や花のかたはらの高野まき　風虎
一聲や高野で女ほとゝぎす　根岸意倫
帷子や我妹嶋のさらし布　風虎

太田定時餞別

朝もよひき國の後や文月夜　幽山
されば和歌の事新しや浦の烽　梅翁
露の世や万事の分別奥の院

大德院興行に

霧に高し八棟作り八の谷

下向、櫻茶屋にて

煮てゆ高野山より出たる芋
高野那智中にぶらりやとしの烽
高野槇霧の物いふ雫かな　維舟
うら辻が筆捨松や鹿の聲　梅翁
根來物つよみをゆづれ村紅葉　山口素堂
古筆切誰がかたみのうら千鳥　幽山
一里一羽住や千里の濱千鳥　玉置無端
みつちやづら妹せの山や霜崩　坂花恕流
巾着切緒捨の山や玉霰　才丸
煤はきや古屋のとまり札納　幽山

淡路

によろり春玉のやう也おのころ嶋　小坂井雅計
うまづ女に見せばや春の淡路嶋　幽山
面影や松帆の定家繪嶋の月　中野廣凡

阿波

出かはりはあはのなる門よかぢの者　江口塵言

里の海士にて

春や昔講式料も藻塩草　幽山
塩竈や柚味噌の烟里の海士　板花怨流

讃岐

朝霞さんしうにして立にけり　飯田員成
佐保姫の枕硯や筆の海　板花怨流
海松房も房崎の名をかりにけり　高橋東風
うら盆や八嶋にたてる高灯籠　福田露言

崇德院御廟

さぶらひけり白嶺の月に宿直猿　幽山
跡ありやてには泊りの磯千鳥　成田交扇
出女や泊りの磯に呼千鳥　坂如船
くり綿や弦打山の雪颪　西岡泰清

伊豫

道後の湯にて

立や霞湯桁の三十三天まで　幽山

三嶋明神にて

白ゆふやかけて涼しきいよぞうめん　一鐵
身はふりてゆるぎの橋や奥齒の霜　幽山

土佐

天下一土佐也花の鏡川　山室政久
十文字やふむ足拍子土佐踊　柴田吟舟
土佐出しを引や辨慶が駒迎　幽山
土佐紙や竹齋がしは年の暮　幸順

豐前

蓑みの嶋やはち卷とつて郭公　海老名隨曲
もんどりや山彦の山郭公　維舟
螢こいと呼や豐前のこくらがり　梅翁
戀にとられ七よの星や彦の山　吉田委心
盜人上戸倉無の濱や瓶の菊　水哉
神詠の字佐に也けり四方の冬　幽山

豐後

花守をたのもし人か豐後梅　福田露言
豐後梅西國武士の見るめなり　甲加正倫
麥烝の比や臼杵の里どよむ　桑原沖石
あかゞりや筋吹姥が嶽颪　辻呟回
笠縫や豐後しぼりの村しぐれ　幽山

筑前

箱崎の松や傳受のわか綠　高瀧益翁
二日灸賴むせ淺しうるし川　曲言
竈山花の木の間や借座敷　板花怨流
火燒鳥住所なりかまど山　多門蹄元
干肴や箱崎の海夏日和　澤田榮政
玉ふぢや明る箱崎の松の露　維舟
箱崎や鼠おちくるけさの月　辻呟回
大鉸荒船の宮や留主の鑑　望月千春
切炭や杣が爐路入竈山　吉田幸順
一時雨みの笠の森やさゝらすり　坂如船
猫や聲身のうき濱の鰒のわた　藤井松陰
寶船金の御崎やよはの床　小泉不門

筑後

花告てはや見の里や荷鞍馬　露章
相宿や螢の火燈一よ川　辻呟回
冬やくるめ炑ふかくなる一よ川　維舟

高良にて

玉だれの小瓶や通夜の一よ酒　幽山
尺八に時雨ぞかよふ一よ川　北川秀將
敷寢する舟の夢路や一よ川　藤井松陰

肥前

蓬萊や築紫の富士に肥前米　長崎摺水
門は松浦餅や鏡の神の春　赤塚資仲
川上や宮前の楊柳肥前の花　磯梅翁
蓼酢走れ玉嶋川にはあらね共　荒木田似水
撫子の花入や是松浦舟　武珍

浮人形みな月はやし水の浦　水哉

長崎にて

入船やいなさそよぎて炎の風　山口素堂

錦手や伊万里の山の薄紅葉　梅翁

長崎やうつ音近しから衣　幽山

立や霧平戸香箸塩烟　澤田榮政

長崎にて

端物（タン）の湊や炎の織とまり　三輪一鐵

梅翁當國佐賀にありときゝて、い

ひつかはしける

引込やうき世のさがの角頭巾　石原正成

さび鮎や松浦五郎が九寸五分　村松水音

松浦人簇がしら也鯨舟　京守昌

松浦田嶋といふ所に、ひれふりし

跡の石を見て

寢姿の石や名にふるさよ時雨　幽山

肥後

鬢付や風流の嶋櫻貝　露沾

春の日にかすむ白かはふすべけり　志水可春

防風ありうどの長濱沖鱠　畫月黄吻

波涼し我等も獺のたはれ嶋　日野好元

水無月やいつか來にけん裸じま　幽山

蚤虱はだが嶋へぞ流（ナガサ）れける　吉田幸順

あその宮遊ぶ友なりやよるの月　維舟

安蘇の嶽や烟も富士も雪うつし　白井重則

塞垢離や波のよるべの裸嶋　齋藤調鶴

夜着や波岩床枕裸じま　海老名隨曲

桶ぶせや行年波にたはれ嶋　西岡泰德

火櫻や手吹に散す風の森　海老名隨曲

薩摩燒瓶に咲けり大すみれ　内海安重

つゝじの名を

霧嶋や八重の塩路の朝日かげ　藤井露沾

藪いしやも炎こそとはめ風のもり　藤井松陰

炎すでにけしきの森や聖靈店　小熊不門

御臺君達歎の森葉落にけり　幽山

薩摩

うらやむやさつまとび魚もいかのぼり　西岡幽山

風涼し八重のひだ織さつまもじ　藤井泰清

白じゆすや唐の湊の雪の舟　藤井松陰

足すりをするや鬼界が嶋千鳥　大阪空存

役拂ひにながされにけり鬼界が嶋　幽山

壹岐

殘りけりまだらの牛に雪のしま　岡如萍

みるめの浦我におしへよ釣がつほ　水哉

數寄人や引野に渡る鶉濱　成田幽山

唐くらけ波は越けり雪のしま　成田交扇

風本に通事（ツウジ）やかよふ友千鳥　下方幽睡

對馬

對馬根や組蓬萊の髭人參　幽山

吸筒やまたぬ花見のあさぢ山　大輪田照龍

風薫れ竹敷浦の畫ねの床　板花恕流

人參や君に引れていき對馬　松木青雲

惣軸

五文字や日本にむすぶ飾繩　云奴

外國

唐船よ隨分渡せきそ始　廣野元好

蓬萊や琉球の嶋羊（ヒツジ）米　大坂肩柳

大ふくや見ぬ唐土の今渡り　服部安茂

うら白や敷波越て長髪國　京 如葉
はま弓も君にあげけりしやくしやいん　伊 宇八
こぶのりやとられてなみの鬼がしま　大阪 三昌
楊貴妃を馬鬼（バグワイ）が原や花のかぜ　齋藤調鶴 維舟
せい高嶋裾は見えけり夏衣　井口 如貞
他國もつむるやかぼちやるすんつぼ　沙門 才丸
夏の夜やね姿恨む小人嶋　板花 恕流
五月雨に芦の葉こぐべし小人嶋　岸本 調和
天竺川伽羅に竿させ妻迎　牟井 一六
ゐぞがござに曇らでてるやさけの魚　幽山
桂男なぐさめ兼つ女護のしま
かびたんも土産はづべし野べの烽
仲丸が三笠の月や唐の芋　大坂 西武
入札や心當にもおらんだ荷　池田 三昌
阿蘭陀や札もおち塩湊舟　大坂 宗旦
からびたる聲や朝鮮筆つ虫　松木 意朔
烽の暮此上いかに無人嶋　青雲
引鰯鶴にとらるな小人嶋　風虎

馬鬼が原たそがれいかに雪女　露沾
疫拂函谷の關も越ぬべし　秀貞

追加

庭竈民や難波の帝より　播津 才丸
お茶壺や朝日が嵩を年始　山城 言水
とそ酒や武藏野も君が万壽盃　磯田 正隆
門禮や出入の森松かざり　橋本 幽焉
佛の座つむや嵯峨の〻はらこもり　山城 水無 如醉
束帶せり軒に袖こす豐後梅　石川 雲鶴
無緣寺や梅花を折てしやれ首（カウベ）　武藏 小熊 不門
うばばみや霞をおよぐ雨ふり山　相摸 板花 恕流
一の谷はせ來る鹿や角落し　播津 川嶋 丁夢
初午や杉折の窓いなり山　山城 三輪 一鐵
吉野山箸や枝折の餅くばり　大和 曲言
布引をのぼる小鮎やかすり嶋　播津 服部 安茂
ねはん佛やあはでの浦のうつせ貝　尾張 小熊 不門

杣が袖引や霞ののこぎり山　安房 露章
薪（大和）也吉野の春の杉楊枝　江尻長谷川 吉里
いぶき山ひねる間遲し草の餅　近江 政玄
かはき上戸渦まく花や泉川　山城 烽水
繼飛脚淀のわたりや郭公　同
追行や土肥杉山に郭公　伊豆 藤井 松陰
茂りけりかくれんぼうに桂山　丹波 荒不恐
初鰹飛や砂金高師のうら　和泉 云笑
中泉足を休めて夏もなし　遠江 長谷川 吉里
五月雨や手のうら返す大井川
女護の嶋密夫かくせ扇箱　外國 津田 心色
古歌や呑いきの松原砂糖水　筑前 村松 水音

豐國にて

烽近し時代は遠しなく螢　大和 三輪 一鐵
農人やたばこの花見吉野山　相摸 大輪田 照龍
鎌倉や禪尼の障子今朝の春　長谷川 吉里
道頓堀きのふ也けりすまの烽　攝津 三輪 一鐵
見猿いは猿耳なし山や烽の暮　大和 調和

菊咲けり大澤の池高家衆　山城
芽狩や小者うしなふ三保の浦　駿河 長谷川 吉里
鳥羽絹（ケン）やまきもくひゞく槌の音　大和 千春
焦飯（コゲイヒ）やゆつきの嵩の下紅葉　同 大輪田 照龍
革頭巾きなれの山や本の鹿　同
菊ぞ濱かよふちろりの音きけば　豐前 云奴
うはなり打心の鬼や丹波栗　丹波 露言
納豆の濱名に渡せ精進ばし　遠江 曲言
足袋の土高砂のうらにつきにけり　播磨 榮政
女足袋紫野行ゆかり也　山城 才丸
かます頭巾二村山やゆく嵐　三河 成田 交扇
我やおらんせい高嶋もふじの雪　言水
かせ杖や背（セナカ）につかすふじの雪　酒井 滴醉
皷山淡雪やつばきこだまのこゑ　丹波
本目（モク）や海鼠腸をたつ浪の聲　武藏 松風
すをまいて見るや越後の雪の魚　白江 醉鶯
餅花やゝゝが詠のよしの山　素禎
一とせやおはり八丈きぬくばり　幽明

さし串や竹の都路門鰯　太田知能

駿河桃園定輪寺宗祇舊跡手向　追加

方角抄袖もる月よ歎きの闇　云奴
かみわけし連歌や臺蓮の食　曲言
空ぞ名殘東門答よゝの月　丁我
手鑑や面影の月髭の露　捻少

宗長の追善を思ひて

朝露や分し足がら箱傳受　霽月千之
芋の山宗祇のつる葉茂りけり　岡村不卜
吉光や宗祇の筆や郭公　若林不外
宗祇以來懐紙の花や吉野山　鹿嶋貞喜
桃園や三年寢ても昔の夢　高橋東風
北野の神お髭や分て袖の花　小野澁幽風
十德や夢をのこせし蚊屋のきれ　神田蝶〻子

奥州名所八色を聞て、追ておくり侍る

宮城野の萩やゆたんの錦革　同
笠ぞ露奥州之住人十荷の菅
袖涼し伽羅の埋木名取川

同

名取川蛇に蛙や源三位　岡村不卜
いづれの歌人十荷の菅ごも聖靈棚
初茸やあねはの松の人ならば

洛有二好事之士一某氏而幽山者其一名也恒嘯二傲于風一雅域一飄二逸于塵俗表一嗜二倭一什一能二俳一歌一蓋以レ之遣レ情娛レ志且追二司馬子長之壯志一本朝方輿州群郡遊歷而不レ止席不レ得レ暖突不レ得レ黔擔レ簦負レ笈蘭レ足履レ鞋扶桑六十州古一區舊地名山大澤比年之際足一跡迨一遍東超二白川關一西極二紫陽地一北隅南裔尋訪無レ違所レ到賦二倭章一言二俳詞一感二前右一慰二旅況一唐胡魯經二行四方一毎名一蹤古地題二詠一史詩一令幽山意侶レ同二其風調一矣又於二本邦一古來入二倭一歌者流一者求二所謂歌枕者一一笠一節周二遊于天下一者自二能因西行之儔一迄二于宗祇宗長之徒一往々皆然幽山亦慕二蘭之一者乎諒可レ優二賞之一哉頃歲二東遊一卸二駕於陸奥忽一々一内名一境舊一跡莫レ弗二備覽之一焉其地各有二名物一而一存右歌之内皆詠レ之故就二其處一其物之可二攜一去一者取レ之求齎二旅裝之中一而一後旋レ洛爲二奇一玩物一俾下風流好事者清一賞之上也矣吟客韻人名二于風雅一者贈二詞語一賦二歌詠一金玉璨々其辭一藻可レ觀焉彼名一產者所一謂武隈阿禰和末松山松枝也宮一城一野萩莖也十符浦菅葉也名一取一川埋木也緒絶橋板木也實方古墳薄草也幽山近來二斯邦一也寓止有レ日與レ予盍簪心一太一熟矣一日座一會談逮二拙文一因乞二予盾一一語一予感二激彼雅志一而忘二吾孤陋一題二此八一種物一卒製二唐躰一律一陳二地名物產一併記二遠遊之文實一且加二稱嘆一云レ爾

詩云

武一隈阿禰末一山巔　森鬱老松經二幾年一
留レ薄實方幽魄去　種レ萩爲仲美一名傳
右一菅偶得十一符一浦　埋木潛一搜名一取一川
過二緒一絶一橋一履二佳境一　美君跂一涉極二東邊一

寛文十庚戌稔仲夏日

曰山隱士鬼鄰翁
小泉友賢漫筆

宮城野萩

宮城郡仙臺より半里計東南。國分寺藥師、此近邊也。

宮城野やほる人も人萩も萩　風虎
詞書略之
宮城野の景やあいもち萩と露　松江維舟
以下同
つけがたし萩に宮域のゝ我發句　北村季吟

見ぬ人の爲仲やおる萩の花　楓山宗固
宮城の丶道も長持や萩の花　椋梨一雪
宮城野や鹿の毛なからうつし物　小山田似春
宮城野や見やけと申萩の花　延齋佳種
宮城のや伍子胥がまくる萩の風　鈴木破扇
宮城野もすねはぎ思ふかち路哉　催笑
宮城野は句の本あらの小萩哉　杉野一直
宮城の丶錦や出所うた袋　中村了春
宮城の丶本あらの萩や尻からけ　池西魚木
宮城野や萩の花すり旅硯　言水
宮城の丶花ぬす人や笈さがし　幽山
宮城野や冬は紙子を唐錦

名取川埋木

宮城郡ト名取郡境川也。西ヨリ東ニ流。

埋木やむかしの花の香の灰　維舟
埋木や花は功なり名取川　石井如自
埋木も楊枝に名とれ川柳　西村良庵
埋木や本の生木の花の波　神野忠知

埋木や言葉の花の探題　松永惟中
から鮭や埋木そむる夕時雨　板花恕流
名取川螢やいけん埋れ灰　正木螢茗風
埋木の花にぞ沈む酒に柚ず　幽山

實方塚之源

名取郡笠嶋之内志保手村ト云ニアリ。
長德四年霜月死去也。

詞書略之

幽靈か薄ほの見えし塚の陰　門村兼豐
以下同
實方のなきみを種や花薄　松村吟松
實方のつかねてつとに薄かな　土岐祐木
跡したふ古人や歌のしの薄　藤村倫員
執心の雀かくれの薄かな　段野如閑
實方の塚や施餓鬼のはた薄　西村良庵
實方やつるに歸洛は花薄　沙彌光正
中將の名を穗にあぐる薄哉　福井重種
歌人の假名さへ奥のお花哉　安田柳話
實方の冠や見するしの薄　留月千之

實方や餓さし恨んむら薄　西泰清
のほるや我レ薄の鏈持朱雀門　幽山

阿彌葉松

栗原郡筑館澤邊ト云ホトリ。

都人なにがし氏、みちのくの歌枕にかゝりて、所〳〵の草木のえだ。
朽木の橋きれまで、ぬさ袋にひろひもてかへりて、詩哥・連俳の人〳〵をすゝめらるゝ中に、さし出かしらの巡の拳めきて、老法師がやせ腕まけじだましゐにや。末の松山・あれはの松のおもはん事だに、ましてつみさり所なく

撫引やあねはのもたる姫こ松　西山梅翁

詞書略之

妹かあねはの松の若みどり　高井立志
くり綿やあねはの松の雪の景　内海政倫
怀の色あねはの松やふぐりなし　望月千之
上れ松古歌を切手にあねはの月　幽山

末松山

宮城郡仙臺ヨリ四里計南東海邊、八幡ト云在所ニアリ。

夏中はさゝら波こせ末の松　維舟
月見るや額のなみの末の松　石井如自
雪ふるし世丶の作意の末の松　段野如閑
影もこす大さかづきや末の松　小田素質
末の松もとの雫は松露哉　粉川次末
雪ぞ花手はとゞく共末の松　板花恕流
末の松藻の下草や花瓶の浪　幽山

武隈松

名取郡岩沼ト云所武隈寺ト云アリ。

武隈の松も二木や二度の春　風虎
武隈の松の余情や郭公　松村吟維
武隈や三寸を先せん松の雪　江口塵言
武隈にかのきのくまや松の雪
塙にたてる松、とよみしを思ひ出て
松陰やはな緒にたてる下駄の雪　幽山

緒絶橋

岩城郡野田玉川嶋の藥師ノ邊ニアリ。又云、志多郡古河ト云所ノ町ノ中ニアル橋ヲ云トゾ。

欠見るや琴の緒絶の橋の月　西武

右の發句は、高野氏幽山、物の用ありて東に下られしが、みちのくあたりにたづぬる所ありとておもむき、道すがらの古跡名所を見めぐり、所〳〵の歌の種となりし木草の名取川の埋木・緒絶の橋の欠など、花洛の土産にと袖にこき入もて來て見せ給ふを見れば、誠に殊勝とも中〳〵いふにたらず。長旅路をかくある心のやさしさを、おもひのみあづまにしめて引琴の緒絶の橋の道やまどはん、と康光の詠したおもひ出し、老のたはぶれに一句つゞり侍る物ならし。

寛文十居諸

奥淨るり緒絶の橋や古扇　岸本調和

世になるやをだえの橋の霜崩　松永貞徳

捨子鳴やへその緒絶の橋の霜　三輪一鐵

ふみこかす下駄や緒絶の橋の霜　石井如自

玉あられ緒絶の橋やふり所　風虎

緒絶の橋蝙蝠消て霜ぞ鳴　西岡泰德

風袋緒絶のはしや夕涼み　幽山

十荷菅

宮城郡仙臺、塩竈トノ間岩切ト云邊ナリ。

詞書略之

短夜も長ねや十荷のすが莚　松山玖也

同

鷹さへや薦槌こえを十荷の菅　林宗甫

菅ごもや月に我三荷客七荷　盧催笑

かゞみねるや十荷の菅こも三冬中　西村良庵

君や君十荷の菅笠寒の紅　福田露言

君や思ふ十荷の菅ごも稲の番　池西言水

ゐぞ鮭や十荷の菅ごも七こほり　松木青雲

夢遠し七荷には蚤菅莚　幽山

名所の草木を見て和哥并言葉

いにしへ今のすき人のしわざを見るに、よづかすあはれなる事かな。ながらの橋のけづりくず・井堤の蛙を愛して、みづからたのしみたるは、名高き物なればなり。歌枕をあつめ、名所の方角をしるして、人にしらせたるは名高き所なれば也。今此二をかねたる人は幽山也。七とせ八とせばかりさきより、民のとゞまる所〳〵を尋そめて、心つくしなる方にもあかずして、ことし又たび衣たつか弓ひくあたりを、夏より炑までめぐりて、名高き所を記すのみならず。名高き物どもをとりもてきたれり。たけくまの松・末のまつ山の小枝は、千とせもちりうせぬかたみなり。名取川の埋木・緒絶の橋の朽木は、名と共にうづもれぬかた見也。とふのすゆ・みやぎの〻萩は、あつき日に小笠をきそめていでしたび衣に、露を炑風のこぼしたるかた見なり。しかのみならず、くさ〴〵の物どものあるを見て思ふに、哥の道のみいにしへにかはらぬなどいふ事は、かゝるすき人のあるをいふにやあらん。されば、ながらのはしはなのみなれど、をたえのはしの朽木はとゞまれるかな。

たび衣たもとゆたかにつゝむらし
みやこのつとの草木あまたに

寛文九年十月十五日
於武江旅宿書之

攝津國山田隱士
磐齋

名所の草木を見てよめる狂吟の長哥

たびごろも　思ひたちぬる
こがたなの　めい所〳〵を
うちめぐり　みがき砂ごの
かず〳〵を　かきあつめしは
といしより　しがたき事の
しわざなり　きて見ぬ人も
しのべとや　十荷の菅笠
をたえの橋　絶ず世にたつ
なとり川　せゞの埋木
とりつみて　舟さす竿の
たけくまの　松のくま〴〵
たづねつゝ　旅のかりやに
さねかたの　つかの薄の

ほねおりて　ありく心は
いかでかは　あさかの沼の
田となりて　かつみる物は
いねをかり　いたゞきつるゝ
いもとごや　あねはの松を
手おりつゝ　かへれる烽は
末のまつ　山の松のはに
心ざし　つゝめるみやけ
みやぎのゝ　萩をばたれも
見さぶらひ　腰にさしたる
もろこしの　國にもあらじ
めいよぞと　つかのみじかき
筆をそめ　我思ふ事
長うたによむ

反哥

飛がごく行て草木を鳥が鳴
あづまの名所見たるしるしに

寛文九年初冬初五日於武江旅宿書之

非直非俗非修非學非遁　道人磬齋

追加

猫の戀引綱よはし緒絶の橋　丁我

米船や末の松山五月雨　何云
雛形やすその松山花の浪　信水
笠はいかに宮城のゝ露日でり雨　何云
家づとや宮城のゝ露旅印籠　捻少
宮城野や萩原殿の錦べり　調和
宮城野やあめにまされり鮭のうお　望月千之
宮城野や餅のあづきの花咲けり　吉田幸順
宮城野や鍋ふき結ぶよねの露　成田交扇
寒塩や十荷の菅ごも浪の鳥　丁我
匂ひや猶好色の埋木名取の花　炁水
きたい坊花や埋木名取川　中嶋丁夢
世ゝの人目やにや霞む末の松　小野澤幽風
道祖神野中の薄よたてながら　松木青雲
來る春やあねはの松を京土産　中井宗隆

こゝに高野氏幽山とて、もとは都の住人、誹諧の六法八方に修行して、名所舊跡にあそび、數奇人を友としてとゞまる所をしらず。しかれども至善の地をしればにや。

ちかきとし比、江府になりわたる。此ころ名所哥仙獨吟をもよほしあつめんとす。都鄙老若をえらばず、これが爲にしたがふ。七十にあまりて若殿ばらにあらそふ事、道の德とやいはん失とやいはん。ともあれ、かく計御免あれと、望にまかせて墨にそむる物ならし。

梅花翁

哥仙俳諧　寄名所

むさし野やつよう出てきた花見酒
かすみの關もなんだ辨慶
旅衣不盡の雪じるをしもんで
紙子羽織の袖のうち風
月影もさしでの磯の鶴右衞門
髮にあはぢの嶋臺の露
祝言はすみ吉屋殿秋更て
あをきがはらの姫は十六
ちはやぶる伊勢や日向の戀の道
山川万里三輪の明神
ならざらし糸くり返し行程に
むかし咄しに井堤の下帶
二番勝まつかうさゞ波しがの介
比良のねおろすかた馬の露
ぬけ參打出の濱の月見れば
迷故三界笠ぬひの里
子を思ふ難波の梅に鶯の
さて高砂を松ばやしとて
陽春の德を備ふる伊丹樽
君〳〵たれば店は江戸店
深川に大黑丸もお戎も
探幽が筆淀の澤水
七十歳いで其比はおとこ山
あふぎのやつとなれる金鍔
衆道にも大岑前鬼がたうふ〳〵
昨夜の付さし白川夜船
けんかいが興則心におもはるゝ
なんの其〳〵ゆり若の浦
舞〳〵は高舘に早く暮の月

さるあいだ又みやぎの丶萩
嵯峨の奥聲きく時はしかれども
愛宕ぞ秋のかなしうもなし
我菴は布留の山田の米がふる
手の裏とり〳〵初瀬の觀音
鎌倉や方引さかり花盛
大坂あめも世にいづる春

仝

つんぼうが寢覺ぞ時雨床の山　露沾
霜をいて馬鹿心見の崎　恕流
讓金響の灘の安からで　幽山
糸は中間の生の松原　沾流
月匂ふあらきの亂滴の森　山
遊びの岡の暖簾の露　沾
よんでこい蜻蛉の小野隙の霧　流
わるい名取の後家が文箱　山
忍び孕み此月斗最上川　沾

敵のかたへ音なしの瀧　沾流
公事一ッ御内證より入佐山　山
末寺の鐘の朝倉の里　沾
刈萱に前髪宰人名乘すて　流
しぶむけた曾我戀草の菊　山
みね打や中に炁ある鈔澤　沾
月も船井にくもらせ給ふ　流
針のみず花の火ともす姥が嵩　山
團子に殘るうつの谷の雪　沾
名寒かへる四方の風早送ッ神　流
嫁の始の淡路嶋見ゆ　山
枕繪も須磨明石より書出す　沾
くるわの大臣かねかけの松　流
老の山父の入道留主なれば　山
お持佛堂の戸がくしの暮　沾
思ひ詰哀その森自害の事　流
侍乞食末なしの川　山
出し月道の果なる常陸坊

哥祭文を呼坂の縣　沾
あひのもの合の中山色替て　流
手を付たがる下紐の關　山
にくらしい爰に女の目無川　沾
つれ〳〵讀かけ日ぐらしの小野　流
花に蝶伏屋に寢入やすいとて　山
油斷な乳もち添山の春　沾
着かへ櫃霞をさがす杏の谷　流
狂言の役布引の奥　山

寢覺の里より誂の夢　心
はだか參齋宮に忍びしは　山
香取の衣を逊質の音　奴
風あらみ錠ねぢ切て箱根山　心
沖の小嶋にうつほ舟よる　山
王代記年浪たゝむ袖のうら　奴
さか鉾の露篠間流れて　心
云たての月よみ日よみ影つるゝ　山
人形うそを形野の色　奴
羽買山鳥もいれしの花畠　心
佐保の内なるお手かけの姫　山
名作り虛勞霞にもらすいさや川　奴
不忠の濁りにほの海迄　心
唐崎や松獨りさめ波たゝく　山
箸箱守る三輪の神杉　奴
初瀬風惡魔の鼠はけしくて　心
龍田に夜盗僧に法あり　山
彦太郎高安の里うらみしは　奴

仝

玉煤やてにはを拂ふ志賀の里　云
書棚にさゆる鑑山の月　奴
藥袋いきの松原風晴て　可心
袖の湊や塩湯みつらん　幽山
鶴のすね草臥渡る若のうら
暮れば龜の頸卷の雲
檜物屋も枕を飾る妹山に

こしやくな戀草炙しの丶わけ　心
轡出外山のすそを蹴まはして　山
當世鏡水莖の岡　奴
桂瀉月を懐の使者男　心
他の呼子を養の露　山
金掛の松にうなりし炙のかぜ　奴
青野が原の虫にかぶられ　心
逆水の跡なき一座氣ずい者　山
玉出は親の目に近き岸　奴
眞西より衆生におほふ難波の花　山
春は住吉三吟の風　心

仝　曲言

まめふむや足うら山の花盛　言
日置の里の野邊の黑燒　一鐵
雉子の骨鳴海の塩路こぼれ來て　幽山
御前の沖にた丶む鼻紙　言
出る月刀脇指あふぎが谷　鐵
禮日は暮て筆捨の松　山
大草臥眠の森と見えにけり　言
伏見の床におもる病人　鐵
泥町や酒にひたりし袖の浪　山
濃茶ゆかしき宇治の橋ひめ　言
身共等は田夫にそだつ賤原や　鐵
はや日の岑をおがむ王樣　山
橋の小戸の塩水ぬれゆかた　言
角からすみの江掃除する也　鐵
一足の音や夢の丶鹿の暮　山
お料理過の湯の原の月　言
さあ燭臺くらはし山の初紅葉　鐵
と網のわたり鬼の寢所　山
虎の皮下紐の關打とけて　鐵
唐人若衆あひそめの川　言
伽羅の油黑髪山にした丶るは　山
室の八嶋の風呂上りの暮　鐵
水菓子を客人の宮詠やり　言

間鍋もてこい加賀に菊あり　山
小坊主が笹原走るすその露　鐵
秋よ頓寫の水莖の岡　言
惣じて月半の空の琵琶のうみ　山
遊山觀樂江戸浦の月　鐵
兩足を安房と上總へふみのべて　言
賴朝のあくび千葉にきこゆる　山
お氣のつき八幡をさして代參　鐵
水無瀨の里の中將菜盤　言
小力を見するかたの丶若木の花　山
飯盛山を大食の春　鉄
針立を呼續の濱東風ふれて　言
三川にわたる法橋の波　山

仝　西岸寺任口

武藏野はいかなるねだん郭公
鎌倉物のみじか夜の月
むか〳〵と雲の浮嶋がはらたて丶
針よりは唯富士のけぶりを
三輪の杉身すぎ世過に籠の棒
本はなら酒屋此躰はさて
秋篠や外山の紅葉つらにさへ
すがたの池も見まいすさまじ
闇にあみ月には陀佛里のあま
朝ま晝まはひらくはち〳〵
律の名は高野の別所別の事
しらべはあふの松ばらりちん
つれ平家目こそくらぶの奥座敷
袖の雫の森はたゞもり
こは何としがらき茶碗破た中
いとまはかたい壺のいしぶみ
花にまかりたい共いはで忍山
あた丶かな事にいつ會づ御器
春きても安倍川紙子一てうら
賤機山もへさるいとゆふ
足柄や竹の下道すぐ通り

いそけばまはる木曾〳〵の旅
近江笠ぬぎ捨尻を勢多からけ
頸たけなりとわたれ玉川
ほれてほろり色なる泪袖のうら
戀の山路にたふれて血みどろ
あだしの〻御供申さん旦那さま
宇多の烏立は見すえた鷹場
よき所得たり淀鯉よき肴
美豆の芋をば月見には猶
何やかや活計すでに烽の山
烏羽田のいねといはずといのふ
こはし木幡馬〳〵に誰のらふぞよ
しらぬか宇治に御座をかまへた
風ものけ岡のや殿の花の船
日野大納言臨時客人

仝　高瀧益翁

三吉野や天からふつた花の雪
富士の霞になく鴫の糞
あほうづら淺間の山に春見えて
遠近人も耻さらしなり
員公事に心づくしの烽の月
御江戸をまかりたつ空の霧
武藏の〻露さへ霜に替番
狂言芝居誰しのぶ草
津の國の難波につけて衆道事
鳥羽にあひ見ん狀の取やり
其以後は千代の古道遠ざかり
嵯峨野のはらの持病おこらぬ
又してはつかみつかれし鷲の山
か〻がりんきに小比叡大比え
祈るてふ三輪の神杉釘うたう
有馬のしるし筆の軸竹
炙のてん月もかたぶく武庫のうら
子共わるさを住吉の烽
いさかひに雲霧さはぐ淡路しま

棒になりたる藤代の松
三熊の〻熊をつかふて見せうぞやい
障泥の風に伊勢の浦浪
りん〳〵と轡の音に鈴鹿山
鬼神は虛空に相坂の關
東路の白川越て後妻打
手かけ狂ひを塩竈の浦
御法度も只こり須磨の月凉し
明石の入道買置をして
印南の〻いなとはいはじ普代者
くめのさら山さら〳〵如在は
殘なく傳受をしたるわかのうら
妙藥合す玉津嶋姫
辛螺からや奈良の都に有つらん
春日の里の機のおもりに
大將も初瀨の花に出られて
天下一枚牧ふるや春雨

仝　旨如

富士山も中にぶらりや横霞
田子の浦波ぬるむ分別
春雨の古江の庄屋追上て
小野の絲もはやく立ませ
長坂の月人男供まはり
箱根八里や下るしら露
足柄の山のお中の虫なきて
夕めし時分過る六浦は
やり句にて揚てこそ見め二見がた
めでたいまでの高砂の松
淡路嶋雫もたへはいたさねど
若衆の義なら朝の〻朝の間
よしや名の天滿の市とた〻ばたて
戀の重荷や紀國みかん
通路の月をのせぬる根來盆
丸うひいたる淀の川ぎり
宇治橋の水の〻宇をなす花の波

伊勢まいりしてかへる雁がね
名乗懸に伊駒の山や霞むらん　丸
番袋の口炑篠の里　同
初瀬川火もとはよその夕暮に　水
難波のあしがふるひましたよ　同
入心とがめやはする有馬の湯　同
見舞の文をこしの白山　水
雪の事いはで忍ぶの戀衣　同
あねはの松は大夫天神　丸
丹波筋はやり哥さへひなびたり　同
夜なべするとて油の小路　水
備前徳利口なら一つ三かの月　同
男のはだが牛窓の炑　丸
虫の音もうむと云程はりまなけ　同
それやと斗の目あかしの岡　同
与力衆大井の里にうつられて　同
加勢手桶に賀茂川の水　丸
呼だ〳〵其戀の山花盛　同

千話に明ゆく朝熊の春　池西言水

仝

伏見の暮霧の初瀬や高灯籠　才丸
里は踊子袖ふりの峯　仝
干る茶碗水分山の月もりて　水
砂糖くづる〻神なびの岸　仝
唐士のゐんこ轉るみよし野に　丸
飛火がくれの草の白雉子　水
箒店伏屋の里に春分て　仝
ふくべに霞む小野の枝炭　丸
咄し講客人の宮空更る　同
灯挑(ヒヤウ)ともせ平藏がうら　同
はたしあひいきぢにさはぐ兒の淵　水
返事だにせぬ筆捨の松　同
空聾(ソラツンボ)口なし山に恨ては　丸
五器打たゝく飯もりの岑　同
大工小屋塵の莚田敷かけて　水

壁すきかへす繩のうち波　同
花まじり二見の月の蜆から　丸
胡粉(ゴフン)殘りし雪の白濱　同
名額板の朽木の杣に春を經て　水
光悅砥取の山ながら雲　同
捨扶持の米の尾亂祝てき　丸
消る血祭玉なしの里　同
もぎはなす蛭(ヒル)子の社波遠く　水
あら和布(メ)の莖の淺澤の水　同
求づか雜小刀に見わたせば　丸
いかの甲飛鷺坂の空　同
ひぜん瘡かせ山近き床の月　水
遊びの岡の假契(ケチ)部やの露　同
さほの川秤(ヘヅリ)に重る思ひ草　丸
附子人參を走湯の風　同
虫干の小袋坂を越來れば　水
扇が谷よ此時の汗　同
御前能數の嵩のしらべ初　丸
誕生ありし淡路の浦こそ　同
鵜の羽屋根鳥養の花うるほして　水
風土記をとづる青柳の村　丸

仝

江戸衆に傳受なるべしかんこ鳥　幽山
しげるや鈴の森の下窓　幸順
でんがくの烟につゞく富士見えて　泰清
でつち樽さけ横走り行　山
出し月わにの御崎へ舟やらふ　順
馱ちん拂ひの高嶋の炑　清
飢饉(キン)年米澤さびし初嵐　山
きらずまじりのかすかへの里　順
栗原や姉様したふ小びくにが　清
根本最(モ)上(ガミ)寒の紅皿　山
鏡立入日を殘す戀の山　順
つほね格子のおもはくのはし　清
撥(バチ)音にぬれて袖行さほの川　山

大太和の大掾藤原の烋　順
かけねなしつけの櫛田のけさの月　清
松坂ふかしあみ笠の露　山
す浪人花にぞ沈む泪川　順
名筆耕久し石山の春　清
消る雪髪に數ならぬ紫野　清
おくる引導戀塚の暮　順
嶋原や樂しみつきて菩提あり　山
かよひし夢や闘のお地藏　清
契りなん草津の姥も本ならば　順
さぐる火桶の日野ぞ淋しき　山
朝朗床の山風たゝみあげ　清
さらば手水にいでの玉川　順
ぬぎ捨る笠置の奥に參ルとて　山
しのだの森の夢の楠木　清
だきしめて朽や果なん泉の杣　順
泪の夕飛彈嶋の月　山
位山跡のかぶろが袖の烋　清

文まき川にたれさまの露　順
出來合のまゝの繼橋つけわたる　山
木魚おどつて大和田の花　清
それいかに禪を開梅が畑　順
小野の小町の一原の春　山

仝　幽山

山の烋世は皆醉へり富士獨り　泰清
菊の寵愛唐士が原　清
曾我の里風にも當ぬ露暮て　幸順
灸數そふひの川の月　山
立ならぶ其片岡に籠の者　清
老曾の森の足もとをみる　順
暮わたる野寺の鐘に亂拍子　山
かた田のうらや鰐の大口　清
長持の車返しの虫干に　順
三嶋暦も見え過る風　山
物さしの竹の下道程近し　清

淀の末ゆく水油うり　順
あだ浪や江口神崎夜見せあり　山
法師もぬれの難波女の月　清
馴し露佛祖をかけていもせ山　順
雁もようきけ筆捨の松　山
鎌倉やひらくる花に相場物　清
桁の玉ちる雪の下水　順
名橋杭や三川に渡す朝霞　同
二むら越て山出しの杣　清
土座枕風のふきしく莚田に　山
蚤蚊に夢のさめが井の里　順
一夏とて發心門に入にけり　清
しきみが原をめさぬか〳〵　山
嵐山行衞の頭巾ひらさらに　順
はやり野郎の客人の宮　清
白髭の名主に忍ぶ地をかりて　山
寺井の水に腰かけのちや屋　順
かち荷持ゆきゝの岡に暮の月　清

龍田の錦盗人の沙汰　山
上州絹すゝきの糸をたてぬきに　清
妙義まいりの袖に鈴虫　順
野火留や別火のかけの暮ふかし　山
疱瘡かるく犬飼の御湯　清
箱肴花を折そへ一重山　順
伊駒をおりて轉りの鳥　山

仝　幽山

武藏是にありや夏のゝ葉も四尺　松陰
常陸の螢逃尻の影　千春
立風呂に桶川の里雲こりて　山
髪の剃屑前橋の床　陰
結城紬ゑりより落る暮の月　春
糸鹿の烋や針留もせず　山
馬の四足水冷じき黒血川　陰
栂尾の上人身ぶるひしてたつ　春
春日山木の葉一つも盗まねば

玉子の覺鳥栖のかげ　山
鍋嶋に引殘したる塩蕨　陰
爰も唐津に兄弟有けり　春
腕の疵あひ初川に末かけて　山
だいて枕に天草の露　陰
持馴ぬ金の峯に月更る　春
痃癖いたくかた岡の虫　山
花の雨三笠に是がふらうやら　陰
名　逗留は外藤川の色　春
朝霞不破の關やの似せ手がた　陰
遊女の果の妻とりの里　山
わけ立るいきの松原それ過て　春
いづれもろく床の山風　陰
始けりつれ〳〵成まゝ日ぐらし野　山
ばくちの道の親しらずめが　春
古着買衣川迄尋けり　陰
南部のしけり杣入の聲　山
時至り相馬の都取立て　春

矢はぎの宿は武家でかたむる　陰
三川記やつきせぬ落葉松の月　山
十市の雫銀の土器　春
名　炙箸浪もてよする佐渡がしま　陰
わらべの浦の砂ころびのみ　山
目の中や志加須賀の風痛ムらん　春
江口にこたへどなたで御ざる　陰
象山の白雲隱れ姿の花　山
だて染の帶まきもくの春　春

仝

水無月やいつか來にけん裸嶋　幽山
團扇うすべり床の山陰　素堂
うつり行鏡の里に髭そりて　仝
ゆるぎの森に風けゆづれば　山
大上戸有明の雪に鴻の池　仝
鬼は丹波に冬籠る空　堂
鉄の窓やうごかぬ千とせ山　仝

代は塩梢の音なしの川　山
からくりにさゝやきの橋取はなし　堂
扇の芝を小便にゆく　山
遠慮なくさらしの裾をかいあげて　堂
寢覺の里や聲蚊屋に入　山
紙燭召て手枕の小野御覽ぜよ　堂
かくれの山にはき物の露　山
夕月夜馬よりおりて雲づ川　堂
梢の色の首おちの瀧　山
薩摩の守花は嵐の音にきく　堂
つけのゝ雪間分るとき櫛　山
名　難波女が手織引はへ糸あそぶ　山
もりロ積にくゆるせんじちや　堂
戀わたる籠の渡りよ休ましやれ　山
まだ日高川ふかき思ひを　堂
燒食や誰岩代にむすびけん　山
反古につゝむ山本の雲　堂
伊吹瓢作り蛇腹の顯れて　山

えいとう〳〵不破の木戸番　堂
すかぬやつ人見の松をそれと見よ　山
狐が崎も都ならねば　堂
出頭せし鎌倉山も月細し　山
又上もなき松平の炁　堂
草〳〵の花園つゞく藥苑に　山
志賀のから橋唐鳥の聲　仝
ひえ法師何ぞととへば何ぞとこたふ　堂
是非におよばぬ白川の院　仝
花の本持に定むべしわかの松　山
那智石みだす碁笥の春風　堂

大矢數（おほやかず）

五卷

西鶴

（序）

あけらほんと雁首をのべて思ふに、皷破れ鷄時刻を移す。此時諸藝盛にして遊興巷に溢る。俳諧猶其一也。此道輕して輕からず。莊子偶言・淳于髡滑稽戲言に似て戲言に非ず。玆に難波のあしもとより鶴立て、守武の末の世に把り、道をふみそめて心を勵すに、初は驚て褒、中比は妬笑ふ。益心のたねをきばり出し、すほんの功をへ、水に瓢簞の輕口、たれかながれをくまざらむ。比は延寶八庚申のとし、生玉に大幕うたせ、一日四千句の矢數俳諧を吟ず。當地宗匠、親疎ともにつらなり、內五人の差合見、八人の筆とり、其外名を得るも得ぬも稻麻のごくこぞり、竹葦のごくまどゐて耳を傾け、千句の矢先、雨丸雪とふりかゝつて、執筆は忽つかれにけり。其身は少とも倦となく、百發百中、理義精密にして尤妙也。此集のなれる時、序つくらん事をこふ。水魚のよしみなきにしも非ず、辭するにいとまなくて聊うなづく。

兀々子鬼翁誤序

大矢數役人

指合見五人　和氣　遠舟　同
同　淺沼　宗貞　同
同　前川　由平　同
脇座十二人　高瀨　益翁　同
同　木原　宗圓　同
同　秋田　桂葉　同
同　青木　友雪　同
同　山口　清勝　同
同　岩橋　豐流　同
執筆八人　水田櫻山子　同
同　田中　定方　同
同　天引　親延　同
同　金谷　宗及　同
執筆番繰　松風軒西尾　同
白幣初千句　松井　西花　紅幣二千句
銀幣三千句　岩井　武仙　金幣四千句
懷紙番繰　衣笠　一鶴　同
目付木　山田　西長　同
線香見　池山　西戎　同
割帳付　齋藤　幸船　同
懷紙臺　岡山　一風　同
懷紙掛役　粟野　友知　同
御影支配　鶴川　生重　同

片岡　旨恕
小西　來山

岡西　惟中
益田　不琢
田中　柳翠
高木　松意
水野　梅吟
齋藤　賀子
柳葉軒鶴流
西村　元重
原　松林
辻尾　意閑
岡本　西住
木村　西流
山洞軒一水
吉田　風鶴
岩田　西里
松井　悅重
下山　和風
原　如雲
吉田　西可
小松　元知

代参　井田　西用　同　野口　西言
同　上柳　西信　同　山本　祐竹
醫師　横地　祐菴　同　高石　石鼾
後座　釋　西波　同　釋　祖寛
同　榎並　貞因　同
同　關士　西雁

（卷之一）

大矢數　第一

何泰平

天下矢數二度の大願四千句也

百六十まい五月雨の空　蘭渡　西鶴

郭公八わりましの名を上て　梶山　保友

さはる所かきく醫者の山　西梅山　翁

酒の瀧絶ずとふたる座敷もち　松寳軒　大鶴

谷　水因

岩が根まくら寢る事がない　在原　萍々子

朝はうつゝ晝は紅葉に夜るは月　安川　孤松

京にもあるまい目の前の秋　松寳軒　鶴爪

染出しの替る所をうつ衣　執筆

伊達このまるゝ三吉野の奥

別れ路のかねの御嵩を持れたり

蛭のぢごくや浮雲の下

これ海の荒和布の蕪が生をかえ

見せ物となる松陰のみち

商はまた無功者な初時雨

江戸へゆくとて涙あしがら

不慮に一夜乙女の姿抱てしめ

雪の通ひ路躍は忍び路

雨乞の空定めなきけさの月

三島の宮やあらたなる鹿

花によしありきによしと山越て

春の價や中間奉公

揃ふては手ふり鶯飛て行

かぶりしほの目あは雪の山

からくりや下に通ふて瀧の糸

七日のほりし都でおどろく

說法は今はんじやうの百萬遍

誓は瘧落て行かぜ

痩こけた御内所や公達は

永の留守中とふ物は猫

眞葛葉の恨とつらさ重なるか

せめて待夜は御座れ月さま

せく迚も凡知れたる轡虫

古歌に讀しは關守の山

附あひに波爰もとは面白い

行平松は膏藥のたね

投首で別れてのほり給ひしが

とつくりころり付さしの跡

滋樂（シガラキ）の山姥舞ふて其次に

十三間は瀨田の長はし

漣濤もよせ來る方の水縄あり

うけ戸樋響く五月雨の空

ま一聲爰で聞たし噂でも

地はくぼむとも思ひ定めて

さいせんは行司貫と走より

下ないてすむ町中の秋

二つほし其鬪（イサカヒ）か出されうか

鍋釜割てのこるもち月

大地震ちつとも噪がぬ花の山

覺悟の惡い雉子なくなり

切腹はたてからひいて横霞

仕與の續き埒のあく山

はしらよせ關の岩角踏ならし

十六段をいまやひくらん

是も又浮世を渡る木綿買

ふんどししめて懸る夕ぐれ

今宵なほ思ふ所は部屋の内

四年このかた積る祝言

十露盤に泪の玉が置れうか

無念や繼はうせ物にたつ
見付たる影も貌もなかりけり
出家の曰ほらぬ井の水
心の月喉の渇きし夢をしる
目まいといつぱ荻の高聲
針たても所によりて替る秋
まだ献立にのせぬ蒲鉾
御成門建て夕を急がるゝ
酒天童子はながき君が代
大江山五十丁一里分初て
七文のまし杏懸峠
松に降る雪は豆腐のごく也
つる持鍋や冬籠る宿
潰しめと人に言はれて娛しめる
臂は根ぶとの色になる草
月影も茶臼の如く廻り行
笑ひの内の枕繪の露
花の色之信是を戯れて

柳の髪の止解なきこそ
慈悲の春此時ときく籠拂
原田の次郎老のうぐひす
はじまりを待るゝ物は操ぞ
作麼まくら蚊屋いかなる細工
水學も心の底の浪に夢
夫五十年目塞いで居る
分別も又は出さうな所也
是一番は屁にしてうて
やれかため釘ぬき松皮木村紺
片肌ぬいで大工の棟梁
躅合や源平五屋根はやね
宇佐八幡は神さびて今
月の劔硎ゝ是を憐て
悲しき秋や取賣が夢
鳴き渡る雁に子共が過て扨
百目くらいの稲葉亂るゝ
石火矢の玉にもぬける露の玉

異國の舟も大浪の浦
住吉の神の力を覺たか
片手であげる隅に雀が
初花は千句千聲吟聲あり
膝たて直す藤のたそがれ

大矢數　第二

手何

姿の花又ふき出せ大句數　水守重直
柳氣力のある時一日　西鶴
國役の蛇籠に春の水とめて　井口如貞
あたま讀ぬる村雲の空　西立
燒物に腥き夕の月　西有
草葉分ゆく虫にさはつた　西眼
それが腹の立事ならば亂萩　西由
露霜二つ置てうちやるか　西玉
暮て秋この大筒を引かまえ　執筆
をとこと合點で女郎花さく
心中をたてりと思へば笑しい迄
夜前も門で聞てゐました
西へ行顏こそ知らね郭公
雲晴ねども卽身成佛
やれ急げ一味の雨が降さうな
近付あらば借うかさ寺
内の者よび次の濱遠詠め
先手をうつてよする漣濤
新九郎まだ其比は若盛り
月の都をひとたびは江戸
露霜にかねといふ物抓取
お齒黑壺に秋の水行
糸による戀をひかるゝ木綿島
思ひの淵の天滿川崎
裾は雫袖は涙の守口に
世渡る業の駕籠はひま也
小芝居の狂言綺語を振捨て
巾着きりはむらさき服紗

御せんさく所縁(ユカリ)尋て野の末も
　聲かくれなき鈴虫はむし
大分限不破の中山月澄て
　野上の里に手懸なと露
秋とはかぜ筐の扇御もつとも
　自身に讀し札の行末
補陀(フダ)らしく三十三番法の舟
　浪の綾ぎぬ引出しの内
本丁は手代任せの友千鳥
　妹がりゆけば闇(クラ)者僉義
傾城屋岩戸の前にて是を歎(ナゲク)
　今度退治の鬼も十八
契るとて四ッ手に與しも夢なれや
　難波あたりの持網のあと
雜魚汁をするかと見えて煙立つ
　里の夕のまつり客人
二親のもとを尋る二はしら
　提真若盆孝行の秋

けさの月富貴のさじき取れたり
　扇を置て彦七が顏
咲く花によき思ひより有そうな
　水性木しやう櫻散る山
算置が春の心はいか計
　雲靜なるさぬきの金毘羅
順風や浦ゆく舟に楫をたえ
　商ひ冥加浪の夜る晝
お惠美須の月にも烏帽子被(カツク)れたり
　罷出たる秋のはな候
亂杭を打てば忽露ちりて
　さては天皷が先陣の跡
夫手たて運氣を雲に知れたり
　米は買置進退は蛻(カラ)
何事も尻へぬけたる卵酒
　帶がゆるいは世界の貌
門立のもろこし樣に續く者は
　初瀨の寺のかね持てこい

名木の椙にすみ縄打たれたり
　隱居せうならかゝる夕暮
淋しさも薄鍋一つたのしみて
　むかし遣ひし錢ようてゐる
穴一に妹が垣根はあれにけり
　棒になひなとふり袖の時
挑灯にはや釣鐘の夜が更る
　なかすかとくか謎の事わけ
うき藏主笑のたねの御次の間
　長の旅中一葉の舟
尊靈はいづれも知ぬ貌ばかり
　嗚呼こゝろよい極樂の月
酒飲て腰をうたせて花盛
　詠は箕面の瀧ぬるみ行
二の富の宿はさながら夕煙
　油を賣ればこぼれ祐(サイハイ)
遠里小野の里も次第に建廣(ヒロウ)
　細江のきしも唱へうしなふ

請取てまた會釼ぬ浪の聲
　舟もつかぬに膳の出しやう
御霜月門跡樣も驚かれ
　是は無常の風の音にぞ
慈悲にたつる茶引人形巡來て
　五月五日の中空の雲
あぶないにこれなる枝に寢て起よ
　連理のちぎりぬしのあるかゝ
噪ごなら月の都の御町衆
　思ひもなさけも秋はかねつく
家質も流れてはやき水冷て
　今なくむしの親の時には
因果經萬事はみな〳〵夢ぞかし
　枕わらして楠が胸
二年懸工みて舟を作られたり
　商賣替て酒の大家符
行て見ん手越の里の庭の花
　長者の娘脇明の春

大矢數　第三

何經

今我をれ目に見ぬ富樓那大矢數　岩井武仙

木の下闇は愚癡の檗特　西鶴

鳴ゆくは時鳥やら牛やらん　前川由平

打明るほど降て水橋　西竹

めし椀のあとは白浪かさなりて　西泉

物の上手か縊師屋の瀧　西良

はし縫のしるしと思へば月は丸　西雪

茶袋の口秋の夕暮　西能

詠れば釘に懸たる露時雨　執筆

又綴あてゝ衣うつおと

わる狂ひ唯山姥が業なれや

夫上臈に香車うらめし

明ぬれば暮るゝ事とは手管の文

物案してそれからそれまで

運は天に命は海に舟の上

寢所替て哀なる宿

敵持枕の夢もひつくると

勝過したるきのふ六番

載許場を慈悲の心に思ひやる

釋迦一代はどうでもすぐるに

あら働菜摘水くみ薪割

此年月に病ひ氣がない

人置の祖母が參つて申やう

實盛常〻捨て銀の沙汰

歌讀の惜家を潰されたり

膳棚其外たゝみ挑灯

神祭二十五日も明ぬれば

不慮の喧嘩に鹿のなく聲

證據には嶺より月の出にけり

をれがしつたかうせ物の露

幽靈や花の貌も風の跡

むかしがたりに彌右衛門が春

消にけり茶釜の名のみ雪の泡

古借錢の帳の行末

浮世哉二度果報ほり出し

黑子はあれどおくさまの代

氏なふて玉なと提る夕の床

芋筍遣ひか早い思はく

言ひ名付中將姫を七つより

竹馬にいざやたけの内越

張貫の山のけしきも爰がよい

はやり吸啜に松は煙りて

初時雨其日は懸る異國舟

三つの寶をぬすまれな風

詠やる醫者智者福者今日の月

千軒あれば友ずきの秋

置露や爰は山崎かね所

宗鑑法師が毛拔殘して

おり天鵝絨泊り客人下の下也

五三に逢ふて夢か現か

はりあいのありてなければ頓瓢疵

一つ咄しのあとの松かぜ
犀の角都へのぼり給ひしか
打疵直す白川の關
吽〻と十日計は歌枕
倭國の風俗生れ出る露
鶴龜はたゞしくみゐて神の月
燒香場より初あらしふく
また花の枝にあと取轉て
公儀專やり梅の陰
行春や難波の浦より御舟にめし
島〻山〻ふしかたる段
素湯一つ持て參つた水煙
此體ならば醫道に及ばぬ
始末して居喰に暮す山の奥
際ならさそう獅子の勢ひ
夫佛師臺座後光をひからして
安心爰に目のたまの床
榻燒の箱を明ては夢ごゝろ

野七里今七里山よりは濱
巡見衆曇らぬ月の空見えて
唯御傳馬は渡る雁金
それ朱印移ひやすき下枇
一斤袋玉笹の露
箱根山分ゆく末の部屋見廻
戀のかたまり二子の貌
木戸番は或夜しのびて通ひし
はれの軍やしね死のゝ中
其比は十六歳の花盛り
聖德太子小ざくらの陰
佛法を說ひろめたる春の風
愚意の我等も責ては俳諧

大矢數 第四

何請狀

葎茂る宿にぞ鬼と相住居　岩田尹許
草の枕に虵躰の鮨桶　西鶴

自突に俵藤太が夢覺て　小西木
すこし力は平の惟持　菊永
附合に言はれぬ古事を出されたり　友夕
道中互に脫尻の月　魚市
散柳乘はやらする三十石　佐重
抓取には雁金の聲　梅葉
八重の霧狗賓の嶺や晴ぬらん　執筆
門をかためよ懸かねの坂
兵は古大根の勢ぞかし
忽蕎きり五桶の沙汰
點取に負てのいたる暮寂し
又明後晩松かぜの音
內證の苦は色かゆる目安書
十露盤上手といはれし我も
廿日きり今は法度の御觸にて
誓文はらし曇なき月
ゆく秋の夜るの床にてどのかうの
かるいおもはく鹿などを呼

花に鐘なんとも存ぜぬ高師山
かけじや袖に懸りをれ藤
ゆく春やいそがし業の玉襷
餅突寺はいつも正月
佛法の晝寢をしたり又起て
この世とあの世と二つ見る夢
乾坤の箱を明ては何もなし
馬鹿つくされし親の跡取
八代や九代續けて其次は
抑是は幽靈の影
物語今は百とて止にけり
駕籠の行衞や錢を落した
もろこしに獨の女子細あり
いつも思ひの燃るをよろこぶ
くどけ月一度は落よ地獄耳
消ゆる物じやが露の夕暮
はい炭に又吹付て秋の風
かなとこならせ伏見板ばし

乘合の舟の出ぬ間に髪そらう
　殘る二人も俊寛同前
脇聲や今をはじめの事なれば
　てにはの悪い所はなをせ
倒らせて談合はしらを立られたり
　月日のめぐり閏の代の時
からくりに松田浮舟のつて出
　くゝり袴に薄なみよる
蹴上ては色をふくめる暮の月
　公家うつくしき露の白玉
花衣よごれまぶれてゐられても
　是爰にある紅のむめ
置た物忘れて春や立ぬらん
　重市の名を聞鶯の聲
逢坂の關を過れば茶屋狂ひ
　椙の葉白き顔が可笑しい
賓頭盧も本尊懸たと鳴鳥の
　後堂からはれて村雨
たまりけるなふ〳〵俄に蘆摻
　算用あいやかさなれる山
何貫目久米の岩橋懸て置
　風呂屋に雜木榎の葉井の水
白玉も龜も思へば人たらし
　なんの萬年いきる世中
月は水名譽不思議の藥鍋
　孔子の歎き夢の春の夜
あつち國飛そこなひの胡蝶あり
　阿蘭陀流の行方の風
膏藥の色に移ふ空の雲
　まだ塗たての佐夜の山陰
或時は用心をする矢の根鍛冶
　三人口に十五人まで
厄介の懸る所に松の風
　時雨ふる夜はこけて行末
僞のなき世なりせば吉利支丹
　一たび百姓もと土は土なり

大象が出て働はあらた也
　御經讀誦日〻に日に日〻
月花は今目前の二尊院
　茶杓は名物爐の名殘なり
さかやきも移ひやすき朝霞
　嘶しが替る旅の行末
今迄は馬と思ふか飛鳥川
　岡に契し戯女に飽
濡の文霜のふりはをかたどりて
　鳥もつとめの千鳥なくなり
看經の鳴の聲さへ哀さよ
　心なき身も近年の秋
古歌付が時行て今は出る月
　忽貌鈴鹿路の鬼
黑雲が群だち來つてすかぬ事
　をれにまかせて合羽とてこい
手割のたばこたのしむ夕詠
　小半入に一生は夢
此ごとく吹と思はぬ浮世かぜ
　心がすはつて大舟に乘る
御代官御代をおさめ給ふ事
　時節に一さし舞鶴が岡
立姿かさや三勝是じや〳〵
　花の盛は十七の春
厄神を祈初ぬるとら藥師
　挑たてまつる燈明の影

大矢數　第五

何茶饅

飛や螢宇治瀨田ならす大矢數　江島山水
　芝は扇の拍子に懸つて　牧野西鶴
玉の段舞の始まり去程に　西鬼
　雲の通ひ路はなつ鐵砲　浦風
ほけがたつ早晩ながらの雁の聲　直治
　盞をとつたる明ほの〻秋　松樂
月影や外井にうつる手水水　正利

つほの内には色づいた山　元吉
新酒や夕は是をたのしみて　執筆

夜見世通ひの首尾はともあれ
別路やすこしは惜む鐘の聲
我甥ながら跡職の公事
海にまた末の松山欲ふかい
一度に喰れぬ鹽竈の浦
十石の食を都にうつされたり
平家のさかり親類殘らず
落足も草鞋きやはん講參り
つゞく痩馬鈴鹿路の秋
水入の月は八十瀬の浪にしづみ
氣も魂も露の夕ぐれ
是は又藥違ひの花に風
柳の髪がぬけて兀山
さほ姫に縱敷銀付とても
分別所袖のとめ伽羅
今晩の床はふらうかふるまいか

川原の凉み重一重六
田舍者侍交り山法師
みな〳〵死では五百羅漢に
夜がたりの夢が殘りて安樂寺
是も思へば天神七代
正直は俄分限にとゞめたり
かうべに付る油賣しか
風かほる下女があたりへ音信て
夜ばいの扉明やすき月
輪懸かねかけたが弛す時鳥
熊坂一族さそひ顏也
雇はれて奈良座殘らず罷出
たゝみなをする袖がきの森
明てきて暮に數なき杏の音
此宿中に馬を出さぬか
足弱の王昭君がなく涙
莫著きらひの思ひは煙
一代に一度は脫け局など

よいつてあつて大内の空
念願の望もかなふ歌のきれ
狐川ゆく手鑑の月
身だしなみ重ねて秋の男山
腎虛の露を神ぞ知るらん
花に風吹たら忽躓そうな
將棊の金銀こがね山吹
玉川の蛙も隙に相手どり
浪たちさはぐ重て爰許
つり目安其末〻は捨小舟
われ鍋すりこ木香物桶
煤はきや終に亭主が見ぬ所
足をば空になぜに寢て居る
執心の佛金輪いたゞきて
ひや酒の恨み申べき君
夕だちの雨の帝も驚かれ
則玉座で抹香燒る〻
極樂をこ〻に移して千部經

百十人の飲食を二度
月をのせて小早といふ物急せたり
折ふし秋の末があぶない
四千句をまづ取懸る亂萩
野寺の建立十方旦那
堀兼の井より一躰堀出し
うれしく急ぐ取賣都へ
八重の雲立上るより二人連
敵うつまで同じ編笠
有付は野に臥山に鳥懼し
久離きられて鹿の音に鳴
親類の末の秋とてあらざれば
今でもしんだらあのやうな月
白露を置て見てから手を直す
大橋流の筆をおつとり
花の盛どこへ出しても二百石
春の川邊や天道の内
角のくら與市其時たつ霞

嵯峨野の末を今朝見るらん

小相呼て髪帷子が辻とかや

奥さまの氣にいれば入なり

さては憂名立つたら立迄立風呂に

作り聲にてそれは吶るか

きり幕の内より赤い顔を出し

水を仕懸てあまのしやこめを

播磨なる城ふみ潰す神軍

今年八十明石の入道

夕暮は化たそうなる手長蛸

砂鉢計が殘る松風

夜半の月進退棒に振られたり

賣僧はすかぬ嶺入の人

すこし露哀と思へ山は山

出るといふ字をまだ得書ぬか

眞砂地にそもはい初る虫の穴

恒河の鱗佛の別れ

天竺も花なき里に成にけり

酒をくらふて夢の浮橋

買懸すます事なく横雲の

されども世間はたつて行山

大矢數　第六

何坂

大獨吟嶺の松風谷の蟬　奥村林雪

若竹に虎里に狼　西鶴

したらてん雲忽に入亂れて　木原宗圓

小便の曉秋はきにけり　良和

目拭ひの綴きれの色野邊にあり　寛政

つとめをひいて夕暮は月　宴流

おのづから計鷄の音も絶て霧　利見

障子明ると是はさて露　十賀

きのふの空けふの加減は替りけり　執筆

旦那の氣だて雲の行末

諸事萬事心にかけな時鳥

音羽の山の世帯が專一

爪に火をかれたる木にて燈されたり

迚の事に繩きり所望

いかに盛久遊覽の時四斗樽も

貧乏鍛冶まで鞴祭に

まづ七日八日上りし稲荷山

祖父の髭は松の葉の月

千代の秋今重たりるほし親

幸菱屋暮の稲妻

花染も京は水際すぐれたり

鯛は櫻に大坂はまた

若い時諸國修行に立霞

役の優婆塞子細ある山

火の玉が吉野の奥に落たけな

三年生まい揖の木がくれ

いはれざる銀を拾ひし厄拂

浮世はみな〳〵夢じや物月

胸を定柳が浦よりどんぶりと

聟には礫女浪よりくる

なく鳥も連理の枝に噪だか

廣い揚屋のうらは遠山

みな大和井筒によりて影見れば

汝一人の水右衛門也

月照す家中多しと申せ共

蟲の鳴く音や筆を持ては

やす〳〵と生物よする霧の海

取上祖母や礒山のこし

髮は高砂かしこは櫛裃さがされて

むさいをかまはぬ世上の曙

お湯の子も救はん爲の御方便

達摩大師の替る腹なり

氣根强う九年が間按摩執

奥州合戰夜るは隙也

三味線も皆長持に打込て

戯女狂ひ分散の月

露時雨すこし情が懸たか

また從子ほど廣き野の色

其昔木の股よりも花咲て
　鳴歸るらん棹上の雁
一疋は加賀に白地の雪消て
　適れ乘たり春の山道
よい聲で諷ふた取引霞
　人目耻よ後家のいたづら
死別れ生てわかるゝかねの聲
　やれ今までは余所の夕暮
雲噪ぎ必ず降て來そうなそ
　三日めを見るかしらは猿樂
大酒もり長者の内で何なりと
　時の光や萬燈の影
眞ある神の誓の南無天滿
　勝て見せうぞ碁盤屋町すぢ
月に駒さま〳〵曲を盡されたり
　過分の望み稻葉亂るゝ
新田を早取立てわか莫著
　烟の末に五間七間

手桶番よばゝる聲も靜まりて
　行人忽衣ぬぎけり
無理死や三輪の山本道もなし
　十市の里の御場よごすな
譜代者あはれとし子の生きて
　數かぎりなく橘いたゞく
絹配つい明方の春の色
　飛人形や霞む半空
花に風手妻のきいた事こそあれ
　痃癖おせば雪のしら山
菊都は御出入申谷の戸に
　是非きつはして月待所
其色の日數とまりて下紅葉
　妻こふ鹿も男かしれた
きかぬといふ聲きく時ぞ恐ろしい
　地獄の事は殘らずまつかう
改て繪圖の松見る箱根山
　手懸を置に玉笹の末

降雹是こそ戀のかたまりじや
　心中通すやなみつくらう
前髪のさては五郎は弟分
　文の重寶鴛の取やり
内の首尾憂目を今は水鳥の
　進退つぶしてたなし小舟
これまでは月の光をたのんだる
　秋の行衞や餘所の挑灯
袖に露我髻（モトドリ）の下おとこ
　草臥かきて揚り場の風呂
すき腹に悟の道も成がたし
　其骨の數四十八ぐはん
尾がしらや生死の海の料理好
　浪をたとふてしら紙一枚
花は今すな雪隱にかほり行
　誰ぞを覗く窓の梅がえ

大矢數　第七

難波何

奇妙の鶴方便の弓大矢數　宗光
　他方の凉風あたるを幸　西鶴
釋迦御免東の板付たつてきて　閑睡庵月山
　縮（チヂミ）かしらを瀧に打たるゝ　西松
青竹のまだ夜をこめて氣根者　爲勝
　さきのけ〳〵月鉾の空　西圓
露時雨自然喧嘩はふり物じや　西一
　紅葉亂れて六はい機嫌常賴
山歸來何かは苦しかるべきと　執筆
　道修谷もや君が代の道
兩替の錢や吾妻の果までも
　人の心は握てはなさぬ
夕の床外へ出されぬ事ながら
　咄し次手に思はくの空
わがすきは横のひらたい雲の帶
　白樂天は何と見たつる

潯陽の江にすむ時も浪こはし
　飲てのあとに新酒のかね
出しにけり町中からの夜半の月
　御番御太義名代の露
夫花は吉田の宮の神木也
　兼好以來かほる梅が枝
四十とはあまり短い夢の春
　責て二おり風の行末
杉重や事が果ての松の陰
　時雨ぞ通ふ裁許場の跡
是が冬のはじめ也けり袴きて
　水晶お出や庭山の風
忽に祈のけたる石佛
　日ませてありしか次第〳〵に
女月やあい合牛をひいて行
　高千石のさくら田の末
物かしら霞が關も續きけり
　鍬の懸聲雁歸る空

月は夜晝は何また遊山好
　露に亂れてゆり若大臣
ぬれの文さては小鷹も憐て
　胸が燃えてはまき狩の山
はね車巡れる如く紙一重
　水波のへだて引藥也
此奢上戸の喉の沖の石
　さては殿様末の松山
系圖など語り詰てはもそつとじや
　蹠がきるゝと堪忍しやれ
それ戀は親の寢いらぬ内待て
　だたい契はふけるといふ月
數鳴も鶉の床か笑しいぞ
　ゆるぐごとくに深草の露
花は根に悪い所の虫喰齒
　思へば淨土の春にいかうか
彼きしや尻に帆懸て東風あらし
　浪爰もとは衆道もつぱら

睦言は其曉も宵からも
　恨みの鐘の湯と成てめし
忽に蛭を見せても欲なれや
　根太の膿が何にならふぞ
夫うぶめ作り咄しを聞にけり
　降ルは涙の雨の夜の伽
けに思ふ草の菴の悪性宿
　内證の首尾はまかせ水汲む
お茶一つ乘て進ぜう計也
　京衆に爰をすみよしの松
影は月光源氏も此度は
　運のきはめの落あしの露
わたりくる燒鳥計あがり膳
　門跡様を御申のあと
紫の所縁尋て臺にすえ
　見れば旅宿の取なしの歌
よい言葉かゝる所が忝ない
　何時成とかねの入時

鼻毛拔もちあはせたを幸に
　山のけしきや乘て行舟
湘潚の雨の降日は爰に又
　繪書の上手雲取の月
女七夕いきて働く所をば
　賣買高し世を渡る露
花は吉野さく事それにかまをふか
　姿の池やあぢな櫻木
夕霞手くだは浪の紋なれや
　梭を二つにてたて横の縞
燈のかすかな宿の獨すぎ
　見ぬ世の友やのこる木枕
爰は又世尊時分の鼾かき
　八千度まで立ぬいひわけ
少しの義帳に付たりけさしたり
　町の者どもまづ連ていね
送りしか烟あぶなき蘇り
　是からかたき岩屋の上人

羽衣でなづとも盡じ餅の缺（カケ）
日本無双の山は夜るふる　池山西戎
借（カリ）ねども月は一かい待合　徳島鶴友
說經ときか袖の下露
水冷ていにしへ思ふ隅田川
眞につかふた高濱の松
石臼に成事やすきさゞれ石
幌こそ通れ君が八千代を
かり衣裳何惜からじ御紋付
龜甲輪ちがい箔の置上
盛物や當寺さかんの法の花
責念佛の生玉の春

大矢數　第八

何牧

大矢數春宵一日價四千　西戎
飛鳥雲に入あひかぎり　西鶴
櫻さく山は天下の御關所也

酒のまぬ者獨も通すな　又玄
是は又無理と出さつしやる空の月　西中
諸鳥わたつて生て見らるゝ　西也
長九十まだ百までは菊の花　西弘
果報つもつて仙人の錢　西鳥
さればこそ寢心よろし膏藥見世　執筆
唐破風作りおし明る門
あつたら事きつてきたのに取れたか
さあ是からはをくれうつ音
きはまる科太刀取後れ廻り宛
人間終には土屋の三郎
世の業や目鼻を付て持遊び
獨わらひは戀の根本
しのび路や猶巡りゆく車僧
いつそに懸つて嵯峨の秋風
不情なといはれては是袖の露
迚ものがれぬ月の舟には
花の浪さては最期が極つた

五貫目は後家藤の棚賃
行春はならのまなこと聞へけり
青丹よしとはさかるちぬ鯛
俄客問へど居かぬ浪の聲
汝一人の旦那樣也
南無諷の大明神と腹をたて
夜るの皷の拍子があはぬ
或時天より三五の十八降下り
然れば此松靈寶の場
當山に分入事は初時雨
いつはりのない銅をほる
卷下にのぞむ所の上（ボ）り龍
すは〳〵うごくはよしや風
一ふしに無常は煙土堤は月
隱房（ヒボウ）が手にて衣うつ音
賣藥色は紅葉をまるめたり
此二三日鹿が鳴きやむ
長持は庭に一つもなかりけり

烟は遠し見舞は大勢
御隱居を室の八島に建られて
口鼻（カハナ）にもすらす黑髮の山
五月雨のぬれといふ事したいほど
かの六味丸きくほと〻ぎす
雲に雲鉛香合かさねたり
轆轤をひけば虹（オウサ）かゝれる
葛城の山より月はころばかせ
なんと仕やるぞ跡の秋風
花に別れ當分十方に暮ました
手前の小提終に見ぬ春
八重霞立籠たる强盜市
負せ方より責口の次郎
似た顏がないと思へば浮世也
烏あはれめ墨染の袖
鑓にさび身から出したる粟田口
野等がぬけ穴是に候
親のあと異見を聞て恙なく

年代記にも心を長う
桐の箱七間まなか候ひし
咄し上手は皆うそでよい
太閤の時めく男獨なり
つかひ次第の金の瓢箪
游泳(オヨギ)ゆく寶の池の浪の月
死んでも命は惜しき露の世
どうそ又わたり手がある秋の風
虎三疋の白川の關
熊鷹を正宗殿の飼れたり
何もすたらぬ上臺所
災も三年めには千年山
逆ばしら朽松は久しき
布を經る岐(チマタ)をいたり戻つたり
物負ながら留守は度〻
作り聲阿濃(アコギ)が浦へまはつたか
月に鼠鳴明星が茶屋
ころ〳〵と一文錢に露ちりて

六親眷屬暮の稲妻
降雨が生れ替つて花になる
賴朝は梅判官はふぢ
薄霞いづれけだかき判盡し
縫しるしより山は染物
近日に是から出す瀧まつり
若い物たて白き筋なし
忘れてもなんの喰ふぞ凝海藻(トコロテン)
夜前の腹は弘法の歌
鬼神もすて杵もつて追はらひ
餅つきの暮鼻が浮雲(ウナ)い
次郎坊太郎を祝ふて樽一つ
角いれた事きのふやけふじやが
片肌を脫で懸りしさし物や
また此上に鐵砲を置け
人たがい獨もやらじ關の月
今度の噪ぎ薄に草に
松むしの二負きりのねを上て

安部野はながき黠取の卷
開帳は釋教とこそ聞えけれ
愚癡蚊虻な我にみちびく
はしは右五器は左かあかり過
小笠原家の家の風ふく
咲にけり本朝よりも唐津の花
茶碗の燒出し草の下萠

大矢數　第九

何舞

どれが驚ぞ佐野のわたりの夕詠　松舟軒西虎
駒とめて今二の足をふむ　西鶴
木具仕立もとの下草生出て　片岡旨恕
御成の門に春の色山　西林
鳳凰は飛かと思ふ雲霞　西忠
獅子の居喰はあらき下風　西廣
千貫目親のつたはり秋の月　西道
よい事計手の筋の蔦　西傳

浦辻や細道の露かき分て　執筆
川原へ近い寺町通り
俤は坊主ころしか諷ふて出る
八の口鼻(カナ)めはいつの世語り
其恨みはかぞへ加留多の馬繫ぐ
いつそに燃て火の錢とやら
骨揚のやうすを問ふて泣涙
夜半に迷ふ跡とりの聲
二番札落る所を押へては
種子をまきしか世の中の秋
詠やる掃部が末か野邊の月
兩家老して袖の露霜
さく花を待てば初段を語出す
鶯よりも其子なかすな
二日炙今迄待つも不思議也
道竹故に命拾ふた
假衣まる剝にあふ佐夜の山
念佛四五返きく川の里

夕立に萱が軒端も崩けり
　是神鳴の太鼓がわるい
くぜつの火忽くはつと燃擧る
　やれ鳶口よ熊手性也
辨慶が大のまなこに角を入
　名譽の番匠よこ手かね持
口拍子ひやうしに懸つて京の町
　或は栄賣もそよといふ文字こそ
唐土よりわたつたらくへ月に鳥
　たゞは直らぬ鼻聲の秋
合點のゆかぬ所は花すゝき
　無人島より人魂が飛
此事を三年後に物語
　石山寺は世帯の取つき
かんまいて減さぬやうに鐘の聲
　又涌でなし夜るの腎性
昔男互に脱に成にけり
　榧踏ちらす八はしのもと

香ひ油花薗山に薫きて
　豆腐の殘りきゆる白雪
常齋は今朝の事也夕霞
　音に啼鳥の御作一躰
月は水膠の大事とかれたり
　其唐ころもうつた所を
曲舞の色見る山の秋なれ
　請ておるては飜す瀧浪
質の種子巖の肩か薄衣
　伯夷叔齊前世の契約
是は又衆道の外の物思ひ
　或はしのんで出端の歌也
双六は夜の伽とて后達
　伏見の院や鴨川の水
一双に殘らずけしき移されたり
　娘が事も近日になる
思ひの火二番湯懸る計也
　なほ色あけて戀の濡衣

春日野の月は消ずも丸の内
　滅多的より通る秋風
渡鳥貌を舟に顯して
　紅毛よりも紙幟賣
めりやすが脱れぬ事なら草履ぬげ
　雪のあらしに慮外千萬
薄雲の重てそれへ指ませう
　疊の閇め星の數よむ
普請奉行小六突たる竹の杖
　尺八吹もおためづく也
ひとつにはたのしみに成大茶湯
　露は時雨の亭を掃せて
竹椽を夕の月と書れたり
　波のうね〳〵髪の下ひえ
同銘は前のごとくの花が咲
　昨日はめし今朝は春
雲に入鳥も音をなく施餓鬼の穴
　鐃鉢響く金が崎より

朝戸出や獨目があく舟子共
　小便したき漣濤の末
買懸る松はもとより否になる
　天神くらいかよい遊びもの
忍び駕籠廿五日の夜に入て
　浦の男が骨ぬすむまい
からかさに一本さして浪枕
　忽ち光る化物のまね
正眞の佛さまなら證據出せ
　石目の所見るめかく鼻
是は又御物作りの月の劍
　野邊に今咲く花之助殿
思ひ草桔梗かる萱脇になり
　さて第三はそこで遊ばせ
本名所神祇續きて西の宮
　それ片削の角の松原
葺替て少も洩らぬ花の雨
　みな惣領に渡す春中

秀衡が時も長閑に治りて
知行高とて穂俵の山

大矢數　第十

何一

天下に二つ也富士山は雪大句數　齋藤賀子
枯野靡かす息の根颯　西鶴
笛上手そゝりの翅飛立て　和氣遠舟
けふの仕懸を見する雲翠簾　西全
寄麗なる瀧つぼ平皿引れたり　信俊
直段のならぬこれ市の松　西子
四五二十三五の月の入方に　正利
隅をとられて中の秋の夜　西月
新酒や香盆でこそ飲れけれ　執筆
相手自墮落無禮講なり
戀は皆亂れ軍のはじまりに
平家の一門異見はかの道
珠數取て二十餘年の後世願ひ

綸旨をうけて此度の雲
夫月は御誂の鏡とぎ
觀世が姿秋の錦木
から衣定て討死念願也
稻葉亂れてたて臼の音
咲花の山を引事今ぞかし
天下の廣さ末〻の春
破魔弓は八千八筋と聞えたり
月日明暮浦島が孫
添乳して寢覺の床や思ふらん
ま一つかさぬる木曾の麻衣
胴斫や是を證據に尋ね行
瓜を游がす浪のよせ際
供部屋に相生の松俟兼て
夫婦一所に門番の者
戀風の敵といなや明渡る
水鷄といふは鳥が懸つた
紋日〳〵難波入江にあらね共

昇れば高き屋大名盡し
善六に手形計は殘けり
或夜の夢に鬼の契約
月に露袖は泪に苦笑ひ
かやうの思ひ憂ながら秋
扇置て帝を拜み奉らん
あつたら事を虫明の迫門
唐琴の泊りが違ふ切手箱
亭主さらばと浪が立行
卯の花の盛の內にま一卷
わる口言ふて沓手鳥なく
六藏や冥途の道もきかぬ奴
ぬいだら指せぬ山は劔の
此たくみ公儀へ知るゝ陷穽(フトシ)
八坂の茶屋の戀は影の間
佛神祈過たる塔の際
去夜の夢に鳩の杖つき
花衣月は和光の光あり

酒は飲もの柳にやれさて
葛城を責て一つは夕霞
膚の雪やきえぬ先我
御隱居のなりわたつたる風の音
百に成ては化物やしき
目に光り抑錢に極つたり
たつ旅衣世界の島〻
生海鼠あり生貝あれば榮螺あり
けふの精進無念千萬
內方の犬に後を見する事
盜人雨がふつたり止だり
聞た義が慥にござる一聲は
息を引まで京の空のみ
大三柱(シヅ)まだ夜をこめてのぼり月
まことに野邊は赤屋根かはて
涙露つい石灰となられたり
昆蒻玉のありか尋ぬる
蜷川も是はおどろく狸汁

歌の力は爰へ出あはぬ
補陀樂や南の片屋續け勝
白波たゝんで恐れながら
何ぞ是に面白き繪を書給へ
王昭君が瓢簞の駒
戀の種子蒔たら驕て萠うまで
女夫のうづら黍の刈しを
空は月所帶分りて鳥籠の山
膳棚ならべて長はしの露
花は雨虹の引事いづく迄
世上に不思議蛇の息の春
土塔會やかすむ夕の物語
そも此里は千石千貫
蓬生の隣屋敷を買添て
白い狐が通ふ取沙汰
其やうに唯早口が謂れうか
お慈悲下され小米の生かみ
佛法のいまだ晝にはならね共

夏書は大事手習の時
分かないか歌か現か幻か
生れぬ先は鈍な物ぞよ
やれきはれ未お泥器も定まらず
ふしに譬て鯨の百尋
手柄には山をつきぬき浪の月
人の念力末の秋かぜ
泣涙際を出さぬか轡むし
問ぬもつらし不破の關分
おじやつたか寢覺の里に何もなし
大節季までいゝ延て松
やうすきけ花は都の相場物
ぬるむ水行高瀨の便り
かすみの衣出家の事にて候へば
窄人の儀は請取て春

（卷之二）

大矢數　第十一

何車

第二の射初大鵬羽うつて金の範　西波
のぞみは四千里舞鶴の春　西鶴
日からかさ開けば花の山越て　西吟
仕たてうぶ着の紫の藤　西悅
三尺さし鯨の時は波にすむ　西親
油問屋の光りある月　西印
一客にはや椀ならすけさの露　西仍
平皿つたふ蔦の葉かづら　西琢
細道を唯今こなたへ玉二つ　執筆
すこしも弛さず引かねの音
極印のあたる所を幸に
茶舟中間の浪の行末
磯馴松しなだれ懸つて伽やらう
腹には戀の產時をまつ
灸すゑて龜割坂はぬくもりて
養生の部にそなた萬年
もと土が凝かたまつて瓦葺
寶の島や淡島の景
よせて今金の升で浪はかる
結構過た水のあやつり
本膳に月があまつて洗鯉
千秋樂や太夫殿分
色替てせいが延たる禿松
清盛一度戀のわづらひ
腎情をかすつてしまふ水藥師
かきくどかるゝ京童部に
すてられて後の髪を撫上て
樋口の次郎か見知つたかそれ
長持に入亂れたる能衣裳
奈良坂越に宿替の暮

徳利に時雨ふり行酒を出せ
親方懸りは神の留守の間
性がわるい雲となりては風となり
まづ四五貼はもつても見ようか
月は空影はさながら二つもの
中入綿は知れぬ蘆の穂
一子寒し憂秋ながら分別者
水鼻垂れても談合の時
小椙原かさねてなんでもいふてこい
勤の身にて萬事は哀れ
塞翁が馬をつないで大臣さま
年貢納むるもろこしの里
或はかね初瀬の寺に聞ゆなる
酒の家符買杉の下陰
彼鳥が欲のひつはる獨り口
何ぞといへば人より一番
やれさせよ釘貫松かは大喧嘩
足弱衆は座敷の下へ

月も花も替つた貌を見に行かん
永代あづかる町の藤がえ
薄霞蒙古國裏か起請の文
契のかため雜魚寢なるらん
皐月女つい大はらと成にけり
朧の清水すいものゝ後
今朝からの長口上に草臥て
看板を引山は日の影
宵闇や生所も知れぬ鼻の先
忍び男が末つむの許
膚に垢心中の外哀也
根太が出來る欲のいたゞき
墨衣目蓮是を悲しまれ
錦の袋中にとまつて
文月の影も貌も片便宜
此事明暮なげく雁首
霧烟すきが呑ずに居られうか
籠の番とて風は淋しき

かんこ鳥諸鳥の音まで知れたり
七明年は山中の花
無慚やなそこへ常盤を横霞
彼入道がいたづらの春
樂書や又へマムシとしるされたり
訓蒙圖彙は水戸の住人
普請ずき吾妻の果迄違棚
老母のいたはり孝行の道
煎じ茶を金の釜で沸されて
まことに汲す功德池の水
人の智惠是は名譽の心の月
七歩の間に豆の白露
鳩吹や慰ながら病あがり
命ひらうて遠山を見る
水主の者肩越すべきと思ひきや
夜の間の浪は兵庫に築しま
壁土にすさの入江は高みとなり
かねか五月雨ふつてわき物
爰に又嫁誘田を植初て
相あひ牛の時參りする
思ひの火燃て見せうか宮所
あら寂しやな塵も埃も
算用詰十露盤枕ねる計
雨にあらしに舟間也けり
今日の月十七文字をおもひよる
名乘かへして一代の秋
風通ふ荻野朔菴ひかへたり
暮に及ばゝ羽織もてこい
夜まはりの時しも御代は治れど
取て賣ふか麒麟鳳凰
貧乏神社壇次第にさびにけり
痩子八人五人はをとこ
花の波例に任せて渡り初
櫻は鯛に樽は二十荷

大矢數　第十二

蛇何

柳は綠範は紅や二千句目　西毛
　のぞみ半分咲きそむる花　西鶴
汲む霞何はともあれけふ殊に　西虫
　水は巴の字をきつぱりと　吟行
月の色なほ染出してちらし文　西習
　世上の噂籏本の霧一寸
改る御殿の露か頃より　利元
　秋の替りを餘所は仕與ぞ　執筆
それか山ぬけ脫(ガラ)となる梢の蟬
　附合きこゆるすみよしの浪
延さぬぞ殊に三月三日切
　大振舞の盃ながし
櫻咲時に遠客とゞめたり
　あんな日和は空にしられぬ
あさつてといふかと思へば染物屋
　ぶんまはしより形たちまち
吹風のあふぎたる木を割付て
　螢の光金堂の舍利
章駄天も雲の上まで行べくば
　早い仕懸の中事の雨
宵の口月のない夜は二つなし
　影を忘れぬ挑灯の秋
强盜(ガンドウ)中間智惠より起る下梔
　山はあらちの殺してもとれ
昇で行身に懸らねどこしの岑
　雪ばしらはり太政大臣
松の風靡かぬ草木なかりけり
　忽白象よこに出るから
不詳には普賢も浮世に住給ふ
　地獄耳とてそんな事きく
火付めが硫黃が島に取籠
　叩番行八重のしほ風
夕煙今夜はぬるうていられぬか
　どうやらはしかい身もこがれつゝ

茅莚敷寢の契枕の月
　むかし小判を露に打行
おこし米秋を重て飢饉年
　あはれや爰に捨子泣止む
元興寺をそれさへ夢か幻か
　すこしの契化に鳴川
我と我水をさしたらさそうまで
　料理鍋には相口の友
晝過てまつ夕食をとくせなん
　あらし待得て乘急也
二十五の菩薩も爰に御手を引
　是ぞ湿槃にいろはにほへと
荷印や何國をさして春の駒
　花をすいては相坂の坂
月は又いつも在所で見馴たり
　どこぞ替つた振袖の露
大躍だいたかしめたか話ひて見よ
　赤い物なら脚布が引づる
庭の釜忽聲をやめられたり
　法の奇特は性突上人
引風に或時紙子綴(ツヅク)りて
　肌(キヌ)のあれたる安部の川づら
雷丸の油流るゝ富士の雪
　腰より下は白き德利
懼(オヂ)ぬれば懸た抄子も動出
　鹿の住所は遊行の寺也
御朱印の聲きく時ぞ月の舟
　秋ふく風の袋を二つ
あら鷹を末野の原や分ぬらん
　うけたまはつて間宮藤太郎
育ては五人の中の惣領也
　似合ふた事があらば裸で
手傳の麥春歌も面白や
　岩戸の前にて神の折敷を
請はらひ大形しまふ松の陰
　馬さへ來たら時雨降行

僞のある世也けり御政敗　貞永元年八月の夜に
物覺越後の鈍主坐露の玉　秋の錦や首たてごろも
終に其虫がつのつて野に送る　なけく片手に太皷の拍子
花の波此里きれて行末は　又上様のきしの山吹
吳服所に色なる水のぬるみきて　波の數よむ文の字の錢
覆居(カキスエ)の末はあらしの山遠み　野等があつまる野の宮の内
日影者かけ淋しくも今ははや　龍の都へ潜る四つ足
綿繰をたはら藤太が取て歸る　よせ手の勢をのびあがり見る
饂飩桶熱鐵わかして懸たりけり　すは〳〵動は若い者ども

新枕二つならべて夜着の下　伏見の夕はまれ泥町
まだ月は沙汰が御ざらぬ藤の森　そちがきかずばすゞ虫の聲
秋の風あらくな吹そ嘆に　高津の宮は土取場也
御進退夢に目見えて鬼瓦　大工の棟梁こゝろやはらぐ
鏘鉄鉋劔の山を見るからに　此世は纔の二尺六寸
夢じや物まくら屏風に花咲て　飛で胡蝶の曲乘かる業

大矢數　第十三

何使

通樽や居ながらしるゝ花盛　利貞
春宵一刄五分の算用　西鶴
泊り宿歸雁の口につぶやきて　豐流

厄介懸るあし弱の雲　豐秋
古折敷漆の山の夕ゆしき　定時
破れ紙帳を秋の月もる　清客
きりもくさ包むとすれど霧烟　政武
見つけられたる疣の露ちる　松聲
夕暮は酢を懸て出す色の草　執筆
是非といやらば爪をはなさう　秋時
此うらみ籬に寄ていつまでも　客
かねは忽二日はらひに　武
出替りの男もすなり女の躰　聲
造り聲など樣子の鶯　筆
いつの春またるゝ物ぞ展せ銀
親仁の跡なる花やちるらん
山寺の夕暮なけく入佛事
豆腐蒐蒻雪のしら和(ニエ)
はら心下り行なり雲の浪
彼海底に夜の内に五度
月枕油斷のならぬ寢ずの番

御次のから紙菊の花さく
鴈鳴て住吉の浦藤に見る
名譽な物は夢の通路
娑婆はなれ四十九日と申には
大形きなるかねの草鞋
伊奘諾は日本の山踏分て
あゆの魚さへ今は動かぬ
繪草紙も下(サガ)りを請て送狀
心中の末は年寄女房
水性の性のおもはく波の皺
龍燈あがつて疊挑灯
此細工久しう懸つて見せまする
芝居は果てあとの松風
月は空是からすぐにもいなれまい
圍(カコヒ)くらるにかくるしら露
御茶もよし花紫の物思ひ
疊なをして武藏野の隅
傘やいかなる風の雨となり

舞臺から飛山ほと〻ぎす
同じ役者誘ひ顔なる氣色也
智恩院には松の下菴
車宿り悟りは心の馬とゞめ
米屋の門の壁に向ひて
らく書は夜更て通る筐〻
お肌に添しあはれ摩胡の手
三つ藏の內氣ものさへ聲を上
腹の立つ時さる澤の波
月も花も寢くたれ髪も逆に
と〻より先に戀死の春
世界みな一度は消ゆる雪佛
有にもないにも風の行末
出次第の　に任せて白うるり
寢られぬ時の伽の村雨
腰もと衆奥より召され侍ふぞ
徒ら目つき玉のきざはし
引琴の心も共に引て見る

國は亂れて臣下の歎き
殘りもの工て舟の算用に
白樂天か天作の五は
青苔は衣に似たる符帳付
二端續きの絹笠の山
月は都驕きはめて御遊山也
野に成色や珊瑚珠の杖
此度は唐土人のわたり鳥
隱元木菴雲なり風也
大筆に染させらる〻西の海
顯し出し灯籠の影
臟物神は證據に立給はず
手のはいるほど戶がくしの山
鳥籠の奥は場廣き木曾路にて
摺鉗やはらぐ滴りの音
人間のはじめは婆もなかりけり
三途川にて魂まつるわざ
恩賞のためを思へば心の月

急度討死衣片しき
花の風わたる所が今一目
下駄の鼻緒や春雨の空
大女房一丈二尺立つ霞
浮世のうらみ小人島あり
耳搔に筐の抄子取違へ
都へしまふこま物の店
時は今六條參りもなかりけり
茶呑て暮す鹽竈の浦
人謗る其尾に付て浪の聲
蜑の子なれば賤しい筈じやに
買喰のけに夫よりも十三文
閏は神の夜のともし火
頭は猿與力同心召連て
此穿鑿に膓をたつ
彼文を置所なき暮の月
甘泉殿やひとり身の露
作り庭か〻る島とて霧が立

秋のあはれやあばら三枚
夕暮は風のあてたる竹の內
空定なき大和路の旅
水もがな喉の噪(サヘギ)は六度まで
又醫者替て雲の行末
ずいは雨とは思へ共髮に花
聞ずはいなぬ春ほと〻ぎす

大矢數　第十四

御何

紅の幕を通すや時鳥　元春
此度天下一段の夏　西鶴
かるたはあだ打出す風涼しくて　不琢
夜半の鐘聲更て行雲　笑爲
月は峯きんかの山や光るらん　源八
十筋右衞門が瀧の糸露　正俊
ちり初る柳の枝に鹿の丸　誓舟
用心羽織のさ〻蟹の紋　無眞

古風盃唯ふく事を想像（ヲモヒ）　執筆

潯陽の江は水の雑水
夫杓子金徑山（カネ　ヂン）の麓より
始末者めが燒殘す松
行先を六町一里に極めたり
馬士に諷はす樣〻の歌
女郎柄（ヅカ）畫は人目の關越て
自然心中の刀あづかる
あらがねの槌の音より物がたう
懸屋のせんさく一卜の露
我物か迚も天下の月の影
阿武丸には初あらしふく
臣は水鳴をしづめて花の浪
この事をきけ蛙なく也
口よせて目からふらする春の雨
夕寂しき天王寺山
鳥井越す扇の便なかりけり
神も佛も御ざらぬか君

髪剃（カミ）を戴く度に秋の霜
自害にきはめて袖の夕露
忘れなよ汝一所に死出の山
喰次に成とも裸で成とも
木乃伊をば取は大事の花車
春の野に出つき付人參
また息が霞に通ふ君がため
是から化名は立風呂の山
よい手懸かゝりはないか卅日
浮世少路を唯はとをさぬ
五月雨に大溝筋の芥川
髪によせくる地奉行の波
植初てなほ千年の松一木
式三番や幕上て出る
茶辨當朝日待得て汲ふやう
志して加茂の山寺
石川が髪に住なす峯の月
仕置の大釜下紅葉たく

秋は酒たくみて作り初しより
末は富貴を松の尾の宮
衆道歌道佛法僧の音に鳴て
戀みな覺て捨たらば闇
哀しる卷〻を見る火が消た
中にも夕顔ならぬ進退
夏瘦は作り病と思はれて
屋形廣いに片脇の山
水莖のおかた狂ひは逼塞（ヒツソク）と
霜のふり葉や白齒も見せうか
張弓を引て懸れば男だて
月に光の鎭西八さま
秋の風源氏の筋や吹ぬらん
關より東白川の露
釣替に守隨もならぬ花盛
わか紫は三千雨まで
用心や春の光の數具足
操取たて銀本のかね

津の國のたゞしき山に懸つたか
田地財寶武庫の浦風
いつ夜ぬけ片帆にかけて何國へか
江天の暮雪みなになしける
二幅對是に詠て書しまふ
男有けり女ありけり
やりやつても勝手つく也新枕
節供の祝義魚と水とや
書狀もつて硯をとらす土佐の海
同じ所に明る日も宿
月の駒中間二人と申ける
蟋蟀まで作り髭也
露霜を汲分てより旅のかた
無常の嵐かし色もあり
一日の極樂の沙汰も錢じやまで
天鵝絨の蒲團に寢た事は今
乘物昇申兼てはいへども
もはや最後が近付た濱
石龜に夫花の火が燃あがり
小の虫より大分の春

大矢數　第十五

何卯

日は遲し三千世界四五千句　矩貞
硯に霞乾坤の箱　西鶴
花は雲時代蒔繪の山見えて　悅重
どこへ當ても春風の音　一飛
諸息に今は殘らぬ雪の水　清久
青霄藥の苔の下道　貞利
月の影峯踏はづし落にけり　一秋
あぶない所及渡る鳥の目　一笑
吹弛す殘多さは秋の風　執筆
障子の皺の芭蕉はやぶれて
瓦落〻〻と脆も落る神鳴か
茶碗摺鉢しがらきの山
夕詠愛宕扨子も懸並べ

命の長い客やまつらん
或道は五百八十七まがり
心の水に公事工みする
鈴鹿川深い所かどうよくな
夜前の樣子か鬼の切底
削ては葬の宿の烏賊の甲
驚など一羽轉合のかは
尾行（ビコ）〳〵と貧乏ゆるぎ森の月
埃につれて霧のたつ山
秋の霜殊に白きは目の毒じや
御肌着までさはるに煩惱
四五日は誓文立てるたれ共
上に梵天下懸りには
石田流其聲雲に響して
三番目には葛城の山
曳出しの貝を詠むる豐等寺
軒の瓦に鳥の古綿
よこ笛をふくも上手な大上戸
二十五人は寢たり起たり
借きりて波路はるかに今井船
鵜殿も芦も名所舊跡
笙の舌月に管絃の有し時
此宮徙し初鮭神躰
たち魚を錦の袋に入られたり
龍王世界に通ふ本阿彌
藻鹽草筆の一流書覺
北濱望ふて十まいの山
配り札朝の雲や替るらん
いも〻はしかも時雨晴行
酒ませて湯尾峠も爰なれや
鹽解こなす谷の摺鉢
岩が根の床端（フチ）削て物數寄に
松の茶筅は亭主の手前
初雪のふつた所が面白い
角のはえたる駒に鞍置
出る月も御寶物の內なれや

第一若ふ千代の秋風
拍子とり躍布袋も動き初
是は扇の要石なり
埋木も今は碁盤に替り行
伊豆殿の智惠名取川とは
御仕置浪も靜な時津風
枝を鳴らさぬ道中の空
遠寺の鐘いつ夜が明た知らぬまで
唯一すぢに念佛講の衆
大悲の弓次第にあなたへ引力
雨や雹と啼ふならいま
小笠原是としつたら靡まい
本妻のある戀の山也
心の月ようは隱した袖の浦
敵の行衛しら波の露
憂秋や譬進退捨小舟
一せきからけて約束の繩
沐浴のあとは泪と成にけり

されども入な水風呂の瀧
こむさいは七日のほりし泊り客
蚊屋釣兼てかし夜着もなし
暗者とちぎる所か大笑ひ
其睦言は百目より內
鐵砲の玉のありかは月の暮
たねが島からたつて八重霧
俳諧の名所ばなれに鹿の聲
さし詰になる秋ぞ悲しき
髮を一つ金か銀かゞ有ならば
後は繁昌買て置もの
長町の東輪より花の山
雪のむら消源聖寺坂
經をよむ鳥も朝は飛連て
淨土の春は何をきかうと

光明遍照十方を鑽す
夫佛山より出る蜂の聲
賴光夢に思ふは霞
身嗜み源氏の流ぬるみきて
春の初買浮舟の卷
先花は掴み搜してやつてのけ
提重われて雲雀囀る
むかし見し又公事宿は替ゆく
飛鳥の里に五人三人
奥座敷のそこは灯空は月
小刀鋏糸薄など
よい細工きいた所が虫の聲
此廣い野に拙者一人
ようゐると思召さるか後世の道
蹙がきれてあし引の御影
長咄し唯山姥がくどい事
それは何れもしつた能也
引こむは敗毒散でなをる物

大矢數　第十六

何蹙

吟聲や梁をはふ花の塵　延良
鶯鳥の琴引言の山　西鶴
御尤異見かさなる霞晴て　西流
遠いへ出ぬ春の夜の月　素扇
四五日の留守を預る塀築星　有雪
風が氣遣一群の雲　西茂
からかさは先いらず共持てこい　西二
自然の時に飛事も有　淨久
鎌倉にもし足革と云ならば　執筆
寒の入より雪の下道
聲つかふ梢に響く松の風
引たり三味線夕暮の雲
手繰繻霓たつ島と成にけり
人間はじめて姑懸り
其時は戀に所惡も定まらず
唯空虛と寢たり抱たり

供部屋に一日暮しの風の音
急がぬ舟の波の行末
遣錢何國をさして百ぬらり
今朝の天氣は雨の宮たち
まだ見えぬ月の光の間の山
菊のかほりや鈍子の替りめ
雁鳴て吸物椀や響らん
應答(アシライ)續く浪の夜ル晝
また是に付て見給へ蜑小舟
さては奈良茶を燒さしのかけ
急用に忽雲がたつて行
雨は頻に子かへりがした
味噌汁や萬民是を賞翫す
どうやらしまふて明ほの〻春
御作意のまづ初鳥が聞たいの
是かいしきの獻立の花
東風かぜの福原の家は格別じや
給分やすくと半季るて見よ

召替せ自然一つも袖の月
預り物の柳ちる舟
霧の海波靜なる四貫島
夫天台の流れ題目
情強(ジヤウゴハ)にいひ懸つてはおはまりじや
勤の外のかね捨うなら
我胸にのほり詰ては阿鼈居士
長き鼻毛をぬけば泪に
出來坊さいの川原にすたりたり
さあ〳〵覗く箱根路の末
岩がねのつきかわるくと取てやれ
そこが緣づく袖の夕露
月も又いつまで獨るられうぞ
鬼界が島も新酒を友
通ひありとそこへは告よ寄浪に
身は養生の日風呂する也
欲も垢も腰ぬけわざにてかなふまじ
今度の軍耳の穴ほる

人質にまづ唐人を捕ておさえ
横物書す黄檗の寺
山水を汲上らるゝ閼伽の桶
いつも來れる下女の姿か
念を入てそなたへ渡る戀衣
重きが上の長持ごしらへ
宮城野を都へ取て歸らるゝ
公家の知行はいにしへの事
八重櫻たとへ折ふと曲ふと
守かつかずに生年の春
ぬらしては敷物もなし朧月
傍から見ては荒波の舟
志賀の浦それ人買よ〳〵
麓に山王猿轡あり
古かねの市は果てたる松の蔭
源左が手前明ほの〻雪
庭訓の口より續く十二月
七尺さつて師匠に合力

難行の釋迦の便は棒にあり
饂飩蕎きり空〻寂〻
集錢出しいかなる雲のかさなりて
われ神鳴の太鼓分なり
是流れながれさまより芥川
浪たとふては袖の下ふみ
月に花ちらする銀を當座借
大木(ギ)の陰の青柳の色
烏賊幟いとはかなくも散て行
島原陣の四郎や五郎八
まゝ喰とよべと叫ど兵粮詰
定に入ては無分別今
目黑の原あはう拂に成にけり
茶屋が奢て風の行末
なりふりのあの御所染はいらぬもの
髪をきつてもどこやらはまだ
厄病の業は殘らせ給ひけり
頼すくなき四十二の年

食がいかぬ箱に目鼻の風情にて　大きな願ひ淡島の山　西幸
同じくは金の逆鉾波の月　ふたつどりなら内藏の露　西益
姉よりもなほ色まさる女郎花　うす約束を人にかたるな　西滴
豚魚汁に自然の事か無調法　最又起をれ小田原の宿　西朴
二番立三番だちが通る也　行司が貰ふて枯木の力　執筆
賴朝の浮雲き所に花が咲　あしを汚すなゐのしまの春

大矢數　第十七

何詞

句毎の花誰か讃ざらん天下藝　身次
鳥も誹もかへり見ぬ山　西鶴
くつさめの岩のはなから雪消て　一幸
かしら煎じに風の行末　西幸
二重染落葉小紋と成にけり　西梁
木陰の塵をはき懸の帶　西益
湯上りの夕涼しき空の月　西朴
まことに都は水の天目　西滴
立物と人はいふ也舞臺先　執筆
最員があつてあんな男を
緣組も銀が敵のうき世也
押へて首をしめて口すう
手打〳〵しほの目の時今なれや
迚もの馳走に細工の樣子を
上塗は三日が内に出かしたり
長者の許にて田樂の味噌
千石の其芥子種も芳しく
小刀こまかに塔を建けり
補陀落の岸に響かす槌の音
大黑殿や波の大聲
一に俵二には喰物三に酒

遠路の所御見舞の雁
私の風昨日よりも覺ました
此躰ならば追付て露
隱事何ぞと人の問ひし時
煙の山や塵は日暮て
是は又筐となれる莨菪盆
あとより戀が責てかすはい
積の虫のほれ〳〵と申けり
青筋がたつ瀧津瀨の末
細作り鯉の鱗をならべつゝ
今日の儀は波次弟なり
宿老殿額をすこし傾けて
目安と申す前句むづかし
塵劫記もとは一つの月の影
秋の色とて表紙が懸る
露むすぶ中の新發意玉襷
是から木遣りで和田の笠松
まき轆轤同じ廻りの車舟
油のおりは底にしづんで
俵藤太取て歸りし鐘を撞
三上山よりこれしこみ杖
雲の袖もつてひらいて心得て
風の懸たる反橋の躰
神輿舁流れもあへぬ水を出せ
金物みがく五月雨の空
夏の月九寸五分は鼻の先
涼しき夕盆山の色
花の雪四季諸共に詠物
盧齊が夢の蝶はおりすえ
さほ姫や山くれ野くれ里歸り
伊達な姿の池へはまるな
結び目の帶想像かもめ尻
互に起て雪の明ほの
あと付る足許を見て駕籠の賃
餌飼をしてはなく聲計
符替りの鵜といふ物咄しの種

一文惜しまぬ淀川の末　貞林
神前や幾人にても水車　西鶴
燈明の油綿實の音　西與
好ぬ事と思ふべきかは誰もみな　西言
包て針が忽いたむ　西屯
蝮のすむともしらず夜の月　西尋
秋の夢路や常盤の國許　西晶
身をかくす源氏の末は露涙　西樹
紫式部を寺で取をく　西柳
戀の別れなほ又別鐘の聲　西鶴
命の内にならふ事なら　西言
其榮花伽羅の足駄をはいて見よ　西與
茶は金の魚の店すぢ　西屯
西は海東に高き山を築　西尋
准は是より放す石火矢　西晶
弱みそが一門の肝を潰しけり　西樹
ものゝはしより落月の影　西柳
心懸薄霧かゝる精進日　西鶴

けさ起ざまに露が亂るゝ　西言
花は波ほどなく御舟が着候　西與
柳の陰の幽靈の親　西屯
春の雨玉にもぬける心玉　西尋
雲の袖よりあちらへこちらへ　西晶
天乙女ことに勝れて樣子者　西樹
通ひ男め布引の瀧　西柳
生田川付さし付る時分也　西鶴
遊山長じて水のしら露　西言
申さぬか責て問ふべき夜の月　西與
わつぱが行衞萩柴の陰　西屯
霜覆時節とかれる菊の庭　西尋
荒きなき風吹上の濱　西晶
和歌の浦鹽のあがりに薪まで　西樹
まづ四五日は松原の末　西柳
闕落今とは思へども神參　西鶴
から尻馬も同じ首づな　西言
立養ひわが一連樣々に　西與

慈悲の眼や逗留の内　西屯
景清も觀音同座で咄さうか　西尋
甲の山はをと羽なりけり　西晶
節供には又櫃川を出されたり　西樹
浪のよるべの腹に一ぱい　西柳
咲花の陰に驚き子持鮒　西鶴
さつとおろした春の山風　西言

大矢數　第十八

何佛

有漏地の歌一休に恨あり女夫星　貞林
けふ汲かえる堀ぬき井の水　西鶴
山雀の馴ては籠に飛ぬけて　西與
梢のくるみ遠近の風　西言
膳棚に雲かさなりて夕の月　西屯
空の光や野等が目の玉　西尋
晝寢して人〻替り草の原　西晶
諸事はかね也樂は今更　西樹
仕合は蔓についたる茂りの蔦　執筆
宇津の山越す馬の腹當　西鶴
都への傳手を尋ぬる片便宜　西言
彦作が母死だか生たか　西與
夢の世の狂言綺語を振捨て　西屯
唯一筋に俳諧繁昌　西尋
或時は闇がりよりも鑓を出す　西晶
浪人しても夢の枕に　西樹
驚ぬ後楯には富士の山　西柳
有馬の不思議涌て出るかね　西鶴
河野屋のみつが情を問寄りて　西言
袖行水は太股だけか　西與
花をふんで麩と云物になしにけり　西屯
無茶の御齋春の夜の月　西尋
大分のあとを彼岸に取當り　西晶
二河白道は表うら門　西樹
夢となり咸陽宮の末問て　西柳
三千人の内に似たもの

牧狩や鷹をするてはぬ鳥
けふの氣懸り雪の夕暮
大船に忽嵐通ふらし
其時義經帽子と鉢卷
痛みぬる向ふ齒反て猿眼
待依の詠歌嶺の松風
近道に戀の仕樣が有物を
島原よりも堤町の暮
筒井筒るづゝによりて久しいの
互に影を見なんだは月
かい揚る霧立籠る風呂の内
太夫着して伊勢の濱荻
寢道具や錦の浦の夕間暮
王の位もかうした事か
洗いぬる金銀耳に逆ふなり
縫箔すてゝむかし帷子
世俗にいふほどなく嫁が姑に
そさまの心替る行末

影つらき月日またせてうかゝと
此盆前もなせと八百
すこし又商賣かへて鹿の聲
夢野の末はよい賴み候
花若がもしも十五に成時は
脇ふさがせて袖の梅が香
兄分も霞がくれの暗部山
今は雲にも耻ている風
御尤爪を加へて昇り龍
夫大唐の琴の引こと
身自慢のそなたは痩て馬の上
死に懸つたる光明遍照
いまは早左の御手に土砂を持
寄特顯す七日の說法
少しのかね身のしろ衣哀也
局住居も情は同前
夜見世通ひ晝をば何とうば玉の
二つならべて枕詞じや

山の端の夕月是からやるぞゑい
礫はのびて秋の風の手
鞆殿は一字備る花薄
筐の扇置て下され
其方の影は忘れそいつ迄も
病の根ぬけこれからの風
蓬萊の島へ渡つて來たりやこそ
ふんどしかいた鬼を見ました
寄物とあたる物をば十二番
御家中廣き書院の夜詰
飛螢殊に大事は火用心
愛宕の札の玉と見る露
月の影長床坊に暮初て
女のするわざ衣うつ音
花は根に賢い者を腰本に
柳見通す三寸まな板
手細工に一束五帖帳祝ひ
人の不足の閻魔大王
鉦たいこ千本通り尋行
紙屋川より塘きらすな
夜前の酒度かさなりて波がうつ
亭主が立て引網の魚
一本の竿をさしては働いたり
重の仕懸分別の外
はれていく星の光も面白い
小玉町より西を照る月
秋の風圍扇の紋を付られたり
六尺中間勝れたる露
藥筐着婆があとをぞ取れける
一度は名譽を見する浮雲
手づま事かくす所が祕密にて
或は地より天台の山
乾坤の箱の中にも疊こみ
雲は着替の裙數が有
仲人口雨の降るほどいふて來る
また思案する繼草の宿

一裁許二裁許まで待が花
　惣年寄の懸る松藤

大矢數　第十九

何景清

三尾の谷が譽て通すや雪の傘　寸松
　遠大しやう馬下駄の霜　西鶴
見あぐる山二段目つかふ雲消て　未清
　歌口しめしなる瀧の水　西清
草かりを絶ず問ふたり絶ずとふ　誰與
　きのふも飛脚甥か下作　是久
いはぬ事袋に入し村の月　西逆
　化はせまいぞ秋の野ら猫　瓦石
棚のあたり眞葛亂て何と哉　執筆
　責て見立の思ひよる露
此所新地ながらもはしら組
　なほ行末の若宮八幡
忌明にさゝす日笠の鶴が岡
　雲は廣袖二色の帶
聞たかといゝ出るより大笑ひ
　生板に釘山ほとゝぎす
村雨や大根おろしにふり雜り
　旅行の秋はなふ〳〵俄に
取梶よ風が替つて月の舟
　瀨を忘れたか霧の海づら
夫針の北に當つて花の山
　疊仕立る青柳の糸
御申の朝の春も近づきて
　初音の鳥やこがねつり替
請出して雪は則ながれの身
　山の姿や宇治の橋姫
化粧部屋金輪の足に火をともし
　忽替るばけ物の沙汰
咄しの本末の松風音づれて
　是ほどあらふか山のかたまり
既女神波さはぎぬる腹心

綾の卷物太鼓かくぜつ
返せ〳〵是非〳〵返せ起請文
　悪人きらふ法然上人
心の月雲晴ね共西へ行
　酒におぼれて秋の朝露
尾花波大蛇と云もの動き出
　勸請の宮武藏野の隅
淨瑠璃やいかなる風の末の段
　念願六字南無右衞門とて
入黒子若い時には我も又
　弟分など有こし物を
大きなるあとを龜井に下されて
　酒造りこむ名水の末
たのしみもかくやと舟をたゝえつゝ
　今目の前に極樂の月
精進の内ならばこそ鯖くふな
　茶碗は冷て水の呑置
花の山四里が間に里もなし
　暮ぬ皆じやが藤の黄昏
行春の名殘に今は高足を
　長崎下り住吉の濱
メリヤスをはいて蛤蜊蹈れたり
　吸物またいで利屈な客ぶり
何が腹がたちまち座敷立破り
　此曖はのけて置しやれ
重湯さへめしを喰してたまらうか
　番の袖乞あはれ世の中
儲にくひ月に村雲花にかね
　老の鶯足手かやさま
春の風今度輕わざ渡たか
　燈心つんでおも梶の音
嫁突や一二三四波の玉
　姿は臼の米は白みて
願くば因幡藥師をいのらるゝ
　爰へかたぶく祇園會の山
小半の酒を出ずば水を出せ

しはひが劫じて波の夜畫
此堤一度にきるゝ樋ノ口屋
外科も懸つて堺寂しき
牡丹花のあとは次第に廣がつた
唐網うてば漣濤の歌
あはれ喰志賀の都は荒にけり
むかしながらの近付の月
扇屋でぬれて置たる袖の露
よつぽどきらす柳ちる陰
際目論そこがつかえた葛城山
溝板ふるき久米の岩橋
額は二字筆取あへずさら〳〵に
時雨の亭に折釘の音
こけら葺軒のしのぶも物さびて
昔はむかし喰ず貧らく
寢て起てさて其後は目を塞ぐ
大事の事は思ひ出されぬ
千貫目手形まぎれて箱傳受

猛き武士家老がわるい
一筋を諫め過して二筋に
三がきれては引にひかれぬ
追懸の客かさなりて岑の雲
髪にはり出し岩がねの床
萬日も願ひの月のめぐりきて
諸國の袋稲葉亂るゝ
加減して一貼のます秋の風
溜る筈じやぞ白川の關
寢所も今は揚たる歌枕
左座右座いづれもはらり
盛の花聞と火ともす草履取
霞も共に時宜は日の暮
春の風芋吹にしてあたらうぞ
山〻の雪殘らぬ〳〵

大矢數 第二十

繼何

年の矢や有無を離て行やすし　一水
煤はき懸乞修羅の戰ひ　西鶴
三熱の鍋をぬくべき習ひ也　三千風
啜れば水に紅のした　西風
學文の窓は洞にぞ成にける　吉重
一重羽織でせつひ町醫者　西重
供二人挾箱には朝の月　西交
柳は散りて舟賃をとる　西久
秋の霜今白突の餅となり　執筆
やれ生れたと女鹿呼也
高師山腰を後に抱しめて
手懸は波の月かはりとは
さらぬ恨計へて見たる星の數
執心つよく通り矢の先
しめ出しと是も思へば油屋に
山崎千軒すかぬ奴共
身につかぬ所をのぞむ寶寺
かり衣裳をば打出の小槌
あんな月が鬼の島にも有やらん
千句ひやうしの秋風の口
また髪に花も梔もなかりけり
けさすき腹で志賀の山越
よう持た麓に四貫の錢袋
勝を見せたる宿の燈
つれ〳〵の心付には長點か
下戸ならぬこそ明日の朝
御霜月難波の御堂執行あり
田蓑の島や置綿の色
五月雨に傘を借る宿もなし
あはれな所かたる行末
父も母も子といふ字迄絶はて〻
愛宕の山やかやうの境界
劔舍利は唯用心の爲ぞかし
彼海底に飛こんで疵

月は玉ろくな緒じめにならふかの
白雲帶は秋の山陰
樂天も聲帆に上て雁渡る
韵字をふんで菊の花咲く
線香の薫の末に山一つ
拜み付たる正眞の彌陀
元狸是も菩薩の腹皷
化もの屋敷替り狂言
吉日や水盛て見る飛鳥川
かるい疱瘡天の香久山
春過て夏の始は懸あるく
短夜の月くらがりの牛
萍の菱を取ては作り物
花はやきばの小刀の先
腕香の煙の末は八重霞
鳥の地獄へ落たらば春
有馬山湯でも水でも今のませ
ひら誣にする笹原の末

へつたりとそこへこけたるしなが鳥
ねらいすましてニつ玉露
石なごの數さへ見ゆる袂の月
娘友達稻妻の影
様付て舌がまはつた風の音
玄關によりて袖すりの松
臺に二羽生てはたらく初時雨
僞のなき見世物是じや
こちの事仲人口鼻に及ばぬぞ
燃る火性と水性の外
道はしの三條小鍛冶が打にけり
奈良の都は博奕宿とや
百貫に是でもやらぬ三笠山
明日公儀へ出し人かも
懼ゝも姉上薦が引てゆく
一つはなさけかけこ也けり
此口舌よく〳〵案じて見給へと
四日と五日と番付の文

人の心夜の間に替る相場也
何國の浦へかぬけ舟つかい
つる根太押付られてうみ少し
須磨のうしろの腰中の月
替り染波爰許に露の玉
躍を懸て浮世のなぐさみ
花盛溫飩の分では聞まいぞ
さしみの外小鳥の囀り
ようこそは春は御ざれの伊勢參
五文十文まき錢の山
是申ちいさい時は守がつく
戀の苔や三津寺あたり
干瓢もひら鬢に譬たり
そら手が起つて雲かとぞのみ
郭公聞たかきかぬか按摩執
笹風呂さしてさそひ顏也
見るに欲礙(かへ)るに煩惱よいの口
修羅の太皷やつらき新町

餓鬼の目に此食椀が見えぬけな
一引ひけば御長者といふ
はした銀月とも露共思はねば
霧立のほる道中の馬
置扇風の行衛が覺束ない
其田樂は微塵こはいに
自墮落な阿彌陀の光仕懸つゝ
五色の雲は中二階より
漣濤や山は後に前は花
衆道女道の春はもつぱら
腎性も是から起つて立霞
金で作つた人の行末

（卷之三）

大矢數　第二十一

何日

餅の輪は清くきよきぎ大鏡　西花
初空日本一番の鰤　西鶴
雪流れ青海原をかき搜ッて　素玄
取賣が目に懸る漣濤　西潤
朝顏のあしたは起て店をあけ　西俊
宵はあるかないか稻妻　西惠
此月に下戸も堪忍せぬ所　西悟
柄に手をかけ懸る白露　西卞
散柳あれば我子か恨しや　執筆
終に其後あはづの三郎
地諷を聲が立ねばやめにけり
ならの都に黑豆をたく

これ不斷座禪のどく大佛
香をもりては花子さま又
夕霞別れの鐘を撞役者
すは〳〵うごくは春の山陰
死んでも雉子ないても雉子今は早
またこの隅は風の渡り手
すみよしも力一ぱい神軍
知略といつぱ夢の通ひ路
月人に文の上書かき替て
隨分鈍な雁に此事
見分ぬか霧と雲とは分つたか
兄さまの山甥さまの里
たつた今生れましたといふて行
心でしめる下ひほの關
撞懸てすかして置て投の勝
曖きかずにいかなるか末
武藏野のまつ眞中をいはうには
ほり兼の井も左勝手に

萍の花のいけやう聞ておけ
此石塔が三代さきに
討死の子細は知らず候へと
喉を通らぬ一石六斗
月すぐに卯の年よりも寅の年
參る藥師は躍歌也
色になる笹谷分て行末は
檢見の時分の二村の山
おもくなるおもはん方の袖の下
やまひの床はけふか明日也
見世はなほ伊達の大木戸さし塞
酒の醉行吾妻路のはて
鳥がなく庚申待の事なれば
つき出し捨て七色の山
凝海藻冷行水を仕懸たり
餓鬼骨團秋の夜の月
入道の身の燃る事あふち風
明石縮や戀のそめ絹

今はやる花の都にこんな物
芝居はあらし書初は筆
節振舞又口上が屆かねば
分散事は喰倒れ也
しなてるや片岡山に影かくす
窄人衆にあきしの〻里
長刀横に車をおして雲
母衣のあとから雨が降ゆく
雷も兩馬があいにだうと落
此妙藥も人にかたるな
起請の罰あたる所を幸に
あれともしくみ是にても戀
前髮は尻の輕いに賴あり
夜の更るまで火をとつてこい
月は都さて天王寺熊野山
身の秋をしる達者道心
一本のさし笠かるい露時雨
若子さま抱てもり山の陰

夫かましよ〳〵とて蜆蚫の岑
しつけのふかい多門天也
鼻聲の彌勒の出世待ほどに
殊勝な所幸若の舞
群猿もしかたの山の道とめて
料理ならへば腸をさく
飲過す酒天童子が一座の客
太夫天神あまのはしだて
龍燈は思ひに燃てよるがよい
浪立さはぎどこらとぞきく
月は暮花は盛に場を取て
淨土の春をぶあくが語る
年玉の扇もとらせ何もかも
へぎ一枚もわれば塵也
文車の文を集て刷細工
奇麗にしたる九年面壁
御造佐や百味の飲食備られ
裏い事なしほしい事なし

大名を作りそこなふどくにて
虫がさしたる三まいの内
此書物心付ては風かほる
連歌の言葉續く四方山
あらたなる三島の天神懸られて
道中ぢうの無疾晴ゆく
さては月くらべておつて雲の袖
自慢は萩か又は薄か
もとの秋小野の小町が髪かしら
よい知音とて一つの鳥あり
晝はなほ夜の明るをもかまはねば
すいて喧嘩はさはり三百
是は又吟じ果ぬに云勝か
情分つよき山は松風
人參を鈞替にして花にかね
對馬の國より春の舟付

大矢數　第二十二

何（三子中略）

日本國作意かはたらき花に鳴　正直
水にすむ蛙高麗の海　西鶴
もめん帆に春の色なる浪立て　松鶴
二つ巴の藤の夕暮　鶴風
小刀の細工がきいてかねの聲　西聲
まじなひ事に晴て行月　鶴甫
寢所を早くもあける枕の秋　西瓜
風音づれて旅籠屋の露　西巾
青さしの色を包めるだん袋　執筆
お里かへりや麥秋の末
是は米俵藤太の娘子か
軍亂るゝ戀の根元
千疋の馬を繫だ時の聲
八百日行濱上樣普請
算用や世界のこらず砂の數
土圭仕懸でめぐる月影

秋の夜もかつきといへば寢ずの番
これ紋付の衣うつおと
風寒み暮方よりも大よせしや
道場參後世の最中
眞直に四條の辻は髮かとよ
床髮結にやうすたづぬる
看板に僞のなき賣藥
五日の内に雲きゆる山
幟甲はら〳〵と引れたり
あやめのにほひ酒の殘りか
すこしの義又音高に云てくる
浮世にすめば子供友達
つゝ井筒るづゝの水もまゝごとに
楪子（ネヨク）を仕懸た山雀の籠
不性者今朝起て見る秋の霜
さる事心にかゝる月影
醫者替てどうぞ療治が有うもの
あつたら命雲の行末

投筆かつかいおろしと申せ共
其名をのこす可億上人
玉の臺玉手と云に取立て
河内一國なびく草むら
楠がおぞひ事共工みては
二重底なる舟の行末
浪の聲幽に消て形はなし
南無阿彌〳〵南無阿彌陀佛
云事があらば此方へ申置
まつた目安に書やうもそれ
すたれ共手に入さしやうかねの聲
月重山に八景の内
秋は又志賀の都もおもしろい
三味線の露漣濤の歌
花代のそれ一枚かやすい事
柳の髪をおろしての後
夢の春町衆と共に歎也
胡蝶の行方今にしらぬか

たゞ古い付合計夕間暮
三年米の札を落して
淺草のあしたの空はたしか也
わたり相手に狼藉千萬
踏たる息の下より申やう
約束の繩ひけばかち臼
棺桶に入たてまつる六代目
此通路はわけ方の外
女共形の似たるをとこ共
御所と名乗て捕て押て
印判は爰に正しき袖の月
淺黄にこくもち七夕の布
霧の海四十挺立は皆揃へ
八島の浦へ矢をつくごとく
時に興市扇見懸て罷出
なんぞ書うか一流の流
是卒都婆たすかる法は同じ事
食が喰ひたか極樂の内

六道の辻にいつから捨られた
世間はみな〳〵夢なれや夢
五句去に暇の狀をやつてのけ
これも大工かかねとらん月
晝休み忽湯となる秋の水
人待懸て早わざな霧
花の火に夢想提燈暮初て
京までもゆく春の山道
認は酒も引懸たつ霞
追付仕合風のたよりに
腹あての駒もいさみて北向ひて
鬼の腕(カイナ)をきつてから後
今朝よりも末一段に成にけり
出し懸て置ひやし物鉢
羽織などそろり〳〵と身拵
六尺六人物もうつゝく
爰は又中大名の御泊り也
進上宵箱根路の末

獨さへまた生れたか二子山
是でしんだいろくにすはつた
聞及へうたん公事の埒明た
都の内に取沙汰の月
手懸者捜しあるかす女郎花
よい心中をたてりと思へば
爰にきて獨死ぬまい所也
隙を入ても關に打なす
仙人の日の暮るゝ事かまはねば
東來圓は賣しまふまで
とさくさと道頓堀の春は花
のぞき句なればさほ姫もあり

大矢數　第二十三

何匁

六天の雲や殘つて花に風　宜範
貌(カホチ)の卵歸る雁の音　西鶴
山は春大からくりに顯て　松意

蜑の腰縄霞引見ゆ　嘉雪
うらゝかに浦行旅の遣錢　夢現
浪の泡たつ茶でも酒でも　正直
はいらしやれ希にて逢た空の月　鶴吟
千年の内に山も色づく　歌吟
天人も袁へ懸り泪の露　執筆
ほろそかさがる布引の瀧
尋てはけふこそ見つれ鼠の巣
隱れ里より末の金錢
世中は命に替て欲が有
惡事は耳に入相の鐘
是は又千里の車雲に飛
梵天國より細引をひく
それしばれ淨土双六扇たらば
佛三尊中川の宿
ほそかねつかいすまして泥引に
用心時の木刀ひつさげ
しんかけの影面白き空の月

虛（ウカ）とあるくな萩の黃昏
厄病や身にしみ渡る時行風
大和の國よりいな事をいふ
伊駒山思ひも寄らぬ川違ひ
溝ほらうまで雨は降とも
御公儀の御觸きいた時鳥
牢人置な卯の花の宿
此あとは垣根の雪に馳走した
今に其下踏もとらずに有
行人は夢と成ゆく四十八
よもやなるまい陀彌の大願
木に餅はどこの世界を搜す共
しかた咄しやあの波の底
水の月兩頭の龜うかみ出
今年作りの酒はのみ勝
御はづかし色をかさぬる春日山
三月堂の末の谷〻
鶯も聲一ばいの所也

霞を過て金銀有たけ
買置の本は殘さず此藏に
大ひねと云米柳陰
道邊に立泊りてはわる臭ひ
小便の外人は人はて
會稽の耻を思へば樣子有
菓子つまんでは懷の月
飼ちんの尾花亂て咲にけり
霧立こめて大名乘物
十二人都をさしてのぼらるゝ
五條の店の作り山ぶし
夕貌の宿に祈禱がきかばこそ
片輪車は終になをらぬ
染返しやき返しても袖の色
客が違ふて蒲鉾の板
酒續き胸につかえて候へば
まづ四五日の暮は淋しき
杳音に風はすまたを吹せたり

のりたい時は馬が御ざらぬ
腰かけてやすませ給ふ六度迄
階のほる老の夕暮
月か光玉の御殿を今見る事
上野の秋や上樣の山
又伊賀は知行の稻葉下されて
鷹を遣ふと鳶をとらふと
雲霧がうろり〳〵と市に立
巾着きりや風の行末
飛螢尻を思へば大若衆
戀には靡け今竹之丞
其膚雪と申もおろか也
佐野の渡りは綸子か紗綾か
東路の末は殘して帶にせう
蛇たまし行果もなし
むごい事いかなる責に逢とても
あとより君は申まいもの
指あひの咄しの内の襟ひ

世間のやうす暫くまつて
月見花見町をはゞかる計也
持合せたる曲水の宴
鷄も爰であはせて見つく也
軍の首途有無の二つじや
生死の海今西海に趣て
さては筑紫に善導寺様
宗旨請よつて件の如く也
十年の内取逃闕落
其身をば阿波座とやらに任せたり
胸にたく火は燒酎のかす
傳へ聞枕に殘る德利を恨み
其外あるにむづかしき謎
興さます遊び所の夜が更て
おのれがなべをかつぎ物也
敷銀が付とてよべばあんな月
世上は戀の中の秋風
色に成草が草なら亂りよまで

二人連にて葦の葉の笛
敵討難波のうらを心懸
右は田蓑の島名乘たか
時行醫者鶴の毛衣脫替て
をれが請あふ千代のゆく末
御用まで散せはせまい峯の花
二重網はる青柳の糸

大矢數　第二十四

何橋

大矢數是にはづれし難波鶴　久永
むだ口叩水鷄の勢力　西鶴
くだり月舟は乘合夜は明て　西音
紅葉は近き終に見ぬ貌　以清
山里やあれは從弟の末の秋　淨水
つりを書たる文字の雁金　可吟子
霧の海懸つた所が面白　良有
敷の手つき一流の浪　安意

燒出しの鉢にて招く西の空　執筆
夫思ひたつ勸進ひぢり
坂本のかねが近年潰れたり
松は煙でおき搔の跡
冬籠る宿はさながらつめたいぞ
雪の夕の庭ではたらく
おしきせの袖打はらふ影もなし
聞度毎に同じ付合
膏藥の爰に奇特を顯して
月ばれが引西の海づら
二十四時おぼれて行し秋の事
皆雪隱に殘るしら露
爰で開く思案工夫も春の花
きゝ懸てきて弛す鑓梅
東風の風は常々手が長い
墨繪の猿よ自墮落な山
此朱印いざもろこしの人に見せん
上意を以て隅からすみまで

御物あがり今は毛拔や恨むらん
鼻紙袋におもはく一ばい
やれ氣付あとより戀の責くれば
冥途におもむく鬼も十八
秀衡が枕によりて力瘤
いか物喰の果は東路
毛をひいた憂目を見する鳥がなく
大願懸るそれぞ白木綿
もとよりも月は和光の影照し
きんかあたまや千々の秋風
下紅葉一ばい過す織部殿
飛子の名には奢たせんさく
三津寺の裏に伊達をばこかせたり
夏は干瓢秋はから掉
手の内が痛ながらも世を渡る
狂言綺語の修羅鼓打
あの姿知つた人とも思はれず
親子の代にはとも鑓もあり

屋形舟今は水とぞ成にける
からくり仕懸て夕浪の露
夫五體心の月は眞中に
秋の彼岸や正法の彌陀
花か峯それに雜て錢が降
名譽希代の春の夕暮
呼子鳥はねに替て毛が生へた
此山中や擣置の餅
姙まるゝ常盤御前も哀也
さて睦言は末の世がたり
引こうて彼上人を諫めんとて
無常の風が今に覺ぬか
味噌汁の味が替つた鳥部山
伊勢講の當屋立さらでのみ
帳箱をふりさけ見れば松原有
員せ方より進退は雪
方〻で懸つた事か夕嵐
踏れて來たりぶたれて來たり

點取は定なき哉夜の月
人の心は色〻の秋
酒のめば其片脇に袖の露
契りも今宵たいこ上蔦
念比に語り申せば只金じや
五段續けて寢ころうで聞
泣て見たり笑ふて見たり夜は明て
時の皷をならす半きち
したしめし是はさつ書に顯たり
茶はそなたから宇治の川霧
志しの秋こそ來たれ朝日山
月は淨土の直中照す
大悲の弓あたる所を覺たか
强盜たちまち雨や丸雪と
御せんさく右の品〻歸り花
子のない別れ作法の通り
弔の流れ灌頂あはれ也
帛燒香水けぶりたつ
笘の屋は神鳴ぎらひの住所
臍を隱して松風村雨
夫思ひたき付られて釜の下
桃の皮にて戀の染衣
今は又吉彌風とて時惠か
立騷ぎたる興中吟味
去ながら深手でなふて仕合じや
懸る所に氣違ひの沙汰
出家又貌を替て夜のとの
悟をひらく扇がさえて
おきゝやるかおきゝやるならば法の月
まづ今までは取て置秋
廈されぬ暮の稻妻姙みたり
傾城の名の葛城の山
越後町にちいさけれ共豐等寺
まだ巢立せぬ雲雀じゝめく
雲か花夕の詠空になる
あれ烏賊幟はやり出の風
蜘舞が命を懸て申やう
浮世といつば酢でも水でも

大矢數　第二十五

何皷

駟も舌に及ばぬ事ぞ大矢數　守之
螢飛んでは車四千句　西鶴
比は皐月前代未聞の空晴て　松綠
記錄のおもてつまびらか也　吉隣
彼卿もずいぶんまめにましませば　本靜
あとは覺えずちりけより外　一余
板つきへ月まで誘ふて仕興まるゝ　元尙
野山の色を二番續に　幸作
夕霧も結びを取て歸也　執筆
一文たして方引の末
是よりは睨きの奥に春の山
霞の籠る富士の人穴
蛇も時節をまつて出し懸る

歎きの中の佛の別れ
晝は旅夜は泊りて善光寺
淺間の嵩や火繩の烟
びつくりは遠近人も二つ玉
秋の行衛も目があつてこそ
捻出せば丸に一まいの蟲の聲
名殘おしめと月の明ぼの
すら〳〵とはや俳諧の花所
霞の衣脫だり着たり
勾當の坊聲計聞春の鳥
日向の國まで旅の思ひ出
擣米に味噌を添たる海ひしほ
入大工なり礒の松かぜ
願はくば只此雨の降らぬ內
山ほと〻ぎす聞たい所
五間口草の菴は資物か
出家の身なればそれから其もと
胡亂覺え釋迦一代の物語

つい寢入ぬる頭北面西
昨日のさては藥がきいたけな
宿屋の口鼻が自由にまはる
くら事の相圖をしたる夜の月
天の岩戸の奧のしら露
比は秋風の色立雨のみや
十二夙の御祈禱のため
月牌や譬へ其身は死なず共
只曉の油斷めさるな
徒步合羽盜人雨が降て來て
物見の松の陰に暫
あせ雫蟬の衣をぬぎ替る
中入よりも涼風の聲
大神樂神の御前に通夜をして
其ま〻告をまたんとて月
此度は商賣替て霧の海
米もあはねば醬油の露
花ちれば三五の十八走り算

とる者がない家櫻山
借錢はつもる所の雪きえて
爰を去事風の闕落
苦のあらぬ夫佛さへ虫喰齒
四十餘年は枕なり夢
大役もはらひ退ては我物じや
細少石岩石なごの玉
缺腋の天の羽衣泥なぶり
雨の降のに三芳野の里
時の鐘六田のあたり眞黑に
松は寂しき見世さしませう
白雪をそこへ散して大喧嘩
ふんだらま〻よ鳥の足形
月清き文字と云事はじまりて
露を算へて錢の取飽
盆節季是も浮世の慣也
うその實のなき魂祭
曾呂利めが彼海底へ飛で行

主の光りや金の瓢箪
或時は巾着となり根付となり
旅功者とは輕行にやる
あぶ付は命也けり佐夜の山
無事で渡つてあの大井川
五月雨に材木流す時もあり
是一つあり月は丸物
薄霧を分つ〻行ば通ひ盆
唯わり膝で千秋樂まで
棟に棟けふ上初て軒の花
春の夕風福原の京
鶯の笛聞事も有し世に
またる〻物はいたづら穿鑿
揚錢は二日拂に定まれど
まだ醒やらぬ付さしの醉
道橋をわたり兼ては蹉づく
其口上や浪の高聲
賣藥磯邊によする貝の蛻

一木見えたる松脂をたね
公事二親の代から子細の雨
先書つゞけてかけたりの鳥
囑託に雲の行衛はうさん也
足手は虎か男の尻弱
大磯を夜前通つて忍び月
うき秋ながらきる石佛
國所たしかに記す文字の雁
同行六人一錢たまはれ
踏迷ふ是から先は大江山
戻り馬かな沓懸の坂
けさまでは知らぬ小唄を聞たもの
名譽な人が宿替てのく
さく花の先はなほ〳〵勝手つく
養ひ分の少年の春

大矢數　第二十六

何番

時鳥聞しにまさる名鳥たり　西香
よき木のすかり盧橘の陰　西鶴
山は夏青磁の貌顯して　意閑
御物袋を出る朝風　西嵐
横雲は横柄らしく立にけり　西雲
月さへ構はざだまつたがまし　松山
そち故に一番まけて露を置　一與
稲葉を分て蕎取にやる　西尾
かけろくに秋風ぞふく夕間暮　執筆
やう〳〵打なす白川の關
はる〴〵と觀世新九郎身繕ひ
侍に似る供鑓がない
爰は又とらひで置うか渡し錢
三途川原の婆は留守でも
油斷すな地獄の釜をぬいて行
所へことはろ加賀に白山

權現は三十三年開帳に
天から降たこれ露の玉
胎内に其影添て月止り
たつた一度の戀草の色
花は連理比翼の鳥と約束を
起請のかため春の泡雪
東風かぜの手の有所殘すまい
拜ませ申愛染明王
高野遠し其外爰にも難波寺
末世の奇特常燈の影
一分が積り〳〵て千貫目
蟻の穴より新田のぞむ
和泉をば熊野參に見立きて
化物くさい牛瀧の山
錢箱に百物語と申ける
吟味を仕やれ器財か打越
聟入や祝儀の外の此礫
元來戀に惡まれて居
横紙に書續けたる文月夜
小鷹の行衛離れ島まで
霧の海蛇の目の舟を漕よせて
只見て遊山酒ずきの友
此町の太夫殘らず呼でこひ
砂と思へばかねの別路
齒を磨く隙を惜みて立にけり
五郎夢覺兄の面影
死さまに是ぞ氣疎き云替し
血を呑あふて金輪際まで
すこし瘡はれあがりたる竹生島
露は碎けて毒の波寄
十人は同じ枕に月更て
禰宜裝束やいせの秋の夜
旅芝居中の地藏の花盛
雲も霞も次第に立まい
合砥にすこし懸たる春の水
都に付てまはる鳴瀧

夕詠十六むさし果しなく
　あつたら際に何事か又
聞書の末の山〻面白く
　長いくら有沖の石まで
ふり袖は泪乾かぬ四ツ身裁
　また新枕長持葛籠
此度は伏見の里の太儀也
　奉賀帳とてのりの舟着
波の紋瓦に付る巴の影
　水は煙て燒餅の數
早起きてわるさ計の今朝の月
　尾花分行此町の犬
荒にける霧の海なる魚の骨
　妹にあづける臺所帳
いつ何日恨いふたか覺たか
　烟答へて灸の皮きり
信濃なる山の腰骨さすり寄
　遠近人もなんのにくかろ

一樹の陰一河の流のやくめ也
　さま〴〵つもりて十年の夢
地をかりて引結びたる草の庵
　まづしきは露泪な添そ
月は夜臺碓の音計
　身にしみ渡る堺の大道
初花は朱座のごとくに移ひて
　天下の建立玉垣の梅
轉れる鳥井二本に極つたり
　一首のこして髪で死なふぞ
飛鳥井の姫の心も其時は
　袖はひつたり泣れもせまい
剝うとも肌をばゆるせ戀衣
　よく〳〵思へば地獄も近付
見たやうな山の姿も八里の中
　ひらにこなたへ寄て御茶でも
志し有日表に腰懸を
　繼足しては佛さま見る

墨の衣一寸法師か哀さは
　はし懸より諷そこなふ
そも北野の晴を極めて都の月
　露は時雨の亭の額書
蔦紅葉はふた所が面白い
　成ほどふるい和田の笠松
殊に名所今時發句があらうかの
　風をしるしに追善の雲
三笠山出て二度あはぬ也
　彼仲麿が綸言は汗
咲殘る花や子供を想像
　葉風流模樣の藤の缺腋

大矢數　第二十七

何檀

星野はいさしらざ半分大矢數　善之
　二百五十石早苗とり月　西鶴
酌て又酒桶の雨頻にて　大鶴
　水かさまさる川崎屋殿　西次
橋抗も今は危く見えし時　西見
　平家の茶舟寄る計に　西金
有明の赤い田樂聲立て　西宗
　辛い嵐がふき替て秋　西利
夫命消そこなへば露の玉　執筆
　暮の螢が大飛をする
付合は澤の水上餘所にして
　青膏藥や觀音の慈悲
ちりけもと今此婆婆に腫上り
　ぶたれた拍子に蘇りする
此道は縱內裏も用捨なし
　天狗の羽風何時かふく
石臼もとられて行し山〻は
　幌に仕懸し松の葉の月
此度は討死極て駒迎へ
　白裝束の袖の夕露
花の帽子またぬれのある後室さま

珠數くる片手しめて行春
石なごの玉にもぬける雪消て
　隣の佐吉鶯の聲
こはり腹またるゝ物はやれ藥師
　浮世はしれぬ風の行末
見ぬ島に此度懸る海士小舟
　波の白玉似せかねをふく
同類や同じ心の友千鳥
　妹がり行く小半の酒
國も又枕ならべて傾いて
　千里の所夢の明ほの
虎の住竹の林も杖と成
　老後の思ひ出十懐紙の花
暮の月名譽朧の光さし
　判じ物より東風かぜの空
謂れざる浮世に隙な者すみて
　我身上や人の身の上
長堤嫁といふ字を謗り行

今爰元に祭まつやら
時鳥口を叩て辻放下
　一度は歌ふに泪なそえそ
心中に重四朱三を思ひこみ
　さては首たけ加茂川の水
据風呂に三尾谷の神は顯れたり
　貌は見せずあらたなる月
靈寶は霧と雲との二重とて
　望みに任せて秋雨がふる
兩吟を思ひ定めて懸る時
　常はよい中風かはる也
抱れたる幽靈是迄顯れて
　筐の扇御腰の物まで
年を重ね生の松原詰奉公
　自然の時は海の中道
筆取て少し早書覺たか
　走懸つて七夕の歌
これ中まうしといへば月更る
　落して置た庭の白露
花若に親がなふては叶ふまじ
　明暮此事さく櫻川
ぬるみゆく水縄打て際目論
　物にかまはぬ尼蛙まで
春の風障子の穴をつゞくりて
　早き手づまに山を出します
夫冥途劔を爰にうつさるゝ
　科ある者を懼なりけり
凝海藻微塵こばいに碎れて
　此一騒ぎひや酒のうへ
皆かこる十人よふて何程ぞ
　契りの寢卷枕さへない
小屏風のあとを扣て借に行
　野懸と申殊更に山
出る月も一つは所の外聞じや
　提灯とほせ稲妻の影
定なき世は町衆も野邊の色

是からこれは草鞋田也
詠やるあれは比翼の鳥懼
　臆病者よあみ笠の露
譬ば月辰めの門は大事かさて
　世間の秋は皆からくりじや
水學が水は忽湯となれば
　目をあらふたり足洗ひ時
暮初て泊り定むる通し馬
　關の東の二軒目がよい
逢坂や椙の葉白き餅はもち
　今や引らん豆の粉の音
身の行衛納所坊主の塗坊主
　二六時中の鑰を預る
或は又慈悲の心の籠拂
　諸鳥の音まできけば百日
羹の鯉といふ物喰ひ飽た
　淀に親類大坂に舟
又從弟めぐり〳〵て水車

うら島が子が賣てのく家
帳箱を明て悔しき今ははや
申さぬ事か後生のせんさく
九ヶ國を夕の雲となし給ふ
ふり續いたる舟の日和見
花はさけど手遠き山は詮もなし
是からさすぞ藤の黄昏

大矢數　第二十八

何石

的は扇是俳諧の要也　正友
進出たる執筆黒雲の峰　西鶴
菓子喰す山時鳥口を明きて　種成
草の庵に虫が動くは　重次
瓦落〳〵初て鳴た春の空　西明
梅が枝匂ふ大用小用　一永
添乳して敷物もなし朧月　一雪
あしたの日和はや思ひたつ　愚望

鴈の友ぬけう談合が極て　執筆
ひやうの頭の菊の花さく
貧乏鍛冶田蓑の島に住なるゝ
火ふく力も五月雨の空
飛螢せめて世界に我なくば
横平づらを雲の上まで
幅廣の虹の大島自慢して
追付身上風の行衛は
雜木燒富士の煙が多いけな
泊り大勢あしがらの露
初めから寢道具をかる夜の月
けふ鵲のはしを咄して
思はくは是で浮世の花をやる
小半までも霞はいらぬ
提させて春の寢覺の辨當に
あらしの響く竹田成とも
醫者の儀は引肩ぬいで肝をいる
此御家中の家老へのつて

今度山金のつるを見付たり
抓取して極樂淨土
迦陵頻或は鷲が舞さがり
戸樋を仕懸て二筋の繩
銅や若この細工取得たらば
天滿に屋敷京に御手懸
夕暮は喧嘩のたねの女夫池
寢耳に水をさす合點也
影はまだか更行月に料理好
亭主媚かす薄亂れて
根付には小野の小町が昔の躰
無疵を二つ玉津島姫
引がねに和歌の松原響して
夫落懸る嶌といふ物
大臣が大の眼に角をいれ
來る筈しつてどこへかしたぞ
別れ路や手形も取ずかねの聲
煤掃餅搗ねんごろな中

足を空に御用の事が有ならば
庄之介とて究竟の者
見立ては小草履取を置れたり
此比ちく〳〵藥がまはつて
月も花も二度の節季にしつかりと
霞を染て帳をけす筈
五十年縱彼岸に當る共
盧齊は見ざる夢の世の中
なら坂や聲が止つて哀也
仕形計を時雨降行
印むすぶ顏かと見えて神無月
蜘切丸をぬいて懸つて
驚かす合點のゆかぬ枕なり
只下屋敷は犬の通路
爐置臺の君を誰ぞか心懸
源氏平家の文の取やり
雁金か首の骨こそ强けれど
相撲のかはり雲の下帶

山の色赤澤山を夕詠め
くだれば石に乘懸の上
爰に宰府爰に刀を取まはし
どうやらすまぬ夜嵐の音
湯豆腐があたらう筈では有まいか
碎けて物を卵素麺
世界の圖世界の貌思ひ初
まさに七度は話ひてぞみる
枝は連理木遣傳兵衞を雇きて
新地の所取立て寺
鐵眼のちいさい口からふかれたり
夜も深更に秋の灯
笑ひのたね是は見ぬ世の文月に
若い時には吉野から露
花をふんで金の草鞋踏切て
役の行者や霞わけゆく
其あとは祈り祈禱の春の風
氷消えては傷寒そうな

かさね着の袖に移ふ波の紋
まづ此家は御内儀でもつ
綿賣や關東までも隱れなし
利根な顏つき平野目がきく
其俤上人樣にきはまりて
脈があがつて二度かへる
臆病な心でのるな舟の上
既に一門何ほどの事
五貫目を二十餘年になし崩せ
今度の默論見十方旦那
太夫もと月は都に二つまで
熨斗に鰹に伊勢の濱荻
献立も所によりて露ちりて
渡りて鳥のはし鳴す音
すえさすそゞと云ふ文字こそ灸なれ
孔子嗅うて寄懸る山
死あとを思へば夢の枕蚊屋
蚤がせゝれば寢ても居られず

花舟や手のひら程な蓮の上
布の引摺青柳の糸

大矢數　第二十九

何女

詠入て人魂降けり雪の風　來雪
杓の貌は氷る山陰　西鶴
嶺の雲寄る敵を待請て　梅吟子
さて二段目は松の村立　友吟
階にのぼりて四方を見渡せば　松吟
民の竈や食時分也　友圃
用があらば月も後ほど出られよ　葉吟
留守をばつかふ秋風の聲　宗吟
物節季鴈の心はちいさうて　執筆
芥子をちらする腰の白山
胡麻餅や松は本より烟らん
千とせの鶴の子共たらしに
今はやる唯一ふしに雅樂ノ助
じゆん〳〵十郎兵衞が鬼の形も
親の親安達が原へ尋行
磐手しのぶに一休口あく
波爰に燒蛤をくはれたり
誰ぞこひかし夕寂しき
有付けて油嗅いも面白い
尻目遣ひや窓蓋の紙
乘物はぬれに極る花の雨
なんでも合點春の夜の月
知れね字を尋ぬるための朝霞
符帳といつぱ雲のは袖に
晒布二端續きの瀧なれや
善の網引鐵拐が峯
夫息に忽三尊顯れて
小風呂の内の闇もたすかる
伊勢參人の面はしろ〳〵と
事欠の色明星が茶屋
袖ひけばあなたへちろり此方へも

夜分の外の鼠の嫁入
三介が是は提灯もつ所
一期の別れ今は泣けさて
堅まりが終に耗いて明の月
上戸の石や露の玉ちる
我戀はしほ干初汐飛魚を
山はあれども京は退屈
大佛の釋迦に今迄御厄介
八千度こそ何かせ角かせ
世中は手紙計で埒があく
月次の會あとのしら波
立田山峯續きなる奈良茶出せ
莨盆には飛火の野守
三日目の芭蕉は果て今幾日
太皷は神鳴秋雨がふる
こんな時露も流せよ芥川
背の垢や浪の夕月
身たしなみ咲ぬる花も有物じや

伽羅とめさせて草の下萠
詠やる雉子の床が近付は
髪を結する雲の浮橋
田舍者星を目當に登りたか
望の矢數思ひもよらず
油屋に半ば勤めて御暇
吾妻に下りて駕籠にても昇
氣がせくか關のこなたを夜の内に
去手くだにて作り山ぶし
身の上のいのり祈禱もきかばこそ
捜してみれど喰物もなし
是ほどに二年が内に住あれて
妹が垣根は瓦落〳〵ぐはらり
月うすき戀のぬれ衣下り腹
一葉ちつては淀の川舟
用が有折ふし秋の末つかた
扇が廢れば頭巾を賴む
茶引坊其松原を詠やる

木曾殿の御内に隙有がある
長寢して朝日將軍奢也
浮世の費食がさむるに
風の前一つも散すな木屑鮨
油火までも臺所帳
たまか成遠里おのこかしこまり
外は構はぬ萩の番する
聲立て角め鹿のめをお申しやるか
童部どうしや十五夜の月
牛若も花は盛に其姿
思はくで切青柳の髪
春の風高う吹たら落さうぞ
用心めされ火皿浮雲い
唯は寢て又慰て寢ずの役
碁をうつ事は吉例がある
白黑の濱の眞砂はつきすまじ
をれが覺た本の分でも
大形の浮世の事は埒があく

醫者が三人出家が三人
此里の孔子の孫を呼んでこひ
枕に殘る算用をする
八雲たつ中間普請も出來にけり
堤の頽れ伊奘諾伊奘冊
此中は通ひのたゆる月の舟
菊の匂ひや當銀の酒
山人に霧と雲とが重なれば
無音の至りおのづから也
御存知の雪裏門は淋しくて
七日が間渡邊が家
兵は胴骨すべてすえにけり
ちつともこぼさぬ天目の水
花の香や唯鬢付の匂きて
扈從にしたてる少年の春

大矢數　第三十

壺何

塩竈や爐邊にうつす炭頭　西知
三津の浦より鴨の羽箒　西鶴
小細工がきけば立浪白砂に　西通
どこでも口を春過て夏　西櫻
表店藤の茂りはよい勝手　西堅
底さへ匂ふみぞの行末　西秋
枕の月夜も深更に蚓なく　西雲
通るは誰じやあしの花さく　西水
物の名も所〻の關の秋　執筆
これがなくてはふところ鏡
供部屋に一日の日を暮し兼
思ふ便もせばき舟路に
足立ぬ神のありさまむごい事
夫片削の摺粉木もない
人間のはじまりしより淨瑠璃を
水は南に西はぬれ事
傘や雪晴ね共飛で行
或夜の月に化物屋敷
今まではのきぬといふて波の露
霧の海邊の川太郎めが
珍しき花を搜して濱一ばい
春の價や一文の錢
乘燭も空にのぼりて薄霞
成ほど咨い人の山住
茂りぬる枝は藤屋の市兵衛か
悪銀などを見ぬ者のため
浮世茶屋やうすがあつて立破り
玉の床なる疊ちり〳〵
邯鄲の或日は責て見に行ん
翁の面は老やしぬると
此里に事傳つて練供養
生もかへずにとうとい人〻
大名の御手が懸つて產出して
戀の重荷や當座に千石

月の弓ひくてあまたに通したか
つき物忽逃てゆく秋
あはう狂ひ霧重つて友達故
一つ殘した山でもたまらぬ
大地震神の力もさあ爰じや
葦原抑泥の海なり
其時天鳶絨染も一定まらず
唯數羽織子持すぢ引
うき思ひ燃る所の火消番
手懸がしのぶのほり階の子
有やうに責て成とも問はいでは
いつそにみち〳〵秋の初霜
時代蒔繪月の形も幽也
色に成ゆく東山見る
清水の花の盛は人たらし
枯たる木にもやいて霞て
已れまで身に懸らねど鳴雉子
住馴た野を池に堀る〻
我等事思ひながらも國の守護
云名付あるそれはかまはず
何もかも親仁まかせの戀の道
年代記をも取越て文
流れをば立る貌も本は猫
眞葛のしけり是ぞ思ひ葉
薫りぬる風の便につけ屆け
螢があぶない火を持てぐる
あこがる〻へうきん玉と思へども
暮の睦言半分はうそ
三五夜の月は出次第けふの月
澁地くらるの食椀の露
初紅葉詠に續く山折敷
男鹿の行衛宿替の跡
賴みますと聲聞時ぞ哀なる
母にあたりは鹽ふんで今
一子寒し波の車を押兼る
龍宮おもき長持の底